

見習い忍者 ミジュマル

海音 (みおん??ミジュマル)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

忍者を目指すミジユマル：ミジユスケ

そしてその見習い忍者仲間のミジユナ

この物語はこの2人の忍者としての日々を

書き綴ったお話です。

目次

卷之一	見習い忍者	見参!	1
卷之二	体力作り	駆ける!	5
卷之三	脱出作戦	ドロロン!	10
卷之四	病気	発病!	16
卷之五	休日	買い物!	20
卷之六	病	正体!	29
卷之七	海	水遁!	37
卷之八	記憶	喪失!	43
卷之八之五	恋話	暴露!	54
卷之九	料理	講習!	63
卷之十	試練	忍ぶ!	71
卷之十一	転入忍者	参上!	81

卷之十二	迷子	案内!	89
卷之十三	カラクリ忍者	登場!	
98			
卷之十四	一夜	羽休み!	107
卷之十五	夏祭り	天下花火の術!	
123			
卷之壱	「長編一	伝説侍」	138
卷之十六	笑い日	祝い!	195
卷之十七	入れ替え	パニック!	
209			
卷之十七	妹	帰還!	225
卷之十八	宿敵	帰省!	234
卷之十九	幼馴染	転入!	241

卷之二十	短編	お話集!	247
卷之二十一	発熱	看病!	254
卷之二十二	遊園地	作戦!	261
卷之二十三	悪党	襲撃!	272
卷之二十四	事件	聴取!	284
卷之二十五	茶屋	働く!	294
卷之二十六	搜索	誕生日!	303
卷之二十七	台風	一過!	315

卷之一 見習い忍者 見参!

ミジユスケ「先生!今日の授業はなんですか?」

【ミジユスケ 忍者見習いで失敗ばかりしている。

負けず嫌いで優しい性格 たまに天然なところ、

抜けているところがある。ミジユナに1人前の

忍者として認めてもらおうと努力する頑張り屋!】

ミジユナ「見たらわかるでしょ?今日は苦無の使い方を学ぶのよ?」

【ミジユナ ミジユスケよりも実力があるくノ一

天真爛漫な性格で 頑張り屋のミジユスケを

かげから応援している】

ゲコガシラ先生「うむ。その通りだ!今日の授業は苦無の

使い方を教えようと思っている。」

【ゲコガシラ先生 ミジユスケ達に忍術を教える先生

普段は厳しい先生だが実は生徒思いの優しい

アメモチ先生 チョーク投げが得意】

ミジユスケ「先生！苦無って投げるもんなんですか？」

ゲコガシラ先生「うむ。いい質問だな…」

苦無は元々投げるものではない。忍者が忍者としての動けるように

サポートをする道具であって本来投げるのは手裏剣だ」

ミジユナ「では？なんで苦無を投げるんですか？」

ゲコガシラ「ふむ。苦無を使った方が命中率を上げられるからだ」

ミジユスケ「どういうこと？」

ゲコガシラ「手裏剣を投げれば4つの刃先のどれかが相手に当たれば傷を当てられる。だが苦無は1点集中の武器。これで練習をすれば命中率を上げられる。そして練習で使うなら本番でもという

ことでここでは苦無を使っている…」

ミジユスケ「なるほど…」

ゲコガシラ「各自自分の苦無を持っているな？」

とりあえず藁人形があるだろう？それを敵だと思つて練習！はじ

め！」

みんな言われた通りしている

ゲコガシラ「みんないい感じだな…」

ミジユスケ「僕はどうですか！先生！」

ゲコガシラ先生「うゝん：君は苦無の扱いは良い：」

ミジユスケ「じゃあ！」

ゲコガシラ先生「だが：ターゲットを仕留めるスナイプ力がない：」

ミジユスケ「つまり的当て？」

ゲコガシラ先生「あの子を見てみる？」

ミジユナ「はっ！」

3つ投げた苦無は3つとも真ん中に当たった。

ミジユスケ「僕もあれくらい出来ます！」

ゲコガシラ先生「ん？やってみよ！」

ミジユスケ「はっ！」

ミジユスケの放った苦無は外れてどっかにいった

ミジユスケ「わあく！！大切な苦無がく！！」

ゲコガシラ先生「大切な苦無なら投げな！」

ミジユスケ「だって僕の苦無は全部大切な

オードーメイドの苦無なんだから！」

ミジユスケの苦無はホタチの形をしている。

ミジュスケ「わく!! 僕ちよつと探してくる〜」
ミジュナ「全く世話が焼けるわね…」
ゲコガシラ先生「やれやれ…困った生徒だ…」

卷之二 体力作り 駆ける！

ゲコガシラ先生「今日は基礎体力をつけるために
マラソンだ」

ミジユスケ「マラソン？」

ゲコガシラ先生「ここから東へ向かいぐるぐつと森を
一周して西から帰ってくる」

ミジユスケ「なるほど！」

ゲコガシラ先生「そして2人1組でペアを組んで行ってくれ。
これがペア表だ」

ミジユスケ「どれどれ：」

ミジユナ「私とペアみたいね」

ミジユスケ「一緒に頑張ろう！」

ミジユナ「まあ全力は尽くします」

ゲコガシラ先生「では今から1時間以内でクリア
しなさい。ちなみに1時間以上かかった

「者は宿題があるから頑張りなさいよ?」

ミジユスケ「宿題?!先生!なんか妨害にあつたらどうするんですか?」

ゲコガシラ先生「妨害も授業のいつかんです。

余程のことでない限りは時間厳守です」

ミジユスケ「はい…!」

ゲコガシラ先生「では他に質問はないな?初め!」

森の中…

ミジユスケ「意外と簡単だね」

ミジユナ「油断は禁物よ」

ミジユスケ「と入っても特に何も…」

ズルズキン「おい!ここは俺のナワバリだ!立ち去ってもらおうか!」

ミジユスケ「えっ!ナワバリ?!」

ズルズキン「そうだ!」

ミジユスケ「どうもすいませんでした。では…」

1歩下がった

ズルズキン「おっと…そこも俺のナワバリだ!」

ミジユスケ「えゝここもゝ？広いナワバリで1人って寂しくない？」

ズルズキン「大きなお世話だ！黙ってる！」

ミジユナ「ナワバリねえ：でも私たち急いでるから！通してもらおうわ！」

ズルズキン「そうはさせるか！」

ミジユナとズルズキンが戦っている

ミジユスケ「僕も戦うよ！」

そこへミジユスケも参戦する

ミジユナ「今よ！ミジユスケ！トドメを！」

ミジユスケ「分かった！」

ミジユスケがトドメをさそうとした時

ズルズキン「くっ！」

ズルズキンがミジユナに攻撃した

ミジユナ「きやつ！」

ズルズキン「ぐあゝ！！」

ミジユスケ「ミジユナ！！」

ズルズキン「バタンキュー…!」

ミジユスケ「大丈夫? ミジユナ?」

ミジユナ「足をかすめただけ…うっ…」

ミジユナ「そのケガじゃ無理だよ」

ミジユスケはミジユナをおんぶした

ミジユナ「?!」／／／

ミジユスケ「さあ行くよ!」

ミジユナ「これじゃ間に合わないよ!

あたしを置いていって! ミジユスケだけでも

間に合ってよ!」

ミジユスケ「大丈夫! 間に合う!

ミジユナを置いていったりしないよ!」

ミジユナ「…!」ドキッ／／

そして…

ミジユスケ「ほら! ギリギリ間に合った!」

ミジユナ「ほんとにギリギリ…」

ゲコガシラ先生「二人とも宿題決定だな…」

ミジュナ「えっ?!」

ミジュスケ「な、何故ですか？」

ゲコガシラ先生「東から出て東から帰ってきてどうする!」

ミジュスケ「えっ?!方向間違えた!!」

ミジュナ「あなたねえ…」

卷之三 脱出作戦 ドロン!

ゲコガシラ先生「今日は脱出訓練をする」

ミジユスケ「脱出訓練？」

ゲコガシラ先生「敵に捕まった時に牢屋などから

脱出するための訓練だ」

ミジユスケ「でも俺達はまだ忍法は使えませんよ？」

ゲコガシラ先生「そう。この訓練は忍法は使わぬ…

忍術を使わず脱出するんだ…では頑張れ！」

牢屋内

ミジユスケ「どうやって抜け出そう…」

床に脆いことに気づく

ミジユスケ「ん？ここ掘れば抜け出せそう…！」

ミジユスケは床を苦無で掘ったが下にも

牢屋があり、ミジユスケは落ちた

ミジユスケ「うわぁー!!」

ミジュナ「えっ?!」

下の階の牢屋にはミジュナがいて

ミジュスケはミジュナとぶつかった：

ミジュナ「何してくれるよ！ミジュスケ！」

ミジュスケ「ご、ごめん：」

ミジュナ「あー!!どうしてくれるの！ミジュスケが落ちてきたおかげで出られなくなったじゃない！」

ミジュナは石を削って牢屋の鍵を作り

脱出しようと鍵穴に入れ、回そうとした時に

忍者ミジュマルが落ちてきたので

鍵穴に鍵の先端が入ったまま折れてしまっていた。

ミジュスケ「他の脱出方法を探そう」

ミジュナ「全く：」

ミジュスケ「上の牢屋なら鍵穴入るよ？」

ミジュナ「無理ね、ミジュスケが落ちてきたから

上の地面がやわらかくなってとても登れそうにない」

ミジュスケ「壁に穴を開けて外へ出るのは？」

ミジュナ「それも無理ね。あたしの苦無と

あなたの苦無牢屋の外にあるんですもの」

ミジュスケ「えー！なんで！」

ミジュナ「あなたのせいよ！」

落ちてきたこと衝撃で二人共苦無を牢屋の

外に落としていた

ミジュナ「…他には…ないわね…」

ミジュスケ「つてことは脱出不可能？」

ミジュナ「そうなるのかしら…」

ミジュスケ「じゃあ先生が来るまで待つか…」

ミジュナ「先生は明日まで来ないわよ…」

ミジュスケ「…」

ミジュナ「まあ気長に待ちましょう…」

ミジュスケ「うん…」

夜…

ミジュナは寝ている

ミジュスケ（どうすれば………そうだ！上の階の地盤が

脆かったってことはこの辺も脆い！つまり

壁に穴を開けるのは無理でも牢屋の鉄柵自体を

取り外すことは…)

この牢屋の鉄柵は壁にはめ込むタイプなので

取り外すことは意外に簡単だという

ミジュスケ「できる！」

ミジュスケは牢屋の鉄柵を外すべく

土を素手で掘っていた

ミジュスケ「っ！っ！ふう〜」

ミジュナ「クシヨン！」

ミジュナはくしやみをした。

ミジュスケ「!…」

ミジュスケ（寒いのかな？）

朝…

ミジュナ「ふあ〜…ん？」

ミジュナにはミジュスケのスカーフがかけてあった

ミジュナ「あつ…」ドキッ／

ミジユスケ「っ!っ!」

ミジユナ「?!まさか一晩中掘ってたの??」

ミジユスケ「ん?起きた?うん」

ミジユナ「大丈夫なの?寝てないんじゃない?」

ミジユスケ「寝てないけど元々は俺の

せいだから。俺が責任をとらなくちゃ!」

ミジユナ「!そ、そう:」

ミジユスケ「それにもうすぐで出れるよ!ほら!」

ミジユナ「ホント!?!」

ミジユスケ「うん!これでこの鉄柵を外れば!」

ガコン!

ミジユナ「?!え?!」

ミジユスケ「あっ!やばっ!」

ミジユスケが鉄柵を外した瞬間、

脆かった天井の土が落ちてきた。

ミジユスケ「うわあー!」

ミジユナ「こうなることが予想できなかったの!?!」

ミジュナとミジュスケは土に埋もれた
そしてそこに牢屋の鉄柵が倒れてきた

ミジュスケ「うわあー！」

ミジュナ「…あなただけに物事を任せると
ろくなことにならないわね！」

ミジュスケ「で、でもこれで脱出できるよ…」

ミジュナ「この土から出られたらね…」

ミジュスケ「鉄柵が…お、重い…」

卷之四 病氣 発病!

ミジユナ（最近…あたしはおかしい…

ミジユスケという時…たまにドキツとなる…

これは風邪…じゃないわね…こんなに長く続く風邪は聞いたことがない…では…病氣？なんの病氣…？）

ということミジユナは保健の先生に相談を試みた…

ミツハ先生「えっ？あなたが病氣？」

ミジユナ「はい…」

ミツハ先生「どんな病氣なの？」

ミジユナ「え〜つと…たまにドキツとして

少し息苦しくなる病氣です…」

ミツハ先生「…それって…」

ミジユナ「なんですか？」

ミツハ先生「フラフラ病じゃないかしら?!」

ミジユナ「フラフラ病？」

ミツハ先生「詳しいことは私は分からないけど…とにかく
今すぐ安静にした方がいいわ！」

ミジユナ「わ、分かりました！」

部屋にて

ミジユナ（私はこのまま死んじやうのかな？

でも…なんでミジユスケといるときだけドキツとする

のかしら…。ミジユスケが原因？）

（ノック） コンコン

ミジユナ「?はーい」

ミジユスケ「ミジユナ、大丈夫？」

ミジユナ「…ミジユスケ？」

ミジユスケ「ミジユナが病気だつて聞いたんだけど…大丈夫なの？」

ミジユナ「あなたのせいだけどね…」

ミジユスケ「えっ?!なんで俺？」

ミジユナ「知らないわよ」

ミジユスケ「?、?、まあいいや、リング持ってきたけど食べる？」

ミジユナ「…頂くわ」

ミジユスケはリンゴの皮を剥いた

ミジユナ「意外ね。ミジユスケって料理できるの？」

ミジユスケ「うん。手先は器用だからね！」

ミジユナ「そう」ドキッ／＼

ミジユナ（！まただ…なんなんだろう…これは…）

ミジユスケ「できた！どうぞ！」

ミジユナ「ありがとう」

しゃくしゃくとリンゴを食べる

ミジユスケ「横になって寝たら？」

ミジユナ「ありがと、でもそんな辛いから」

ミジユスケ「ダメだよ。体が悪い時は安静にしてなきや！」

ミジユナ「そう…でもあたし眠くないわよ？」

ミジユスケ「横になってれば寝れるよ」

ミジユナ「寝れないって…」

ミジユナは横になった

ミジユスケ「どう？うとうとしてきた？」

ミジユナは寝ていた…

ミジユスケ「早っ！…良かった…元気そうで」

そして数時間後…

ミジユナ「…んんっ？ふわぁ…寝ちやつてたわ…ん？」

ミジユスケはミジユナの布団にもたれかかっていた

ミジユナ「?!」ドキッ

ミジユスケ「…ん？あ、起きた？どう？病氣治った？」

ミジユナ「何故か悪化したわ！出てって！」

ミジユスケ「えっ？えっ？なんで??」

ミジユナ「一体この病氣はなんなの…？」

ミジユスケ「まあ元気そうだったからいつかな？」

卷之五 休日 買い物!

休日のとある日：

ミジユスケはミジユナと一緒に歩いている

ミジユスケ「なんで俺がこんなことを…」

ナレーション「数時間前：」

ミジユスケ「もつと体力を付けなきや！」

ミジユスケはマラソンをしている

ミジユスケ「もつと集中力をつけなきや！」

ミジユスケは大きな岩を持っている

ミジユスケ「もつと命中率を上げなきや！」

ミジユスケは手裏剣を投げている

ナレーション「がミジユスケの投げた手裏剣は」

ミジユナ「えっ?!」

ミジユスケ「あっ！」

ナレーション「ミジユナに当たりかけた…」

ミジユスケ「なんでミジユナがここに?!」

ミジユナ「まずは謝りなさいよ…」

ミジユナは手裏剣を咄嗟に避けたが勢いで
転んでしまっていた。

ミジユスケ「あつ、ごめん!」

ミジユナ「ごめんと思うなら買い物に付き合つてよ」

ミジユスケ「えー!なんで?」

ミジユナ「あなたの手裏剣のせいであたしの服

汚れちゃったんだけど…?」

ミジユスケ「…分かったよ…」

ナレーション「と、現在に至る…」

ミジユスケ「なんで俺がこんなことを…」

ミジユナ「文句言わない」

ミジユスケ「…はあ…俺は休日間に特訓したかったのに…」

ミジユナ「原因はあなたの不注意でしょ?」

ミジユスケ「そうだけ…」

ミジユナ「まずは洋服を見に行くよ?」

ミジユスケ「へ〜」

ミジユナ「まずはこの汚れた服を何とかしなきゃ…」

街

ミジユナ「とりあえずこれにしようかな？」

ミジユスケ「ミジユナってそういうの着るの？」

ミジユナ「なに？ 着ちやいけない?？」

ミジユスケ「いや別に着ちやいけない訳じゃないけど…」

ミジユナ「じゃあいいじゃない」

ミジユスケ「なんか機嫌悪い？」

ミジユナ「そりや服を汚されれば機嫌だつて悪くなるよ…」

ミジユスケ「ごめん…」

ミジユナは服を着替えた

ミジユナ「どう？」

ミジユスケ「お〜」

ミジユナ「似合う？」

ミジユスケ「意外に似合ってる」

ミジユナ「意外ってどういう意味よ…」

ミジユスケ「いや、似合ってるよ」

ミジユナ「ほんとかしら…まあこれでいっか…買ってくる！」

ミジユスケ「うん。」

ミジユナは会計を済ませて帰ってきた

ミジユナ「さて次のお店行くよ？」

ミジユスケ「え！終わりじゃないの？」

ミジユナ「まだまだだ！今日一日は付き合ってもらおうよ？」

ミジユスケ「え…」

ミジユナ「そういえばミジユスケの休日は

特訓ばかりなの？」

ミジユスケ「うーん…特訓以外のこともやるけど…

基本は特訓だね」

ミジユナ「そっか」

ミジユスケ「あ！ミジユナ！たい焼き食べよう？」

ミジユナ「うん！食べる！」

ミジユスケとミジユナはたい焼きを食べている

ミジユスケ「美味しい！」

ミジユナ「ほんと！美味しい〜！」

ミジユスケ「ミジユナ？ほっぺにあんこがついてるよ？」

ミジユスケがミジユナのほっぺにあるあんこを取ってあげる

ミジユナ「あ…ありがとう。」ドキッ

ミジユスケ「次はどこのお店に行くの？」

ミジユナ「とにかくいろんなお店に行くよ？」

ミジユスケ「疲れそう…」

ミジユナ「これも特訓と思ったら？」

ミジユスケ「…そうするか…」

いろんなお店にて

ミジユナ「これどう？」

ミジユスケ「うん！にあうよ？」

ミジユナ「なんで疑問形なのよ…」

いろんなお店にて…

ミジユナ「これいいなあ〜！」

ミジユスケ「いいと思ったら買ったらいんじゃない？」

ミジユナ「そうね」

いろんなお店…にて…

ミジュナ「ちよつとお会計してくるからちよつと待ってて」

ミジュスケ「うん。」

ミジュナはレジに向かった

ミジュスケ「…ん？これ…」

ミジュナはレジから帰ってきた

ミジュナ「ただいま。あれ？何か買ったの？」

ミジュスケ「うん。ミジュナに」

ミジュナ「えっ？くれるの？」ドキッ

ミジュスケ「うん。お詫び！」

ミジュナ「ありがとう！」

ミジュスケはミジュナに貝殻と

真珠のアクセサリーをあげた

ミジュスケ「もう終わり？」

ミジュナ「うん！帰ろう？」

帰り道

ミジュスケ「この飲み物美味しいね」

ミジュナ「今街で流行ってるんだよ？」

ミジュスケ「そうなんだあゝ」

ワルビル「おい！お前ら」

ミジュスケ「ん？」

ワルビル「その荷物を置いていけ…」

ミジュスケ「嫌だ！」

ワルビル「怪我したい？」

ミジュスケ「したくない！」

ワルビル「じゃあ大人しく…」

ミジュスケ「聞かない！」

ミジュスケとワルビルが戦い始めた

ミジュナ「ちよつと！あたし荷物があつて

戦えないんだけど！」

ミジュスケ「俺が戦うからいいよ！」

ワルビル「調子に乗ってくれてるみたいだな！」

ミジュスケはワルビルに苦無で近接攻撃をしている

ワルビル「くっ…！」

ミジユスケ「トドメだ！」

ミジユスケは3つ手裏剣を投げるが3つとも当たらなかった

ミジユスケ「ありや？」

ワルビル「なんだ…それは！」

ワルビルはミジユスケに攻撃をした

ミジユスケ「わっ！」

ワルビル「これで終わりだ！」

ミジユスケ「今だ！」

ミジユスケは近距離で苦無を投げた

ワルビル「ぐわあ！」 バタンキュー

ミジユスケ「ハアハア…一体なんなんだこの人…」

ミジユナ「あなたね…」

ミジユスケ「ん？何？あ…」

ミジユスケがさつき外した手裏剣は

ミジユナの服を切り裂いていた…

ミジユナ「もう!!バカあ!!!」

ミジユスケ「ごめんなさあくい!!!」

ナレーション「ミジュスケは次の休日も
買い物に行くのであった…」

卷之六 病 正体！

ミジュナ（あたしの病気は最近…悪化している…
前よりドキツとする回数が増えている…）

ミツハ先生「ミジュナ？病気はどうですか？

治りました〜？」

ミジュナ「いえ…それどころか…もつと

悪化しているような気がするんです…」

ミツハ先生「う〜ん…もつと詳しく状況を

教えてくれないかしら？どんな時にドキツとして
るの？横になつてゐる時とか〜走つてゐる時とか〜」

ミジュナ「それがミジュスケといるときに…胸が
ドキツとするんです…」

ミツハ先生「なるほど…ん？それって…」

ミジュナ「心当たりが？」

ミツハ先生「うふふ…それって！恋よ！」

ミジユナ「こい? なんの病気ですか…?」

ミツハ先生「まあ…病といえれば病ね…」

ミジユナ「そ、そうなんですか?」

ミツハ先生「恋の病は誰かを好きになつたり

するこで発病するのよ」

ミジユナ「でも、あたし…誰かを好きに

なつたことなんて…」

ミツハ先生「あら、気づかないの? いるじやない1人」

ミジユナ「……?!?!」もしかして…ミ、ミジユス

ケの事を?! あたしが?!」

ミツハ先生「そうみたいね」先生はクスツと笑う

ミジユナ「そ、そうだったんだ…」

ミツハ先生「私の話じゃなくてあなたの話よ?」

ミジユナ「それでこの恋の病つていうのは

どうやつたら治るんですか?」

ミツハ先生「うゝん…諦めるか…もしくは…」

ミジユナ「もしくは…?」

一方ミジユスケ

ミジユスケ「(鼻歌を歌っている)」

ミジユナ「ミジユスケ！」

ミジユスケ「ん？ミジユナ？どうしたの？顔赤いよ？」

ミジユナ「だ、大丈夫！」

~~~~~

ミツハ先生「恋っているのわね…その気持ちを、

押し殺しているよね、後悔したり

何かを失ったりしちゃうの。」

ミジユナ「そ、そうなんですか？」

ミツハ先生「だからね。後悔しないように

今から言うことをしてきなさい？」

ミジユナ「はい。」

~~~~~

ミジユナ(まずは…手を繋ぐ…)

ミジユスケ「で？どうしたの？」

ミジユナ「ミジユスケ…ちよつと手を繋いでもらっていい？」／／

ミジユマル「いいけど？なにかあったの？」

ミジユナ「い、いや別に？」

ミジユナはそくつと手を繋ごうとするが…

ミジユナ「つ!!」

ミジユナは手が触れた瞬間…

ミジユナ「わあく!!むーりー!!」

ミジユナ手を弾き走つてどこかへ言つてしまった

ミジユスケ「ん？ん？ん？」

ミジユナ「…はあはあはあ…こんなに難しいなんて…

でも次は…」

(心の声 (ミツハ先生「今の自分の想いを

伝えてみるのよ！つまり告白！」)

一方ミジユスケ…

ミジユナ「ミジユスケく！」

ミジユスケ「ん？どうしたのさつき？」

ミジユナ「いえ、大丈夫！」

ミジユスケ「??」

ミジュナ「そ、それよりね…」

ミジュスケ「うん」

ミジュナ「あたしね…恐らくなんだけど…」

ミジュスケの…ことが…ミジュスケのことが…

す…す…す…！…好きなんかじゃないんだから！！」／／／

ミジュナは苦無を3つほどミジュスケに投げて

どこかへ走り去った…

ミジュスケ「え?!なに?!わ!わ!わ!」

ミジュナ「なんでこんなに恥ずかしいの〜!!」

ミジュナ（はあはあはあ…えつと最後に…

キ…キ…キ…とかをすればいいんだっけ…）／／／

（心の声（ミツハ先生「相手に想いを伝えるには

キスを試みたらどうかかな?」）

一方…ミジュスケ…

廊下にて…

ミジュナ「ミジュスケ〜!」

ミジュスケ「なに?!こんどは??」

ミジュナ「ちょっとね…目をつぶって欲しいの…」

ミジュスケ「え?なんで?」

ミジュナ「ちょっととしたいことがあるけど…」

見て欲しくないから…」／／／

ミジュスケ「わ、分かった…」

ミジュスケは目をつぶっている

ミジュスケ「これでいいの?」

ミジュナ「う、うん…」／／／

ミジュナ(ミジュスケに…キ…キ…キスを…)／／／

ミジュナとミジュスケの距離約5センチ

ミジュスケ「…?」

ミジュナ「出来るわけ!」

ミジュスケ「ん?」目を片目開ける

ミジュナ「ないでしょー!!」

ミジュナはそばにあったバケツを投げた

ミジュスケ「んが!」

ミジュスケは水の入ったバケツを頭から被って

気絶した。

ミジユスケ「(混乱中……)」

ミジユナ「ごめん！ミジユスケー！でも無理なのー！

ごめんねー!!」

夕暮れ……

ミジユナ「ミジユスケに悪いことしちゃったかな？

手を弾いて……苦無投げて……水までかけちゃって……

好きになるどころか……ミジユスケに

嫌われちゃったかな？」

ミジユスケ「ミジユナ！大丈夫？」

ミジユナ「ミジユスケ！」

ミジユスケ「今日どうしたの？いつものミジユナ

らしくないよ？」

ミジユナ「あはは……変だよね……ごめんね……」

ミジユスケ「変じゃないよ！悩み事があるなら

打ち明けてよ！友達でしょ？」

ミジユナ「……そうだよね……ごめんね……でも今は

もういいや!」

ミジユスケ「いいの?」

ミジユナ「うん!」

ミジユスケ「じゃあ戻る?」

ミジユナ「そうしよ!」

ミジユナとミジユスケは歩きながら戻る:

ミジユナ(このドキツとする感情はわかった。

息苦しくなるのも、気分は悪くない:これが恋?

でも今は:まだ友達のままでもいいよね?)

ミジユスケとミジユナは廊下に戻ったが:

ゲコガシラ先生「誰だ!綺麗にした床を

水びたしにしたのは!」

ミジユスケ「あつ:」

このあと2人は叱られ:廊下の掃除をする羽目になった

卷之七 海 水遁！

ミジユナ「いい海日和ね〜」

ミジユスケ「そうだね〜いい天気〜」パン！！

ミジユナ「なんの音？」

ミジユスケの浮き輪が割れて溺れてしまった

ミジユスケ「助けて〜！溺れる〜！」

ミジユナ「！！」

ミジユナはミジユスケを助けに海に入った。

ミジユナ「はあはあ…ミジユスケはみずタイプの

忍者なのになんで泳げないのよ…」

ミジユスケ「ご、ごめん…」

ミジユナ「今度は泳ぎの練習するわよ…」

ミジユスケ「わ、わ、わかりました…」

そして別の日…

ミジユスケ「海だ〜！！」

ミジユナ「海ねく!! って違うでしょ? 今日

あなたが泳げるようになるために来たんでしょう?」

ミジユスケ「そ、そうだった」

ミジユナ「まずは水に対しての恐怖心を無くそう」

ミジユスケ「と言われても…」

ミジユナ「何が怖いのか? みずタイプだし

水の中で呼吸は出来るから溺れるわけではないでしょ?」

ミジユスケ「うーん…まずねえ…

目を瞑っちゃうかな?」

ミジユナ「なんで目を瞑っちゃうのか?」

ミジユスケ「目に水が触れるのが怖い…

海は海水だからなおさら…」

ミジユナ「海水が目に触れたからって痛くないよ?」

ミジユスケ「え? そうなの?」

ミジユナ「それで痛かったら涙はどうなのよ?」

ミジユスケ「あ、涙って塩っぱいんだっけ?」

ミジユナ「じゃあまず目を開ける練習ね」

ミジユスケ「うん…」

ミジユスケとミジユナは海に入って目を開ける練習をした

ミジユスケ「ん…」

ミジユナ「頑張つて目を開けて！」

ミジユスケ「うん…」目を開ける

ミジユナ「そう！そうしたらそのまま待機！」

ミジユスケ「うん」（意外と平気…？）

ミジユナ「……………／／／……………」ブクブク…

ミジユナ「ミジユスケ…ちよつとあつち向いてて」

ミジユスケ「了解？」

ミジユナはミジユスケにじくつと見られて照れた

2人は陸に上がった

ミジユナ「目を開けられたんだからもう泳げるんじゃない？」

ミジユスケ「…まだ泳ぎ方を知らないんだよね…」

ミジユナ「じゃあまずこうして？」

ミジユスケ「うん。そうして？」

ミジユナ「ここをこんな感じに…」

ミジユナは泳ぎ方をミジユスケに教えた。

ミジユナ「あとは何回も泳いで頑張るしかないわね」

ミジユスケ「わかった!泳いでくる!」

ミジユナ「気をつけてね!」

数分後

ミジユナ「だいぶうまくなったんじやない?」

ミジユスケ「うん!泳ぎ方さえ分かればなんとかく」

ミジユナ「さてあたしも泳ごつかなく」

ミジユスケ「助けてくゴボゴボ」

ミジユナ「え?!なにやってんの??」

ミジユスケ「足を…ゴボゴボ…つ…つっちゃった!」

ミジユナ「待って!今助けるから!」

ミジユナは泳いでミジユスケを助けに行った

ミジユナ「ミジユスケ!大丈夫?!しっかりして!」

ミジユスケ「…」

ミジユナ「ミジユスケ!…息をしてない!!?」

ミジユナは心臓マッサージをしている

ミジユスケ「ミジユスケ！しっかり！」

ミジユスケは忍者に：伝説の後継者になるんでしょ？前にそう言つてたよね！こんな所で死なないよね！」

ミジユスケ「…」

ミジユナ「…はあ…はあ…はあ…ダメ…

もつと続けるべきなのかな…それとも…

じ、じ、人工呼吸をした方がいいのかな？

…うーん…ゴクリ…」

ミジユスケ「…ん？あれ？俺確か泳ぎの練習を

してたんじゃない？あれ？ミジユナ？俺に何が起きた

の？」

ミジユナ「…」／／／

ミジユスケ「？どうしたの？ミジユナ？」

ミジユナ「いや…なんでもない！ミジユスケは

足をつつて溺れたのよ」

ミジユスケ「そうだったんだ…」

ミジユナ「そ、そうなの…」

ミジユスケ「ミジユナが助けてくれたの？」

ミジユナ「そ、そう。」

ミジユスケ「そっか！ありがとう！」

ミジユナ「!!い、い、いいの〜〜!!」／／／

ミジユナは走ってどこかへ行ってしまう…

ミジユスケ「?!え?なんで？」

卷之八 記憶 喪失！

ミジユスケが苦無を投げる

ミジユスケ「はあ！」

がミジユスケの投げた苦無は上に飛び…

ミジユスケ「ん？」上を見て…

ミジユスケ「わく！」驚き走り出したところ…

木にぶつかり気絶…

ミジユスケ「あ…わ…わ…:…:…」

ミジユナ「ミジユスケ?!大丈夫?!」

保健室…

ミジユスケ「うーん…」

ミジユナ「気がついた？」

ミジユスケ「あれ…ここは？」

ミジユナ「ここは保健室よ？あなた自分で投げた

苦無を避けようとして木に頭をぶつけたのよ？」

ミジユスケ「そうなのかのう?」

ミジユナ「ん? うん?」

ミジユスケ「じゃあ早く! 特訓するのじゃ!」

ミジユナ「あ! 待って! 頭を冷やさなきゃ!」

ミジユスケとミジユナは走っていった。

校庭

ミジユスケ「ミジユナ! 勝負をするのじゃ? 的当てで!」

ミジユナ「いいよ? 勝てるのかしら? さきに

あたしからやらせてもらおうよ?」

ミジユナは苦無を3個投げて3個とも命中した

ミジユナ「どうかしら? 得点は…75点が2つ50点が

1つで200点ね。」

(真ん中から100点75点50点25点10点

5点当たらなければ0点)

ミジユナ「この点数を超えられる? あなた?」

ミジユスケ「もちろんじゃ!」

ミジユナ「じゃ?」

ミジユスケは3つ苦無投げ、3つとも当たった

ミジユスケ「どう?」

ミジユナ「?!え?!100点が2つ…50点が1つで…

250点!!いつの間に腕を上げたの?!」

ミジユスケ「どんなもんじゃ!」

ミジユナ「まさか…負けちゃうなんて…」

ミジユスケ「どうやら勝負はわらわの勝ちのようじゃな?」

ミジユナ「ん?わらわ?」

ミジユナ(さつきから…言葉遣いが…それに

あの苦無の腕…まるで別人…)

ミジユナ「ねえ?あなた…ミジユスケよね?」

ミジユスケ「?何を言ってるのじゃ?ミジユナ?」

ミジユナ「そ、そうだよね。ミジユスケは

ミジユスケだもんね?」

ミジユスケ「わらわはミジユひめじゃぞ?」

ミジユナ「えっ?えっ?!えー!!!」

保健室

ミジュナ「先生!!」

ミツハ先生「まあ? 今度はどうしました?」

ミジュナ「ミジュスケが! ミジュスケが変なんです!」

ミツハ先生「変?」

ミジュナ「ミジュスケがミジュスケじゃないんです?」

ミツハ先生「まあそうなの?」

説く明く中く

ミツハ先生「なるほど:」

ミジュナ「どうなんですか? 先生?」

ミツハ先生「恐らくだけど頭部を強打したことによる

一時的な記憶の混乱かしら?」

ミジュナ「つまり: ? 記憶喪失?」

ミツハ先生「まあ、そうね」

ミジュナ「ミジュスケ! あたしが分かる?」

ミジュスケ「もちろんじゃ! そなたは

ミジュナじゃろ? 覚えておるわ」

ミツハ先生「どうやら自分を忘れてしまっているけど

周りの者達の記憶は残っているみたいね？」

ミジユナ「ど、どうしたら？」

ミツハ先生「とりあえず記憶がもどるまで

待つしかないわね？下手に記憶を戻そうとするよりも
ゆっくり時間をかけて自然に戻すほうがいいから。」

ミジユナ「わ、分かりました。」

廊下

ミジユナ「えーと…ミジユスケ…じゃなかった…

なんて呼べばいいの？」

ミジユスケ「そうじゃのう…皆からはミジユひめ

と呼ばれておったが…よし！ひめと呼ぶがよい？」

ミジユナ「ひ、ひめ?!な、名前と違ってないの？」

ミジユスケ「本名は教えてはいけぬことにな

なっておるのじゃ！」

ミジユナ「そつか…?じゃあひめって呼ぶよ」

ミジユスケ改めミジユひめ「うむ！」

ミジユナ「ところで…そのひめは今の自分に…

えつと…違和感とかはないの？」

ミジユひめ「ん？そういえば…わらわは女子のはず
じゃが何故男子に…？」

それに…これは忍者？の服かのう？」

ミジユナ「ひめはどういう人なの？」

ミジユひめ「どういう人とはどういう事じゃ？

わらわはわらわじゃぞ？」

ミジユナ「えつとね…ひめつまり…」

説く明く中く再びく

ミジユナ「ということなの…」

ミジユひめ「なるほど…つまりこの体はわらわ

じゃなくミジユスケという者の体で特訓していた時

頭に強いシヨツクを受けて

記憶を失いわらわの人格が出てきたということ？」

ミジユナ「そうなのかな？あたしは分からない…」

ミジユひめ「そうか…よくわからんが…」

この者が記憶を取り戻すまではわらわが

ミジュスケとやらの人生をあゆむということかろう?」

ミジュナ「そもそも記憶を失ったらなぜ

ほかの人格が出てくるのかすら分からないの…」

ミジュひめ「とにかくそんな難しい話は置いて

今を楽しもうではないか?」

ミジュナ「いいのかな?それで…」

ミジュひめ「では、これならどうじゃ?この者の

記憶を取り戻せそうな事を2人でしてみるというのは?」

ミジュナ「うん!そうしよう!」

ミジュひめ「よし!どうしたらよいかのう?」

ミジュナ「うくん…それじゃあね…」

森の中

ミジュナ「ここに見覚えある?」

ミジュひめ「もちろんあるのじゃ?」

ミジュナ「え?そうなの?じ、じゃ次の場所に!」

訓練場(地下牢屋)

ミジュナ「ここはある?」

ミジュひめ「あるのじゃ」

ミジュナ「!もしかしてミジュスケの記憶は

そのままミジュひめの記憶に置き換わってるのかな?」

ミジュひめ「よく分からぬが覚えてるのじゃ!」

ミジュナ「次の場所へ!」

海

ミジュナ「ここもある?」

ミジュひめ「うん!あるのじゃ!」

ミジュナ「ここはなんのために来たか覚えてる?」

ミジュひめ「うむ。覚えておるぞ?泳ぎの練習を

しに来たん…あれ?わらわ泳げなかつたつけ?」

ミジュナ「ん?でもまあダメだったみたいね…」

ミジュひめ「もう遅いし、もどるかのう?」

ミジュナ「そうしよつか…」

帰宅

ミジュひめ「疲れた」

ミジュナ「あたしも」

ミジュひめ「わらわの中にある記憶はわらわのじやが
ミジュナはわらわではなくこの者…ミジユスケ

としての記憶がある…？ん？もしかして…このこ…」

ミジュひめ「のう？ミジュナ？」

ミジュナ「ん？」

ミジュひめ「もしかしてそなた…ミジユスケに…

恋しておるんじゃないかのう？」

ミジュナ「えー!!なんでもいきなりそんなこと?!」

ミジュひめ「わらわの中にある記憶はミジユスケの

記憶ということじやろ？この記憶にあるそなたの

振る舞い恋をしているものの反応じや」

ミジュナ「!!だからってなんで…」

ミジュひめ「頑張っって！って応援したくなっただけじや！」

ミジュナ「ひめ…！」

ミジュひめ「わらわ…随分歩いたから疲れてしまっ

…少し眠っても良いかのう？」

ミジュナ「う、うんいいよ？」

ミジユひめ「おやすみく…」

ミジユひめは寝ている…

ミジユナ「さて…どうしようか…このまま記憶が

戻らなかつたら…ミジユスケは…どう…なるん…だろう…」

ミジユナはそんなことを考えながら眠った…

そして時間が経ち…

ミジユひめ「ミジユナ…！ミジユナ…！」

ミジユナ「…うーん…？」

ミジユひめ「あ、起きた。ミジユナ、なんで俺たち

こんな所で寝てんの？」

ミジユナ「あれ？ひめ？口調が戻ってるよ？」

ミジユひめ「ひめ？何いってるの？俺はミジユスケ

だよ？寝ぼけてるの？」

ミジユナ「え?!」

ミジユひめ改めミジユスケ「で？なんでこんなところで

俺たち寝てたの？」

ミジユナ「おかえりく!!ミジユスケくく！」

ミジュナはミジュスケに抱きついた

ミジュスケ「え！え！え?!なに?どうしたの?!」

ミジュナ「あとで教えてあげる!戻ってきてくれて

ありがとう!!」

ミジュスケ「??ん?...とにかく...まあ...ただいま!」

ミジュナ(つて勢いで抱きついちゃった!!)

卷之八之五 恋話 暴露!

ミジユナ「すいませ〜ん!」

ミツハ先生「ん? どうかしました?」

ミジユナ「それが…」

~~~~~

ミジユスケが苦無を投げる

ミジユスケ「はあ!」

がミジユスケの投げた苦無は上に飛び…

ミジユスケ「ん?」上を見て…

ミジユスケ「わ〜!」驚き走り出したところ…

木にぶつかり気絶…

ミジユスケ「あ…わ…わ…:…:…」

ミジユナ「ミジユスケ?! 大丈夫?!」

~~~~~

ミジユナ「と、いうことがあつてミジユスケが…」

ミジユスケ「……………」 気絶中…

ミツハ先生「まあ大変！ここで寝かしてください！」

ミジユスケはベットで横になった

ミジユナ「そういえば先生って結婚してたよね？」

ミツハ先生「はい！ゲゴガシラ先生と」

ミジユナ「え?! そうなんですか！」

ミツハ先生「はい！」

ミジユナ「先生！どっちが告白したんですか？」

ミツハ先生「んく? どっちだったかしらく？」

ゲゴガシラ先生「こちら！ミツハ先生！」

学校でそんなことを話すとは…

ミツハ先生「いいじゃありませんか？」

サイゾウさん？」

ゲゴガシラ先生「ミツハ先生！学校の中では

先生呼びとあれほど…」

ミジユナ「ゲゴガシラ先生！どっちが

告白したんですか？」

ゲコガシラ先生「だから……」

ミツハ先生「えーとですね〜」

ゲコガシラ先生「ミツハ先生！」

ミツハ先生「あれはまだ先生になる前の

教育所での話でしたね〜」

〜

ミツハ「サイゾウさ〜ん！」

サイゾウ「ん？ どうしたんですか？」

ミツハ「またお弁当作りすぎてしまったので

食べて頂けませんか〜？」

サイゾウ「またですか？ あれほど

自分の食べられる量を作ってきてください！と

いつも言っているのに……」

ミツハ「いや〜お弁当を作つてるとですね〜

つい楽しくなつて作りすぎてしまふんです〜！」

サイゾウ「全く……気をつけてくださいね？」

お弁当はありがたく頂きますが……」

ミツハ「召し上がってください！」

ミツハ先生とゲコガシラ先生は一緒に

教育所でこんなふうになら先生になるための知識を学んでいた

ミツハ「サイゾウさん！大変です！」

サイゾウ「ど、どうしたんですか？」

ミツハ「家にこんな手紙が！」

手紙「おめでとございます！あなたは

1億円に当選しました！つきましては

下記の間所まで来てください！表山の木小屋まで！

よろしく願います。」

ミツハ「サイゾウさん！どうしましょう！

私に1億円が当たってしまいました！」

サイゾウ「いや！これ明らかに詐欺ですよ！」

ミツハ「サギさんって方が教えてくれたんですか？」

サイゾウ「いえ違います！これは詐欺と言って

悪い人があなたを騙してるんですよ！」

ミツハ「まあ！そうなんですか？」

サイゾウ「あなたという人は……」

気をつけてくださいいね？」

ミツハ「はい！分かりました〜！」

サイゾウ（全く……この人は……心配だなあ……）

そしてこんな日々が続き卒業の時がきた……

ミツハ「もう……卒業ですね〜」

サイゾウ「早いもんですね〜」

ミツハ「そうですね〜」

サイゾウ「でもまだ明日ありますけどね」

ミツハ「あら？そうだったんですか？」

サイゾウ「しっかりしてくださいよ！」

明日の講義は重要ですよ!!」

ミツハ「ふふふ……」

サイゾウ「はあ……ふう！」息を吐きまた吸って

ミツハ「？どうしたのですか？」

サイゾウ「もう卒業ですが……」

私と……付き合っていただけないでしょうか?!

ミツハ「いいですよ？」

サイゾウ「?!そ、そんなあつきり?!」

ミツハ「どこに行きましよう？」

サイゾウ「いえ…その付き合うでは無く…その…

結婚を前提に！付き合つて欲しいという…」

ミツハ「?!わ、私とですか?!」

サイゾウ「はい！」

ミツハ「な、なんで私なんですか？」

可愛い子は他にも…」

サイゾウ「可愛さで選んでません！あ、いや

もちろんミツハさんは可愛いですが…

ほつとけないのです…見てて危なっかしいので

なんか…守つてあげたくなつてしまつて…」／／／

ミツハ「！」／／

サイゾウ「ここを卒業したらもう…

会えないかと思ひ…いま勢いで告白を…」／／／

ミツハ「ん…」／／

サイゾウ「で…どうですか？」

ミツハ「私でよければ…よろしくお願いします！」

~~~~~

ミツハ先生「という告白でした」

ミジユナ「へえ〜！サイゾウ先生、やつる〜！」

ゲコガシラ先生「先生をからかうんじゃない！」

ミツハ先生「でもまさかねえ〜」

ゲコガシラ先生「ああ…まさか

配属先が同じとはねえ…」

ミツハ先生「運命は見てるんですかね〜？」

ミジユナ「ゲコガシラ先生がミツハ先生を

守れるように神様が同じ所にしてくれたん

じやないですか？」

ミツハ先生「そうかもね〜」

ゲコガシラ先生「そうなのか…つて

だから生徒にそんな話をしないでくださいよ！」

ミツハ先生「いいじゃありませんか〜」



ゲコガシラ「よくありませんよ！つてもうこんな

時間！私はまだやるべき事が！じゃあ

ミジュナ！ミジュスケを頼んだぞ？」

ミジュナ「ふふっ、はい！」

おまけ：

とある休日の風景（遊園地）

ミツハ先生「サイゾウさん！私あれ乗ってみたい！」

ゲコガシラ先生「これこれミツハさん急いでは

怪我しますよ！」

ミツハ先生「サイゾウさん！今度はあれを！」

ゲコガシラ先生「ミツハさん：そんなに

急がなくても」

ミツハ先生「サイゾウさん！これ食べましょう！」

ゲコガシラ先生「ん？美味しいですね？これ？」

ミツハ先生「今度はこれ乗りましょう？」

ゲコガシラ先生「これは観覧車？」

観覧車内

ミツハ先生「サイゾウさん？」

ゲコガシラ先生「な、なんですか？」

ミツハ先生「ありがとうございますね！いつも」

ゲコガシラ「いえ！こちらこそ……」

ミツハ先生はゲコガシラ先生のほっぺにキスをした

## 卷之九 料理 講習！

ミジユナ「お腹すいちやったく」

ミジユスケ「あれ？いつものお弁当は？」

ミジユナ「今日持つてくるの忘れちゃって…」

ミジユスケ「じゃあ俺のいる？」

ミジユナ「え？いいの？」

ミジユスケ「うん！あげるよ」

ミジユナ「ありがとう！」

ミジユナはミジユスケから貰った料理を食べる

ミジユナ「おいひい！これ誰が作ったの？」

ミジユスケ「もちろん俺だよ？」

ミジユナ「え?!これミジユスケが作った料理なの?!」

ミジユスケ「あれ？この前言わなかったっけ？」

ミジユナ「まあ聞いたけど…ここまで出来るとは

思ってたなかった。」

お弁当には白米に梅干し、だし巻き玉子と

ミニチーズハンバーグ、青椒肉絲にアスパラの

ベーコン巻き、デザートに冷凍オレンのみが入っていた

ミジユスケ「これも食べてみてよ？」

創作料理だから味の保証はできかねるけど……」

ミジユナ「いただくよ……パクツ……モグモグ……おいしい！」

ミジユスケ「良かった〜！」

ミジユナ「ミジユスケ！今度はあたしに

料理教えてくれない？」

ミジユスケ「え？ミジユナ料理できないの？」

ミジユナ「あたしお菓子しか作ったことがなくって……」

ミジユスケ「十分すごくない？」

ミジユナ「ミジユスケはお菓子作れる？」

ミジユスケ「まあある程度は作れるよ？」

ミジユナ「で……教えてくれない？」

ミジユスケ「構わないよ？」

ミジユナ「いつできそう？」

ミジュスケ「いつでもいいよ？なんなら明日は休みだし明日にでも？」

ミジュナ「じゃ決まり！明日でお願いします！」

ミジュスケ「了解。わかった！」

次の日

コンコン!!

ミジュナ「ごめんください！」

ミジュスケ「いらっしやう！」

ミジュナ「おじゃまします！」

ミジュスケ「食材は買ってきたからなんでも

作るれるよ」

ミジュナ「そっかくじゃあね」

カレーを作ってみたい！」

ミジュスケ「料理の定番カレー！練習には

ちょうどいいかもね。よしカレーを作ろっか？」

ミジュナ「うん！」

ミジュスケ「じゃあまずはカレー粉を作ろう」

ミジユナ「どうするの?」

ミジユスケ「えつとね。この粉と木の実と

これをすり潰すの」

ミジユナ「分かった!」

ミジユナは専用の道具で木の実とかをすり潰している

ゴリゴリ…ゴリゴリ…ゴリゴリ…

ミジユナ「で?これが終わったら…お肉を炒めるの?」

ミジユスケ「料理は慌てて作るものじゃないよ?

まずは下ごしらえをしなきゃ」

ミジユナ「下ごしらえ?」

ミジユスケ「まずはお肉にこしょうとにんにくと

しょうが…ターメリックにヨーグルトを加えて混ぜる」

クチャクチャ…クチャクチャ…

ミジユスケ「あとトマトに切れ目を入れてお湯で茹でる」

ミジユナ「玉ねぎはみじん切りだっけ?」

ミジユスケ「そう!出来る?」

ミジユナ「やってみる…」

コトンコトンコトン…コトンコトンコトン…サクツ…

ミジユナ「いった!!」

ミジユスケ「だ!大丈夫?!

ミジユナ「指切っちゃった…」

ミジユスケ「ゆっくりでいいのに…」

ミジユスケはミジユナの切った所をくわえた…

ミジユナ「へっ?!」／／

ミジユスケ「ん?!あ!ご、ごめん!つい自分が

切った時の流れで…!!」／／

ミジユナ「…も、もう!びっくりした!!」／／

ミジユスケ「あ、…トマトが茹で上がったみたい!

トマトは皮を剥いて中身をだす!」／／

ミジユナ「あたしやるよ!」／／

ミジユスケ「じゃあ俺はじゃがいもとかを切っちゃうね」

ミジユナ「わかった!」

そして料理は順調に作られていき…グツグツ…

ミジユナ「完成かな?」

ミジユスケ「味見してみたら？」

ミジユナは小皿にカレーをよそって味見をしてみた

ミジユナ「!美味しいよ!食べてみてよ!ミジユスケも!」

ミジユスケ「どれどれ？」

ミジユスケも同じ小皿にカレーをよそって味見をした

ミジユナ(あっ!!)／／

ミジユスケ「:うーん:コクがないねえ:ここでもんだ:ん?どうしたの?ミジユナ

?」

ミジユナ「えっ?いや!なんでもないよ?!」

ミジユナ(間接キスしちゃったかな!!どうしよう!)

ミジユスケ「ここで問題!コクを出すために必要な

隠し味ってなくんだ!」

ミジユナ「隠し味?うーん:分からない:」

ミジユスケ「正解はね、リンゴだよ!」

ミジユナ「リンゴなの?!」

ミジユスケ「そう!リンゴがカレーの隠し味なの!

他にも砂糖とかチョコとかもありだよ?」



ミジユナ「へくそうなんだ〜！」

そしてカレーが完成し：

ミジユスケ「完成！カレーとちよつとまってる〜」

ミジユナ「ん？」

ミジユスケが帰ってきた

ミジユスケ「おまたせ〜りんごを剥いてきたよ〜！」

ミジユナ「：美味しそう〜！」

ミジユスケ「じゃあ〜！」

2人「いっただっきま〜す!!」

そして2人は楽しい食事をした：

ミジユスケ「ごちそうさま〜！」

ミジユナ「おいしかった〜！」

ミジユスケ「お皿洗ってきちやうね〜」

ミジユナ「あたしも手伝う〜！」

2人はお皿洗いをしている。

ミジユスケ「明日も料理する？」

ミジユナ「あたしはいいけどミジユスケはいいの？」

ミジユスケ「明日も特に予定は無いけど？」

ミジユナ「そうじゃなくて…」

週明けは試験よ？あなた試験受かる自信あるの？」

ミジユスケ「えっ？あ！やば！忘れてた！」

ミジユナ「なんなら試験のための宿題も

出たはずだけど…まさか…」

ミジユスケ「やってない…」

ミジユナ「だと思いました。」

ミジユスケ「手伝って!!」

ミジユナ「…仕方ないわね…今日のお礼に

手伝ってあげるわよ！」

ミジユスケ「やった〜！ありがとう！」

ミジユナ「お礼はこっちも同じよ…」

ミジユスケ（楽しいなあ〜）

ミジユナ（なんか…付き合ってるみたい…）

## 卷之十 試練 忍ぶ！

ミジユスケ「今日は試験ですよね！」

ゲコガシラ先生「うむ」

ミジユスケ「試験の内容はどんなのですか？」

ゲコガシラ先生「試験、試験と言うがそう

簡単なものじゃないぞ？失敗すれば命はない…」

ミジユスケ「?!」

ミジユナ「!」

ゲコガシラ先生「今回の試験の内容だが2人で

コンビを組み城の中にある巻物を取ってくるのだ」

ミジユスケ「巻物？」

ミジユナ「その巻物はどこにあるのですか？」

ゲコガシラ先生「それを調べるのも試験の一環。」

ミジユスケ「なるほど…」

ゲコガシラ先生「では初め！」

城内：

ミジユナ「いい？もう一度作戦を言うけど、まずあなたが城の中の敵の囷になる。

その隙にあたしは巻物を取ってくる。取ったら赤い花火の合図を出すからそれを確認したら

逃げるわよ。いい？」

ミジユスケ「わかったけど、巻物の場所は分かるの？」

ミジユナ「それは調査済みよ。殿様の部屋の掛け軸の後ろにあるとの情報を得てるわ」

ミジユスケ「なら大丈夫か」

ミジユナ「じゃあ行くわよ！」

ミジユスケ「御意！」

ミジユスケは城の2階で囷をしていた

ニヨロゾA「こつちだ！」

ニヨロゾB「であえ！であえ！」

ニヨロゾC「こつちだ！こつちで足音がした！」

ミジユスケ（大丈夫かな？ミジユナは…）

一方ミジユナは…

ミジユナ（…誰もいないわね…）

ミジユナは殿様の部屋に降りて掛け軸の

裏にある箱を取り出した。

ミジユナ（この中にある巻物さえ手に入れば…?!）

ミジユナ「これは…に、偽物?!」

ニヨロトノ「今だ！であえ！」

ミジユナ「?!しまった!!」

一方ミジユスケは…

ミジユスケ（ミジユナ遅いなあ…）

ニヨロゾB「上で忍者が捕まったらしい…」

ニヨロゾC「何？さつきまでこちら辺にいたのに…」

ミジユスケ（何?!）

~~~~~

ミジユスケ「すいません。もし敵に捕まったら

どうするんですか？」

ゲコガシラ先生「殺される…」

ミジユスケ「敵にですか？」

ゲコガシラ先生「ベアにだ」

ミジユスケ「え?!」

ミジユナ「情報の漏洩を防ぐためです…」

ゲコガシラ先生「その通りだ…」

ミジユスケ「怖…」

~~~~~

ミジユスケ「つまり…俺がミジユナを…」

~~~~~

ミジユナ「ミジユスケ！」

~~~~~

ミジユスケ「…そんなことするくらいなら…」

自分が死んでも助ける！」

ミジユスケは虫遁の術を使った

ニヨロゾC「え?!なんで天井からこんなに虫が!?!」

ニヨロゾB「うわ、うわあ!!」

ミジユスケ（今だ！）

ミジユスケはミジユナの救出に向かった

牢屋

ニヨロモA「おい、あの巻物の情報をどこで知った…」

ミジユナ「さあね」

ニヨロモB「さつさとはけば楽になるぞ？」

ミジユナ「…」

ニヨロモA「もう！…」

ミジユナ（私は作戦をしくじり敵に捕まってしまった…

敵に捕まった者は…情報の漏洩を防ぐため…

ペアに…殺される…）

ミジユナ「ミジユスケになら殺されても…」

ニヨロモB「ん？何言って…ぐわあ！」

ニヨロモA「えっ！なに！ぐわあ！」

ニヨロモ2人は気絶した

ミジユナ「?!なに??」

ミジユスケ「助けに来た！」

ミジュナ「?!ミジュスケ!!」

ミジュスケ「さあ行こう!」

ミジュナ「なんで来たの!来たらあなたまで捕まるかもしれないのに!あたしだけを

殺せばそれで済むでしょ!」

ミジュスケ「いいから行くよ!」

ミジュナ「そこまでする動機は何?2人じやなきや

任務を遂行できないから?罪悪感があるから?

一体何?!」

ミジュスケ「ああもう!」

ミジュスケ「理由を答えてよ!一体何なの?!」

ミジュスケ「好きだからに決まってるだろ!」

ミジュナ「……:……:?!」//

ミジュスケ「言わせんなよ……」。

まあとにかく今はここから脱出するよ!」

ニヨロトノ「逃がすものか!であえ!であえ!」

ニヨロゾ達が出てくる



ミジユスケ「逃がさせてもらおう！」

ミジユナ「同じく！」

ミジユスケはニヨロトノの後ろにいる

敵に向かって煙幕弾をなげミジユナ

は苦無でニヨロトノの服の袖を切り裂き逃げた

ニヨロトノ「くっ！煙幕かつ！」

ニヨロゾA「何も見えない！」

ミジユスケ「大丈夫？ついてきてる？」

ミジユナ「うん！」

ニヨロゾE「くそ！逃げられた！」

ニヨロゾD「追えー！逃すなー！」

ミジユスケとミジユナは城から逃げ出すことに

成功した：

ミジユスケ「はあ…はあ…はあ…」

ミジユナ「何とか逃げ切れた…」

ゲコガシラ先生「なるほど…そしてミジユナを救出し

帰ってきたということか…」

ミジユスケ「そういうことです…」

ゲコガシラ先生「巻物は持って帰って帰ってきたか…?」

ミジユスケ「それが…巻物は…」

ミジユナ「持って帰りました!」

ミジユスケ「えっ?!」

ゲコガシラ先生「ふむ…」

ミジユスケ「一体どこに?!」

ミジユナ「一番隠しやすいところに大事なものが

なかったとすると…つまりその巻物は殿様本人

が持つてると思つて、さつきすれ違ふ時に盗んだの」

ミジユスケ「さつすがミジユナ!!」

ゲコガシラ先生「うむ!合格だ!」

ミジユスケ・ミジユナ「やったく!!」

ゲコガシラ先生「よくやったな!」

ミジユナ「そう言えばさつき言ったことはほんとなの?」

ミジユスケ「さつきの?」

ミジユナ「ほら言つたじゃない!…その…」

好きだつて……」

ミジユスケ「／＼／＼！そ、そんなこと言つたつげ？」

ミジユナ「言つた！ちゃんと覚えてる！」

ミジユスケ「そ、そつから」

ミジユナ「で？どうなの？」

ミジユスケ「ま、まあ……勢いで言つちやつたけど……

男に二言はないし……嘘じゃないけど……」

ミジユナ「ないけど？」

ミジユスケ「忍者は影となりて任務を遂行する……

決して安全なことじゃない……今度は俺が捕まるかもしれない……

……そうなつたら……俺は殺される……」

ミジユナ「……」

ミジユスケ「その後のミジユナは……どうなる……」

ミジユナ「つまり付き合つても忍者だから

死ぬかもよつて言いたいの？」

ミジユスケ「いやまあそうだけど！」

ミジユナ「いいよ……」

ミジユスケ「えっ？」

ミジユナ「ミジユスケが捕まったら今度はあたしが助けるから！」

ミジユスケ「!!」

ミジユナ「だからさ…っ…」

ミジユスケ・ミジユナ「付き合ってよ！」

ミジユスケ・ミジユナ「！」

ミジユスケ「ごめん。俺から言わせて？付き合って欲しい！」

ミジユナ「もちろん！」

2人は見つめあって笑った

## 卷之十一 転入忍者 参上！

ゲコガシラ先生「えー…今日は転入生を紹介する…」

ミジユスケ「転入生？」

ゲコガシラ先生「えーそれも時期が重なって3人…」

ミジユナ「3人も？」

先生「入って来なさい！」

サルノリ「みんな！morning！シユリだよ！よろしくね」

ヒコザル「俺はホムラだ…：よろし…ん!？」

メツソン「お…俺は！スイ！お、俺を超えられると

思わない方がいい…：なぜなら俺には…強…い！

部下が数人いるんだ！」

ミジユスケ「なんか…凄い人達…」

シユリ「Meの忍術の腕はBest！」

ミジユスケ「へーそうなんだあ〜！よろしくね！」

スイ「俺には強…い部下が数人いる！

お、お、俺には戦いを挑まない方がいいぞ……!」

ミジユスケ「そうなの? でも……自分が

強くならなきゃ意味ないんじゃないの?」

スイ「あ……いや……それでも俺には

戦いを挑むな!!」(戦いたくねえよ……怖えよ……)

ミジユナ「え? なに?」

ホムラ「あ……運命よ……人は恋に落ちると体にビリリと

電気が走ると言うが……俺は今その瞬間を味わったよ……

俺の体に愛という電気が走ったよ……

あなたのお名前は?」

ミジユナ「え? ミ……ミジユナよ?」

ホムラ「ミジユナちゃん! 良かったら俺とお茶しないかい?」

ミジユスケ「ダメ!」

ホムラ「あ? なんだ? おめえ?」

ミジユスケ「ミジユナは俺の恋人だよ!」

ミジユスケ(言っちゃった……恋人って言っちゃった……) // // //

ミジユナ(改めて聞くと……恥ずかしい……) // // //

ホムラ（なんだコイツら…？）

ホムラ「へー恋人なのか…だがな…恋は

どんな障害があろうと超えられるもんなんだよ！」

ミジュスケ「あのね！」

ホムラ「さあ、ミジュナちゃん。俺とゆつくり

ティータイムを楽しもう…」

ゲコガシラ先生「おほん！ええ…まだ授業が

残ってるので戻りなさい…」

授業…

ゲコガシラ先生「今日は森の中にある巻物を

探してくるんだ！

チーム分けはこの表に書いてある。1チームだけ

3人編成のチームがあるからなく」

Bチーム

スイ「よ、よ、よろしくな…！」

ミジュナ「よろしく！」

Eチーム

ホムラ「お前じやミジュナちゃんは合わねえ…

ミジュナちゃんは俺みたいな熱くい男が

似合うのさ！お前みたいな覚めた男じや似合わない」

ミジュスケ「なにをく！みずタイプとほのうタイプ

じや相性悪いじやん！ミジュナは俺の恋人だよ！」

シユリ「君たちこんな所で喧嘩してる場合じやない

よ？もつとfriendlyに行かなくっちゃ！」

Bチーム

ミジュナ「この前この森で…ガラの悪い人に

襲われたのよね…」

スイ「?!が、ガラの悪い人…お、俺は

勇敢な忍者になるために修行中だ…」

ミジュナ「おく！」

スイ「だから…戦えない…」

ミジュナ「…そ、そうなの…」

ズルズキン「おつとここは俺のナワ…ん？

お前この前の…」



ミジュナ「えっ?!」

ズルズキン「この前は良くもやってくれたな〜!」

ミジュナ「…スイくん!行くよ!スイくん?」

メツソン「ぎゃあー怖いー!」

ミジュナ「えっ!ちよつと!」

ズルズキン「へっ、腰抜け野郎だな!」

スイ「!こ、腰抜け…じゃねえ…俺は勇敢な忍者に

なる男だあー!お前なんて

けちよんけちよんにしてやる〜!」

スイは戻って戦う。

スイ「はい、ギブアツ〜プ…」ボソツ (3秒で負けました)

ズルズキン「口ほどにもないな…」

ミジュナ「もうちよつと戦ってよ!」

ズルズキン「この前の礼をたっぷりして

あげなきやな…」

ミジュナ「…」

敵が攻撃を仕掛けるが…

ミジュスケ「ミジュナに！」

ホムラ「手出しはさせねえ！」

ミジュスケとホムラが反撃をし：

ミジュナ「ミジュスケ！」

敵は負けた：

ズルズキン「バ：バタンキュー」

ミジュスケ「大丈夫？ミジュナ？」

ミジュナ「うん。大丈夫」

ホムラ「今のは俺が助けたんだぞ！」

ミジュスケ「だからそんなのどうでもいいって！」

シユリ「みんな！timeだって限りある！

早くgoalに行こう！」

スイ「そ、それもそうだな：

そしてミジュスケ達は巻物を持って

先生のところに戻った。

ホムラ「だから！ミジュナちゃんは俺にこそ

相応しいんだ！」

ミジュスケ「でも！ミジュナは俺の恋人だよ！」

ミジュナ「先生ただいま戻りました〜」

ゲコガシラ先生「ん？つたくお前達は

何をしておるんだ？」

シユリ「ん？まだtimeは残っているはずですが？」

スイ「も、もしかしてこの巻物偽物なのかあ？」

ゲコガシラ先生「違うわい！他チームと協力して

探しては修行の意味がなからう！

罰として5人とも校舎の掃除1週間だ！」

5人「ええー！！！」

スイ「たつくよくお前達が来なければ

普通に合格だったのによ〜」

ミジュスケ「でもあいつに襲われててピンチだったじゃん！」

ホムラ「その通り、ミジュナちゃんのピンチが

守れたと思えばこんな掃除…！」

ミジュナ「話してないでちゃんと掃除してよ〜」

シユリ「そうだよ〜？サボりながらやっていると

またclean up! 週間伸びるぜ?  
「ミジユスケ「はあく面倒な人達だなあ…」」

## 卷之十二 迷子 案内！

街を歩いている2人

ミジュナ「ねえ？」

ミジュスケ「ん？なに？」

ミジュナ「ミジュスケってさ？弟とかいるの？」

ミジュスケ「妹が1人いるよ？」

ミジュナ「そうなんだ」

ミジュスケ「どうして？」

ミジュナ「なんか一人っ子って感じがしなくってさ」

ミジュスケ「ミジュナはいるの？兄弟とか？」

ミジュナ「いないよ？あたしは一人っ子だから」

ミジュスケ「へー。そうなん…だ？」

ミジュスケに何かがぶつかる…

ミジュスケ「ん？」

ルリリ「(泣いている)」グスン

ミジュスケ「えっ?!」

ルリリ「えくん!!」

ミジュスケ「ご、ごめんなさい! そんなに

強くぶつかつちやつたのかな?」

ミジュナ「この子迷子なんじゃない?」

ミジュスケ「迷子?」

ミジュナ「さつき親という姿を見たもの」

ミジュスケ「じゃあ親を探さなきゃ!」

ミジュナ「うん!」

親を探している」

ミジュスケ「親はどんな感じだったの?」

ミジュナ「うくとねく青くて丸くて丸いしつぽが

あつて、お腹が少し白かつたわて…だから…」

ミジュスケ「青くて丸い…それって! ドラえもん

じゃないの?」

ミジュナ「違うわよ! それはアニメの中の

キャラクターでしょ!」

ミジユスケ「だって…その特徴からするとそれしか…」

ミジユナ「髭がなかったわよ！耳はあつたし！」

ミジユスケ「じゃあ違うか…」

ミジユナ「普通に考えればマリルリが

浮かぶでしょ！」

ミジユスケ「あ、そっか…」

ミジユナ「とにかくこの子の親を探しに

行きましょう」

ミジユスケ「ねえ？君？お名前は？」

ルリリ「ルリっていうの…」グスン

ミジユスケ「ルリちゃんっていうんだ、ルリちゃんは

お母さんとの辺ではぐれたか分かる？」

ルリ「アイス屋さんの前ではぐれちゃった」

ミジユスケ「アイス屋さん？ミジユナ、

この街にアイス屋さんってどこにある？」

ミジユナ「うん…3軒あつたはず…」

ミジユスケ「同じアイス屋さんか？」

ミジュナ「いーえ？ひとつがかき氷屋さんで

2つ目がソフトクリーム屋さん。3つ目が

冷凍アイス屋さん」

ミジュスケ「冷凍アイス？なにそれ？」

ミジュナ「冷凍アイスっていうのは

甘い木の実とかを冷凍して食べるアイスのこと

この前ミジュスケが作ってきたじゃない？」

ミジュスケ「あゝ、あれかゝ」

ミジュナ「じゃあまず近いソフトクリーム屋さん

から行きましょうか？」

ミジュスケ「うん！行こっか？ルリちゃん」

ルリ「うん…」

ソフトクリーム屋の前

ミジュスケ「すいません！この子がこのお店に

来ませんでした？」

バニプツチ「いやゝ来てないよゝ？」

かき氷屋の前



ミジュスケ「すみません！さっきこの子とこの子の親がここに来ませんでした？」

ユキカブリ「いんや？来てないよ？」

冷凍アイス屋さん

ミジュスケ「すみませ〜ん」

アローラサンド「いらつしや〜い！

冷凍オボンのみおひとつですか〜？」

ミジュスケ「いえ、違うんですけど…」

アローラサンド「あら？そうなのかい？

じゃあ冷凍ラムのみかい？」

ミジュスケ「あ、いえだから…」

アローラサンド「そうかい、そうかい

冷凍オレンのみだね？3つセットのがあるよ？」

ミジュスケ「…じ、じゃあください…」

アローラサンド「毎度〜」

ミジュスケは冷凍オレンのみを買った。

ミジュスケ「で、聞きたいことがあるんですけど？」

アローラサンド「なんだい？美味しさの秘訣かい？」

ミジュスケ「いえ、そうではなく……」

この子とこの子の親が先程ここに来ませんでしか？」

アローラサンド「あく来たよ？」

ミジュスケ「ほんとですか?!」

アローラサンド「ああ、この子の親とその子が

買いに来てお会計してる間にその子がどっかへ行つた

〜！って言つてたな〜」

ミジュスケ「どっちへ行つかわかりますか？」

アローラサンド「さあく右へ行つたと

思うんだが……覚えてないや」

ミジュスケ「そうですか！ありがとうございます！」

ミジュナ「手掛かり発見ね！」

ミジュスケ「うん！あ、そうだ今買った冷凍

オレンのみ。はい！」

ミジュナ「あは！ありがとう〜！」

ミジュスケ「ルリちゃんも」

ルリ「ありがとう〜！」

アローラサンド「なんかあんた達親子みたいだね〜」

ミジュナ「!!」ドキッ／／／

ミジュスケ「違いますよ！」

ミジュナ「そ、そそうですよ！」／／／

アローラサンド「分かっているよ。みたいだと思っただけさね。」

【ミジュスケは親子と言われミジュナを子供と

思ったが、ミジュナはミジュスケを旦那さん

ルリちゃんを子供と思っていました】

ミジュスケ「じゃあお母さん探しに行こっか？」

ルリ「…!! ママ〜！」

ミジュスケ「ママ？」

ミジュナ「!! あたしはママじゃないよ?!」／／／

ミジュスケ「違うよミジュナ、あの人じゃない？」

ミジュナ「え？」

マリルリがキョロキョロしながらこっちへ来る

ルリ「ママ〜!」

マリルリ「!ルリ〜!心配したのよ!どこ  
言つてたのよ〜!」

ルリ「ママ〜:」

ミジユスケ「良かったね!お母さんに会えて」

ルリ「うん!ありがとう!

お兄ちゃん!お姉ちゃん!」

マリルリ「うちの娘がお世話になりました!」

ミジユナ「いえ!」

マリルリ「ルリちゃん〜優しいカップルさんに

案内してもらつてよかったね〜」

ミジユスケとミジユナ「カ!カップル!」

ミジユスケ「ま、まあ確かに付き合つてはいますが

そんな:」

ミジユナ「そ、そう:そんなカップルに見えるなんて:」

ミジユスケとミジユナはカップルといわれ照れた

マリルリ「本当にありがとうございました!」

ルリ「じゃあね〜！」

ミジュスケ「も、もうはぐれないようにね〜」

ミジュナ「気をつけるんだよ〜」

ミジュスケ「ところで何しに街に来たんだっけ…？」

ミジュナ「…ごめん！…忘れちゃった」

## 卷之十三 カラクリ忍者 登場!

ミジユスケとミジユナは散歩をしている

ミジユナ「いい天気ね〜」

ミジユスケ「ねえ…ミジユナ…」

ミジユナ「なに?ミジユスケ」

ミジユスケ「あれ…なにかな?」

ミジユナ「さあ…なんだろう…あれ?」

ちっちゃい人形が動いている…

ミジユナ「あ?どっかに行っちゃう!」

ミジユスケ「追いかけてみよう!」

ミジユナ「うん!」

2人は人形を追いかけた

ミジユスケ「この人形はなんなんだろう?」

ミジユナ「さあ?」

人形が止まった

ゲノセクト「あ、バレた…」

ミジユスケ「？君は？」

ゲノセクト「ぼ、僕は…ゲ…ゲノセクト」

ミジユナ「ゲノセクト？」

ミジユスケ「何してるの？こんな所で」

ゲノセクト「別に…何も…」

ミジユスケ「この人形何？ポケモン？」

ゲノセクト「それは僕が作ったカラクリ人形」

ミジユナ「作ったの?!」

ゲノセクト「うん…僕はこういうの作るのが好きなの」

ミジユスケ「へ〜！凄いな！」

ゲノセクト「あ、ありがとう…」

ミジユスケ「ほかにも作ったものってあるの？」

ゲノセクト「うん！他にも…ある！自動でお茶を

作ってくれるカラクリとか防犯のカラクリとか

沢山作った！」

ミジユスケ「見に行つていい！」目をキラキラ

ゲノセクト「も、もちろん!」

ゲノセクトの家

ミジユスケ「すっげ〜!!」

ミジユナ「でかい家ね」

木製のでかい屋敷

ゲノセクト「この家も僕が作ったの…」

ミジユスケ「これも?!」

ミジユナ「あれ?これ入口がないけど?」

ゲノセクト「この鍵で開くの」

鍵は木製で四角い物もの

ミジユスケ「え?それであくの!?!」

ゲノセクト「見てて…」

鍵を差し込む すると分厚いドアが空いた

ミジユスケ「すっげ〜!!」

ミジユナ「ほんとに…すごい…」

家の中で…

ゲノセクト「これが僕の作ったカラクリだよ」



ミジユスケ「わあく凄い！10…20…50?!もつとある！」

ミジユナ「これ全部あなただが？」

ゲノセクト「うん…！」

カチャカチャカチャカチャカチャ：

ミジユスケ「なんかきた！」

ミジユナ「これって茶運び人形？」

ゲノセクト「うん！」

ミジユスケ「ありがとう！」

ミジユナ「ありがとう！」

ミジユスケ「ほんとに凄いな…！」

ミジユナ「趣味で作ってるの？」

ゲノセクト「うん！良かったらただけど

なにかひとついる？」

ミジユスケ・ミジユナ「いいの？」

ゲノセクト「うん！僕がこうやって保管してる

だけだ…作られたカラクリも寂しいだろうし…！」

ミジユナ「ありがとう。これなに？可愛い」

これ貰っていい?」

ハート型のカラクリでコードがぶら下がってる

ゲノセクト「うん! いいよ! あ、君はこれとかどうかかな…」

と何かを取り出そうとものを引っ張るとつられて

何かが落ち、隠しスイッチが押されてしまう…

ミジュスケ「ん? 今カチツって?…」

ミジュナ「あれ? 天井が高くなってない?」

ミジュスケ「ん? ほんとだ…周りも暗くなってる…

つて!! 俺らがゆっくりに落ちてるだけじゃん!!」

ゲノセクト「あわわわ! それは緊急の脱出システ

ム!」

ミジュスケ「どうしたらいいのー!」

ゲノセクト「とりあえず落ちたら前に進んでく!」

ミジュスケ「分かったく!」

地下…

ミジュスケ「ここが地下かな? 凄く暗いね…とりあえず

進めるところに進もつか…!」

ミジユスケは何かに引つ張られたので振り向いた

ミジユスケ「ミジユナ？」

ミジユナ「…」

ミジユスケ「ミジユナ？大丈夫？」

ミジユナ「ご、ごめんね…ミジユスケ…あたし…

暗くて狭いところがダメなの…」

ミジユナは蹲つて震えている…

ミジユスケ「そうなの？」

ミジユナ「ううっ…昔…興味本位で覗いて見た

深い井戸に落ちて…次の日まで…出れなくなる…」

あつて…それから暗くて狭いところが…。…1人きりで…

このまま助からないんじゃないかなって考えてた…」

ミジユナは涙目になっている…

ミジユスケは暗くてはつきり見えてないが

ミジユナの涙を拭いてあげて…

ミジユスケ「ミジユナ…今は俺がいるから安心して！」

ミジユナ「…！ミ…ミジユスケ？」／／／

ミジユナ（なんでかな…？暗くて見えないのに…  
笑ったミジユスケの姿が見えるよ…）

ミジユスケ「とりあえずここから出ないと  
いけないから俺についてきて？」

ミジユナ「う、うん…！」

ミジユスケは暗い道を手当り次第進んでいる…

ミジユナはミジユスケの手を強く握りしめ  
ついてきている。

ミジユスケ「！あ！光だよ！」

ミジユナ「出口？」

ミジユスケ「そうみたい！」

出口

ミジユスケ「穴？」

ミジユスケは上を見る

ミジユナ「石の階段がある」

石の螺旋階段が地上へ繋がっていた

ミジユスケ「この階段を登れば上の地上に

出られるってことかな？」

ミジユナ「登ろう」

ミジユスケ「うん！」

2人は階段を上る

ゲノセクト「だ、大丈夫？」

ミジユスケ「ゲノセクト！」

ミジユナ「何とか大丈夫……！」

ゲノセクト「ごめんなさい！僕がこんな仕掛け作ったばっかりに……」

ミジユスケ「いいよ別に！楽しかったし！」

ミジユナ「うん……嬉しかったから……」

ミジユスケ「ん？」

ゲノセクト「ところでまだ見てく？」

ミジユスケ「うん。もう夜になっちゃったし

今日はこの辺でお開きするよ。」

ゲノセクト「そっか……」

ミジユスケ「また遊びに行ってもいい？」

ゲノセクト「う、うん！もちろん！」

ミジユスケ「ありがとう！じゃあまたね〜」

ミジユナ「またね〜」

ゲノセクト「た、楽しかった〜じゃあね〜！」

……

ミジユスケ「ところでミジユナ？嬉しかったって

どういうこと？」

ミジユナ「…ひくみくつ！」

## 卷之十四 一夜 羽休み！

雨が降っている…

ミジユナ「はあ…雨ってテンション下がるよね…」

ヒコザル「まあ空が泣いてるんだ…仕方ないよ…

でも君が泣いちゃいけないよ」

ミジユスケ「ミジユナ。雨だって悪いことばかりじゃないよ？

夏はこれぐらいの方が涼しいし、雨ってなんか幻想的じゃない？」

ミジユナ「…そうね…ありがとう」

ゲコガシラ先生「席につけろ配るものがある」

ミジユスケ「配るもの？」

ゲコガシラ先生「もうすぐ夏休みだが…夏休みの定番…宿題がある」

メツソン「しゅ！宿題…！」

サルノリ「なに。宿題なんてすぐにF i n i s h さ！」

メツソン「そ、そうだな…1日数ページずつで

やっていけば…宿題なんて…」

「ゲコガシラ先生「計画的な者もいるようじゃが…  
気をつけなさいよ?特に…ミジユスケ…君だ…」

ミジユスケ「えっ?…僕?」

ゲコガシラ先生「そうだ…君は抜けているところがある…ミジユナ。  
夏休み、たまに声をかけてやりなさい。」

ミジユナ「わかりました!」

ゲコガシラ先生「じゃあ今から配るから…

無くさぬよう気をつけなさいよ?」

クラス「は〜い」

放課後…

ミジユスケ「夏休みだ〜」

ミジユナ「ミジユスケ?宿題をまず終わらせた方  
がいいよ?」

ミジユスケ「と言つても…やる気出なくい…」

ミジユナ「全く…明日予定ある?」

ミジユスケ「え?特にないけど…」

ミジユナ「じゃあ明日ミジユスケの家に行くから



一緒に頑張りましょう？」

ミジユスケ「え〜…」

ミジユナ「そうでもしなきゃあなた勉強しないでしょう？」

ミジユスケ「でも〜そんないきなり宿題を

終わらせなくて…」

ミジユナ「でもギリギリになっていきなり

終わらせるよりはいいでしょ？」

ミジユスケ「まあ…そうかもしれないけど…」

ミジユナ「じゃあ決まり…!」

ミジユスケ「まあいいけど…」

ミジユナ「じゃあ明日ね!」

ミジユスケ「うん。」

次の日…

コンコン

ミジユナ「ごめんくださ〜い!」

ミジユスケ「空いてるよ〜」

と言いながらミジユスケがドアを開けて出てくる

ミジユナ「おじやましまさす…あれ？」

妹さんがいるって言ってなかったっけ？」

ミジユスケ「妹なら遠くの学校で寮生活を

しているから今はないんだ」

ミジユナ「そうなんだ」

ミジユスケ「さーて……ゲームでも…」

ミジユナ「宿題やっちゃうよ？」

ミジユスケ「……はい…」

宿題中…

ミジユスケ「あれ？ここの答えミジユナと違う？俺間違えたかな？」

ミジユナ「えっ？あくここの計算はあたしのも

ミジユスケのでも間違いではないよ？」

ミジユスケ「え？そうなの？」

ミジユナ「うん。あ、でもここの途中式が違うよ？」

ミジユスケ「あ、ほんとだ…消しゴムつと…

僕…暑いしちよつと飲み物持つてくるね」

ミジユナ「行ってらっしゃい」

ミジユスケは氷の入った麦茶を持ってきた

ミジユスケ「おまたせくはい」

ミジユナ「ありがと」

2人は麦茶を飲みながら勉強した：

ミジユスケ「ねえ？ミジユナ？この文字ってこれで合ってる？」

ミジユナ「えっ？えつとね…うん！大丈夫！」

ミジユスケ「良かった」

ミジユナ「ふふっ…」

ミジユナは麦茶を飲もうとしたがピタツと止まった

ミジユナ「あれっ?!」

ミジユスケ「!ど、どうしたの？」

ミジユナ「えっ!う、ううん!なんでもない！」

ミジユナ(どつちがあたしのコップだったっけ…!!)

あれく?!あたしのは左側にあつた…あれ?でも

今取つたのは左側のコップ?右側のコップ?!

どつち?!どうしよう…間違えたら…か、関節キスに…

あつ!そうだ!氷の数!あたしのコップには確か氷は

3つ入ってたはず…このコップは…1…2…3つだ!  
なんだ〜こつちがあたしのかよかった…)

ミジュナは念の為もうひとつのコップに目を向けた

ミジュナ「3つだ!!」

ミジュスケ「え?」

ミジュナ「え?あ、この計算から導き出せる

答えは3つだなくって思ってた…」

ミジュスケ「そうなんだ〜」

その時ミジュスケが麦茶を飲もうとコップを持ち…

ミジュナ「わあー!」

ミジュスケ「えっ!!なに?!」

ミジュナ「い、いや…なんでも…」

ミジュスケ「へっ…?」

ミジュナ(間違えてる…?合ってる?…どっち…?)

ミジュスケは麦茶を飲んだ

ミジュナ(飲んだ〜!!)

と…こんなやり取りをしながら…

ミジユスケとミジユナは黙々と宿題をしている…

ミジユスケ「もうこんな時間だ」

ミジユナ「ほんとだ〜」

ミジユスケ「お礼に料理作ってあげるよ。

何食べたい？」

ミジユナ「えつとね〜中華そばが食べたい〜！」

ミジユスケ「わかった〜作ってくる〜」

数分後

ミジユスケ「出来たよ〜」

ミジユナ「は〜い」

カタカタと玄関が音を立てている

ミジユナ「風強いね〜」

ミジユスケ「そうだね〜。さて！冷めないうち食べちやおう」

ミジユナ「うん」

2人「いつただつきま〜す！」

食事が進む

ミジユナ「う〜ん！美味しい〜！」

ミジュスケ「良かった〜!」

ミジュナ「この味付けもミジュスケがしたの?」

ミジュスケ「うん! 数種類の調味料を入れてこの味を作ったの!」

ミジュナ「凄いね〜! ミジュスケは〜」

ミジュスケ「この家で料理作れるの俺だけ

だったから仕方なく料理を始めたんだけど…

作っていくうちに料理の楽しさが分かってきて

こんなに作れるようになったの!」

ミジュナ「そっか〜 ミジュスケは偉いね〜

ほんとに努力家だね… 妹さんは料理作れるの?」

ミジュスケ「ううん… 妹は料理はからきしだめだよ?

料理のことを何も分かってないどころか…

どうやったたら… あんなものが作れるんだらう…」

ミジュナ（何があつたんだらう…）

食事が進み

ミジュナ「ごちそうさま!」

ミジュスケ「ごちそうさま!」

そして皿洗いをし…

ミジユスケ「もう遅いし送るよ」

ミジユナ「それが…ミジユスケ…」

ミジユスケ「ん？」

外は嵐のように荒れている

ミジユスケ「わーひどい嵐ー…」

ミジユナ「そうだねー」

ミジユスケ「帰る？」

ミジユナ「帰れないよ！」

ミジユスケ「どうしょっか…泊まる？」

ミジユナ「そうね…止むまで待…えっ?!」

ミジユスケ「どうしたの？」

ミジユナ「え?!泊まるって本気?!」

ミジユスケ「うん。本気だけど？」

ミジユナ「あたし着替えを持ってないよ?!」

ミジユスケ「妹のがあるから大丈夫だよ？」

ミジユナ「…ミジユスケの親に迷惑だし…」

ミジユスケ「親はいないよ?」

ミジユナ「……ミジユスケは平気なの?」

ミジユスケ「うん。構わないよ?」

ミジユナ「……そうじゃなくて……」

ミジユスケ「ん?」

ミジユナ「結婚もしてない男と女が一つ

屋根のしたなんて……」ボソツ……

ミジユスケ「え?」

ミジユナ「……!ご、ごめん!忘れて!

それじゃほんとにいいの?」

ミジユスケ「うん!」

ミジユナ「ありがとう……」

ミジユスケ「先にお風呂に入ってきちやっついていいよ?」

ミジユナ「分かった」

お風呂

ミジユナ（泊まっちゃった……無理にでも帰れば良かったかな……）

ミジユナ「わあ!このお風呂すごく風流どこかの



旅館みたいくはやく洗っちゃおう

シャンプルー…つてこれリンスだ〜！きや〜！石鹸がすべる〜！！

ミジユスケ「ミジユナ〜」

ミジユナ「！！ミジユスケ?!」

ミジユスケ「大丈夫？悲鳴が聞こえたけど？」

ミジユナ「だ！大丈夫〜！石鹸がすべつて困っちゃただけ〜！」

ミジユスケ「そつか！着替えとバスタオルここに置いとくね〜」

ミジユナ「わ、分かった〜！！」

ミジユナ（…そりやミジユスケだつて男の子だもん…

覗きに…来……る……わけないか……）

ミジユナ「それにしても良い湯〜！あつたまる〜…このまま

寝ちやいそ〜…つて寝ちやダメ！もう出よう！」

お風呂を上がり…ミジユスケの部屋

ミジユナ「お風呂、頂きました〜」

ミジユスケ「じゃあお風呂入つてくる〜」

ミジユナ「行つてらっしゃい〜」

ミジユナ（…よく見たら…凄く整理整頓されてて綺麗な部屋ね〜…）

ミジュナ「小さなホコリもない…」

【ミジュスケは綺麗好き】

ミジュナ「ほんとに…泊まって…いいの…かな…」

ミジュナは眠ってしまう…

数十分後…

ミジュナ（あれ…あたし…いつの間に…眠っちゃって…）

ミジュスケ「よいしょ…」

ミジュナ「ミジュスケ？」ボソツ…

ミジュナはミジュスケに姫様抱っこされている

ミジュナ（?!）

ミジュスケ「はやく…寝室へ…」

ミジュナ（寝室?! 寝室で何を?!）

ミジュスケ「…重い…」

ミジュナ「誰が重いのよ!」

ミジュスケ「わあ! 起きてたの?!」

ミジュナ「…い、今起きたの…!」

ミジュスケ「布団をひいたからすぐ寝れるよ?」

ミジュナ「あ、ありがとう…あれ？ミジュスケは自分の部屋にベットなかったっけ？」

ミジュスケの部屋には天井から吊り下げられたハンモックのようなベットがある

ミジュスケ「外嵐だし1人じゃ心細いかなって思ったから今日はこっちで寝ることにしたの？」

ミジュナ「…あ、ありがとう…」

ミジュスケ「いや、お礼を言うのはこっちだよ！

今日はありがとう！宿題がけっこう捗ったよ」

ミジュナ「ううん！こっちこそ捗ったし

ご飯やお風呂もありがとう」

ミジュスケ「ミジュナも眠いみたいだしもう寝よつか？」

ミジュナ「うん」

ミジュスケ「じゃあおやすみ」

ミジュナ「お！おやすみ」。

ミジュナ（つてなんで?!ミジュスケなんでこんなに

普通に対応できるの〜！付き合ってる女子が

隣にいるんだよ!もうちよつとドキドキとかしないの

!それともあたしがドキドキしすぎなのかな…!

…ミジユスケはもう…寝たかな?

ミジユスケ「…ミジユナ…?」

ミジユナ「!!な、何?」

ミジユスケ「大丈夫?寝れる?」

ミジユナ「えっ!ミジユスケも本当はドキドキして

眠れないの?あたしだけがドキドキ

してるんじゃないんだ」

ミジユスケ「外嵐だし。怖いかなって…」

ミジユナ「そっちかあく!!!」

ミジユナ「う、ううん!大丈夫!」

ミジユスケ「ありがとう…久しぶりに家にいる

時間が楽しいって思えたよ…」

ミジユスケ「えっ?うん。あたしも楽しかった。」

ミジユスケ「明日夏祭りがあるんだって。行ってみない?」

ミジユナ「うん!行きたい!」

ミジュスケ「そっか！次の日に楽しみがあると寝るのも楽しくなるよね…」

ミジュナ「うん！じゃあ。明日のためにもう寝よっか？」

ミジュスケ「お祭りは早くてもお昼からだけどね」

ミジュナ「そっか！でもおやすみ」

ミジュスケ「おやすみ」

次の日：チュンチュン

カーテンが少し空いて光が差し込んできている

ミジュナ「起きて…起きて…ミジュスケ！」

ミジュスケ「…んあ！」ゴチン…

ミジュスケは飛び上がってミジュナに頭をぶつけてしまう

ミジュナ「いったい…」

ミジュスケ「僕も痛い…何？」

ミジュナ「外見てよ」

ミジュスケ「外？」

ミジュスケはカーテンを全開に開け

2人で外を見る

ミジユスケ「うわろ!!」

ミジユナ「凄いでしょ?!」

外の風景は雨で濡れた木々や草たちが嵐の去った後の  
にほんばれで光り輝いている。

ミジユスケ「綺麗〜」

ミジユナ「でしょ? 幻想的だよね〜」

ミジユスケ「……ミジユナ〜」

ミジユナ「なに?」

ミジユスケ「おはよう……!」

ミジユナ「……ふっ……おはよう!」

## 卷之十五 夏祭り 天下花火の術！

ミジユスケ「さて…もうすぐ約束の時間…」

~~~~~

ミジユスケ「いただきま〜す」

ミジユナ「…ザ・朝ごはんって感じね…」

朝ごはんのメニユーはサラダと目玉焼き ベーコン

パン 醤油と塩が置いてある

ミジユスケ・ミジユナ「言っただっきま〜す！」

食事を終え…

ミジユスケ・ミジユナ「ごちそうさま〜」

ミジユスケ「ミジユナどうする？ 一旦家帰る？」

ミジユナ「うん。そうするよ」

ミジユスケ「分かった。じゃあお祭りがやる現地に

集合で…何時がいい？」

ミジユナ「う〜ん…17時とかどう？」

ミジユスケ「了解。じゃあ17時に現地集合」

ミジユナ「うん。」

~~~~~

ミジユスケ「うくん…ちよつと遅れてるなあ…

なにかあつたのかあ？」

その頃ミジユナ

ミジユナ「すいません。急いでるんでそこどいてくれませんか？」

サム「貴様…忍者か…？」

ミジユナ「なんですか…？」

サム「いやねえ。忍者だったらちよつと忍者を

辞めて貰えないかな」と

ミジユナ「まだ忍者ではない…」

サム「という…忍者を志望している学生さんということか…？」

ミジユナ「そうだとしたら…？どうする？」

サム「やれ！」

サムの後ろから2人が飛び出してきた。

ミジユナ「?!」





サム「言う必要はねえな……」

ミジュナ「理由もないのに辞めるわけにはいかないわ」

サム「あくまで辞めるつもりはねえと……」

ミジュナ「そうね。」

サム「これからは長い付き合いになりそうだな……」

ライ「サムみたいなやつをなんて言うか知ってるか？ダン？」

ダン「あ？」

ライ「スニーカーつつうんら」

ダン「いやいや、それを言うならトースター」

サム「黙ってる！てめえら！んで！

ストーカーだろ！そしてストーカーじゃねえよ！」

ミジュナ「？」

サム「まあ……今日のところは見逃してやるよ」

ライ「あら、切れちまった……ちよつとお祭りで買ってくらあ」

ライは飲み物を買に行こうとしてる。

ダン「あ、俺も行く」

サム「帰るんだよ！」

ライ「えー！喉乾いた〜!!!」

サム「知るか！いいから！ダン早くしろ」

ダン「え？」

サム「テレポートだよ！」

ダン「あ〜わかった。」

サムは手帳みたいなのをサムに渡した

サム「パスポートじゃねえよ！」

ダン「え？違うの？」

サム「違うわ！早く帰るぞ！」

3人はテレポートで消えた。

ミジュナ「一体なんだったの…？」

一方ミジュスケは屋台の中歩いていた。

ミジュスケ「もう先にいるのかなあ〜？…ん？…あれ？チハル？」

チハル「ん？ミジュスケ？」

ミジュスケ「やつぱりチハルだ〜久しぶり〜」

チハル「久しいな〜」

ミジュスケ「チハルもお祭りを楽しみに来たの？」

チハル「ん? まあな。こうやって夏に浮かれた馬鹿共  
を見ながら食うかき氷は上手いからなあ」

ミジユスケ「あはは…相変わらず変わった趣味をお持ちで…」

チハル「お前、1人なのか?」

ミジユスケ「ううん。ミジュナと来てるよ?」

チハル「そうかい。さてどうすつかなく

来てみたが暇なんだなく金ねえし」

とポケットから五百円玉がジャラジャラと…

ミジユスケ「いや! 結構あるじゃん!」

チハル「いやいや…ゲーセンのメダルも混じってるし

こんなのはした金だよ。」

ミジユスケ「そうなんだく…うわっ!」

チハル「んっ?」

ミジユスケとチハルは誰かに人気のない所へ引つ張られた

ワルビル「お前からちと金出せや」

ミジユスケ「え?」

ワルビル「あ? 聞こえなかったのか?」

チハル「聞こえてた聞こえてた。ほれやるよ」

チハルはゲームセンターのメダルを投げ渡した

ワルビル「あ?!なめてんのかお前!」

チハル「舐めないよ。舐めるわけない気持ち悪い。」

ワルビル「その態度がなめてるって言ってるんだよ!」

チハル「全くうるせえやつだなく何が欲しいんだ?金だっけ?

言っとくけど俺金ねえよ?嫁さんにお財布管理されてる

サラリーマンくらいに金ねえよ?」

ワルビル「金がねえなら…:体で支払ってもらうしかねえな…」

ワルビルは指をポキポキ鳴らした

ミジユスケ「ちよ!暴力は辞めてください!」

チハル「そうだよ?それに俺ヤバいかんね?

まじヤバいかんね?一瞬で土下座してやんぞこら?」

ミジユスケ「なんで喧嘩腰なのに降参前提なの…」

ワルビル「うるせえ!」

ワルビルは殴りかかってきたが…:チハルが止めた

チハル「どうすんだ?土下座してやろうか?してもらおうか?」

ワルビル「ちっ…もういい!」

ワルビルは去っていった

ミジユスケ「なんとか引いてもらえた」

チハル「そうだなー」

ミジユスケ「で?どうするの?チハルは?」

チハル「そうだな〜とりあえずあいつから取った財布交番にでも届けつかない?1人でこんなに持つてゐるわけねえからな」

チハルはワルビルから財布を4つすつていた。

ミジユスケ「…いつの間に……………」

チハル「じゃあなー」

ミジユスケ「うん!……………さて…一旦待ち合わせの場所に

戻ってみようかな〜?」

待ち合わせの場所

ミジユナ「待ち合わせってここだよね…?」

ミジユスケ「うん…!そうだよ…!」

ミジユナ「あ!ミジユスケ!ミジユスケ遅い!」

ミジユスケ「遅いのはミジユナ!」

ミジュナ「ま、まあ時間には来てなかったね…ごめん  
実は変な人たちに絡まれてたの」

ミジュスケ「変なひと？」

ミジュナ「なんか3人組で忍者を恨んでる？みたいだった。」

ミジュスケ「危ないね…まあミジュナの身に

何かあったんじゃないかと良かったよ。」

ミジュナ「う、うん。ありがとう…！」／／

ミジュスケ「そういえばこの前行ったシヨツピング

モールのアイス屋さんがここでも出てるんだって」

ミジュナ「そうなの？」

ミジュスケ「行ってみよう！」

ミジュナ「うん！」

アイス屋さん

アイス屋さん「いらつしやうい！」

ミジュスケ「すいませうん！アイスクリーム

501番を2つください！」

アイス屋さん「はうい！」

ミジユスケ「ありがとうございます！はい」

ミジユナ「ありがとう」

ミジユスケとミジユナはアイスを食べる

ミジユナ「美味しい」

ミジユスケ「僕ラムネ好きなんだよね」

ミジユナ「今年はどんな花火がやるかな」

ミジユスケ「あれ？知らないの？ミジユナ

今年花火やらないんだよ？」

ミジユナ「え？そうなの？」

ミジユスケ「花火作る人が怪我して作れなかったり

ゴミを不法投棄する人が年々増えていたり

花火大会為のお金がなかったりで……」

ミジユナ「そっか……」

ミジユスケ「……ミジユナ？土手に……あ、いや……射的しに……」

ミジユナ「射的？」

ミジユスケ「さっき射的屋で花火セットが景品に

あったからさ！一緒にしよ？」



ミジユナ「うん。」

射的屋

射的屋「へいらつしやい！」

ミジユスケ「すいません！2人分お願いします〜！」

射的屋「毎度〜！」

ミジユナ「ありがとうございます」

ミジユスケ「玉は5発！」

ミジユナ「そういえばミジユスケって射的とかって

苦手じゃなかったっけ？」

ミジユスケ「あ…そういえばそうだった…」

ミジユナ「……まあ、あの花火って書いた積み木を

倒せばいいのよね？」

ミジユスケ「多分！」

ミジユナ「任せて…」パン!!…パン!!…パン!!

ミジユナは3発うって1発が別の景品に当たった（お菓子）

ミジユナ「…やっぱり射的と苦無とは違うわね…」

ミジユスケ「頑張れ！」

ミジュナ「うん……」パン!!

花火の積み木に当たったが倒れなかった。

ミジュスケ「惜しい！」

ミジュナ「……!」パン!!

花火の積み木は倒れた

ミジュスケ「やったく!!」

射的屋「おめでとう〜! はい景品！」

ミジュナ「……花火つてこつちか……」

ミジュスケ「確かに綺麗だけでも……」

ミジュナが貰ったのは花火の風景画だった

ミジュスケ「すいません! 花火セットはどれですか？」

射的屋「花火セットはあれだよ？」

花火セットと書かれた空き缶があった

ミジュスケ「……あれか……」

ミジュナ「頑張つて！」

ミジュスケ「……」パン!!

ミジュスケ達は神社から人気なの無い土手に来た

(燃えやすい草などがない場所)

ミジュナ「惜しかったね〜」

ミジュスケ「うん…でもまあ逸れて当たった3等の中に花火があつて良かったよ。」

ミジュナ「うん。」

ミジュスケ「はい。ミジュナの分！」

ミジュナ「ありがとう」

ミジュスケとミジュナは線香花火をした。

ミジュナ「綺麗だね〜！」

ミジュスケ「うん！」

そしてしばらくして…

ミジュスケ「あ、落ちちやった」

ミジュナ「あたしのも。」

ミジュスケ「……………」

ミジュナ「帰ろつか？」

ミジュスケ「うん。でもその前にちよつとこれを見

て？」

ミジュナ「ん？」

ミジュスケは持っていたバツクの中から

カンカンや懐中電灯やら色々なものを出した

ミジュナ「なにそれ？」

ミジュスケ「まあ見てて！」

ミジュスケは透明な瓶になにか入れたり

色々セツティングをしていた

ミジュナ「すごい綺麗だね、その透明な瓶」

透明な瓶は赤や青、緑色などに光っていた

ミジュスケ「まだまだく！」

透明な便の下に懐中電灯をセツトしてライトを付けた

ミジュナ「明るいく！」

ミジュスケ「仕上げに！」

ミジュスケは水風船を上投げ：

ミジュスケ「：はっ！」

ミジュスケは水風船を苦無で切った

水風船を切ると中から水が出てきた！

その水は照らされた様々ライトの色によって鮮やかな  
花火のようなものだった。

ミジユナ「!!!……綺麗〜」

ミジユスケ「今年花火やらないって聞いて

こういうのをやってみようかな〜って思ってたさ」

ミジユナ「…ありがとう!」

ミジユスケ「どういたしまして!」

ミジユナ「来年はみんなで花火しよ?」

ミジユスケ「うん!」

卷之壺 「長編一 伝説侍」

??? 「古代の民に封印されし伝説の侍よ：

現代にて蘇り我が野望を叶えたまえ！

………ううう！はあく！！」

??? は謎の儀式で何かを呼び出した

そしてある晴れた夏の日：

ミジュスケ 「あく…夏は暑い…」

ミジュナ 「暑いね…」

ミジュスケ 「まだかなく売店…」

ミジュナ 「もうすぐじゃないかな？」

ミジュスケ 「なんで俺達が行かなきゃいけないの…」

ミジュナ 「仕方ないでしょ？あたしとミジュスケが

買出し班を選んじゃったんだから」

~~~~~

ミジュスケとミジュナはみんな

山奥のキャンプに来ていた。

ほむら「くっ！いい天気だな〜！」

モモカ「久しぶりに集まってキャンプした甲斐がありましたね〜」

サツキ「そうだな〜」

ミツハ先生「あつ、そうでした！自己紹介が遅れてました〜！」

ミジユスケ「そうだったね」

ミジユナ「こちらあたしらの学校の保健の先生の

ミツハ先生。今日キャンプへ行くって話したら

保護者として来てくれたの」

ミツハ先生「初めまして。よろしくお願ひします〜」

モモカ「よろしくお願ひします〜！」

ミジユナ「こっちはあたしらの中学校の時中が

よかつた同級生！左からモモカ」

モモカ「はじめまして〜！」

ミジユナ「サツキ」

サツキ「よろしく頼みます〜！」

ミジユナ「ほむらです〜！」

ほむら「よろしく！」

ミツハ先生「よろしく！さて！キャンプの準備をしましょうか？」

サツキ「よし！モモカとミジュナは売店で飲み物とかを

買ってきてもらつていい？んでほむらとミジュスケはここでテントを

建てといて。先生は：どうしよう：」

ほむら「おい、なんでオイラが

お前の命令を聞かなくちやいけねえんでい？」

サツキ「仕方ないでしょ？指示を出す人があたしくらいしか

いないんだから。それとも何？あんた指示できんの？

親に頼つてばつかのあんたが」

ほむら「頼つてねーよ！」

叶うならあんな家今すぐに出て言つてやらあ！」

サツキ「じゃあ出ていけばいいじゃない」

モモカ「まあまあ二人とも喧嘩しないで」

ミジュスケ「相変わらず二人は仲が悪いなあ」

ミジュナ「じゃあ！じゃんけんで決めよう！買出し班とテント班

とお昼班の3つに分けよう。」

買った人から何するか決められることで！」

ミジユスケ「うん。それなら文句ないでしょ？」

ほむら「まあ……」

サツキ「それなら……」

モモカ「じゃあじゃんけんしまししょう！」

ミツハ先生「最初はグ〜！」

6人「じゃんけん……！」

~~~~~

ミジユスケ「こんな暑いならテント班に

つけばよかつた〜……」

ミジユナ「あ！売店見えてきたよ〜！」

ミジユスケ「売店まで遠いなあ〜……」

売店

ミジユスケ「へえ〜やっぱ色んなもん売ってるね〜」

ミジユナ「買うのは飯盒と石炭と……」

ミジユスケ「あ、ほむらが電池買ってきてって

言ってた」

ミジュナ「じゃあ電池も…あとは…」

その頃…

お昼班

モモカ「なんてお呼びしたらいいですか？」

ミツハ先生「先生でいいわよ？えっと…モモカちゃん

でいいかしら？」

モモカ「はい！先生包丁さばき上手いですね〜！

普段もお料理とかされるんですか？」

ミツハ先生「はい！モモカちゃんも料理上手いね〜。」

モモカ「私は一通りの家事を教えてもらったので！」

テント班

ほむら「サツキ！そっちちゃんと引っぱれ！」

サツキ「ほむらこそ！そこもつと右だよ！」

ほむら「これでいいんだよ！」

サツキ「良くねえだろ!?!そこから間違ってる

からちゃんと組み立たないんだろ?!」

ほむら「そっちがちゃんと張れば上手くいくんだよ！」

サツキ「お前が間違えてるんだろ！この灯火野郎！」

ほむら「なんだとこのW字模様！」

サツキ・ほむら「やんのかコラ〜!!」

2人は喧嘩しながら作業を進めていた：

さらに一方ミジユスケ達

ミジユナ「やつぱり重いね〜」

ミジユスケ「あ？ごめんね。俺もう1つ持つよ袋」

ミジユナ「あ、ありがとう〜」／

ミジユスケ「それにしてもさつきより少し涼しくなったね？」

ミジユナ「雲が多くなってきて太陽が隠れちゃったからかな？」

ミジユスケ「まあなんにしてもちよつと過ごしやすいや」

ミジユナ「さて〜」

ミジユスケとミジユナはみんなのいるキャンプ場に着いた。

ミジユナ「どう〜？テント立てられた〜？」

ほむら「だから何回言えばわからあ？あ？100回言えば満足か？」

サツキ「お前がちゃんとしてればこつちも上手く

いくんだよ！お前が分かるか？あ?!」

ミジユスケ「進んでないみたいだね…」

ミジユナ「いい加減にしてよ！二人とも！」

ミジユスケ「ちゃんと仲良くやんなきゃダメだよ！」

サツキ「だってミジユナア〜！このネズミ野郎がさあ〜」

《ミジユナに向かつて》

ほむら「オイラの言う事聞かねえんだよ〜このモモンガ野郎が〜！」

《ミジユスケに向かつて》

ミジユナ・ミジユスケ「だ、だからって……………」

そんな喧嘩ばつかしてちゃ…」

モモカ「お昼出来ましたよ〜！」

ミジユスケ「わ、分かった〜」

ミジユナ「ほらご飯だべよ？」

ほむらとサツキはいがみ合っている…

お昼〜

ミジユナ「美味しい〜！」

ほむら「ああ、確かにうめえが、ミジユスケの

料理の方がうめえな〜」

サツキ「ああ?!失礼だろうがためえ!」

ほむら「ああ?!別に誰のがうまいと言ってなにが悪い?!」

サツキ「悪いわ!食べさせてもらって失礼だろうが

って言ってるんだよ!」

ほむら「じゃあ嘘でもつけっただのか!」

サツキ「そういう事じゃねえだろ!」

後ろで勝手に2人は喧嘩している:

モモカ「そう言えばミジユスケくんの料理って

結局食べたことなかったよね」

ミジユナ「ミジユスケの料理すごく美味しいんだよ!」

ミジユスケ「でもこの料理も美味しいよ!」

あ、そういえばチハルは?」

ミジユスケの質問に喧嘩していたほむらが

一瞬こつちを向き:

ほむら「ああ、あいつ気が乗らないってボイコットした」

サツキ「こら!もう言い返せなくなったのか?」

しっほまいて逃げるのか?ネズミ!」

ほむら「ああ?!」

2人はまた喧嘩しだした：

ミツハ先生「そういえば近くの川で水遊びをする<sup>が</sup>と聞いたのです<sup>が</sup>？」

ミジユナ「そうそう。でも雲がどんどん出てきてるしどうしよう？」

ミジユスケ「まだ暖かいし大丈夫じゃない？」

モモカ「では早く食べちゃいましょう！」

みんなは昼食を食べ終え近くの川へ向かった

ミジユナ「綺麗だね〜」

ミジユスケ「泳ぎやすい川だ〜！」

ほむら「久しぶりにオイラも泳ごうかね〜」

サツキ「あらら死に行くのかい？あんたの

炎に水が触れたらやばいんじゃないのか？」

ほむら「ちゃんと配慮するに決まってるだろ？お前こそ電氣流して

川にいる奴ら殺すんじゃないよ？」

サツキ「余計なお世話どころ…」

モモカ「わ〜い！」

ミツハ先生「滑りやすいから気をつけてくださいね〜」

ミジユスケ達「は〜い」

ドカーン!!!

ミジユスケ「えっ？」

ミジユナ「なに?！」

ほむら「あつちの方からだ」

山の方から煙が出ていた。

サツキ「行ってみよう！」

ミツハ先生「気をつけてくださいよ〜！」

ミジユスケ達は爆発した所へ向かった。

爆発したのは薄暗い森の中だった。

ミジユスケ「この辺で：爆発の音が：」

ほむら「あれじゃねえか？」

サツキ「あの煙か」

ミジユナ「なにあれ？影がある。」

モモカ「皆さん気をつけてくださいね」

D r. ピョン 「んあ？誰だ！」

ほむら 「てめえこそ誰だ！」

そこにはドラピオンとキリキザンとハガネールがいた

D r. ピョン 「この俺様を知らないとは罪なガキだ：

俺様は天才医師！そして同時に天才博士！D r. ピョン様だ！」

ミジユスケ 「なんで医者がこんなところに？」

D r. ピョン 「ふっ！教える義理はない！と言いたいところだが、

特別に教えてやる！いでよ！ミュウツー！！」

ミジユナ 「ミュウツー？」

D r. ピョンの煙からミュウツーが出てくる

D r. ピョン 「ミュウツー。貴様は今から俺様の部下だ：

俺様はこのミュウツーを使ってこの世界の馬鹿共の頂点に立ち

この世界の王に：いや！神になってやる！」

サツキ 「馬鹿共の頂点って馬鹿王じゃん」

D r. ピョン 「なんだと：？ミュウツー：あの小娘を殺せ！」

ミュウツー 「なぜ？」

D r. ピョン 「なぜだと？！貴様は俺様の部下になったんだ！



俺様の命令を聞け！」

ミュウツー「私はなぜあなたの部下になったの？」

D r・ピヨン「俺様がお前の封印を解いてやったからだ！」

ミュウツー「あなたが私の封印を解いたの？」

D r・ピヨン「そうだ！」

ミュウツー「なんで解いたの？」

D r・ピヨン「俺様の野望を叶えるためだ！」

ミュウツー「何をすればいいの？」

D r・ピヨン「俺様の邪魔になるやつを殺せ……」

ミュウツー「命を奪うの？」

D r・ピヨン「そうだ……」

ミュウツー「じゃあ……」

D r・ピヨン「さつきから質問が多いぞ！」

貴様は俺様の言うことだけを聞いていれば……」

ミュウツーはD r・ピヨンに素早い蹴りを

放ちD r・ピヨンは吹っ飛んだ。

D r・ピヨン「……がっ……」

シャツク「?! 貴様…」

ミュウツ―「あなたもあの人の仲間ですか？」

ゴウキ「だったらなんだ!!」

ゴウキがミュウツ―に攻撃をして、砂埃が舞った。

がゴウキの攻撃をミュウツ―は片手で抑えていた。

ゴウキ「あ?!」

ミュウツ―「生き物の命を奪う者はこの私が許さない…

仲間だと言うならにタダでは済まさない…」

ミュウツ―はハガネールとキリキザンを倒した。

キリキザン「ぐはっ…」

ハガネール「ああっ…」

ミジュスケ「一体…どういうこと…なのかな？」

ミジュナ「さあ…」

ミュウツ―「……………」

ミュウツ―はどこかへ行ってしまった。

サツキ「…なんだったんだ？あいつ？」

チハル「あいつはミュウツ―」

ほむら「うお?!チハル!なんでこんな所に?!」

モモカ「チハルくんも、キャンプに来ていたんですね!」

チハル「んなんじゃねえよ。俺はミュウツウの封印石に前々から興味があつたな。今日ちよいと来てみたんだ…そしたらあの野郎がミュウツウを復活させやがった。」

ほむら「ミュウツウは何者なんでい?」

チハル「ミュウツウは昔封印された伝説の侍なんで封印されてたかは俺も知らねえ。ミュウツウは封印から解き放たれた今

今生きている全ての者に恨みを持つてる。と

俺は思っていたがそれも分からねえ。」

ミジユスケ「さっきの言葉や言動といい

全く恨みを持つているようには見えなかつた」

ミジユナ「とにかくミュウツウを追ってみましょう?」

サツキ「と言つてもどこ行つたかも分からないのに…」

チハル「あいつの行つた先なら分かるぜ?」

ほむら「え?なんで?」

チハル「あいつに発信機を付けといた」

ミジユスケ「じゃあ行ってみよう！」

ミジユナ「うん！」

ミジユスケ達はミュウツターの元へ向かった。

Dr・ピヨン「…くっ…ちよつとしくじったが…

俺様の計画に支障はねえ…てめえら行くぞ…」

シヤツク「…」

ゴウキ「うう…」

ミジユスケ達はミュウツターの元へ着いた。

ミジユスケ「ミュウツター!!」

ミュウツター「ん？」

ミジユスケ「君は何が目的なの？」

ミュウツター「目的？やることなんてない…

私はただ眠っていたかっただけ…」

ミジユナ「眠る？」

サツキ「じゃあ特に何もするつもりはないの？」

ミュウツター「はい」

ほむら「この世界を滅ぼすとかじゃ？」

ミュウツー「とんでもない」

チハル「だがお前はそれほどの力を持っている。

野放しにしてたら危険だ。もしお前にそんな

気持ちがあるならねえとしても。」

ミュウツー「はい：では私はどうしたらいいですか？」

モモカ「どういたしましょうか？」

チハル「とりあえず俺たちと来るか？」

ミュウツー「いいんですか？」

ミジユスケ「うん！一緒に考えようよ！

それと：ミュウツーさん！僕と友達になろうよ！」

ミュウツー「うん！ありがとうございます！」

もちろん！私で良ければ：友達に：

ミュウツーがミジユスケ達の所へ行こうとした時：

Dr.ピョン「そうはさせるか：

Dr.ピョンと謎の機械が現れた！

ミジユナ「！さっきの！」

ほむら「と、なんだあの機械?!」

謎の機械がミュウツ―を拘束した。

ミュウツ―「こ、これは！」

D r・ピヨン「ミュウツ―がこの天才の俺様を裏切ると

いう結果を考えずに封印を解いたと思ったか？」

チハル「ちつ…つけていやがったか…」

D r・ピヨン「俺様の命令を聞けないやつなどいらん！」

サツキ「何するつもりだ？」

D r・ピヨン「まあそこで見ている…」

モモカ「よく分かりませんが…！」

チハル「思い通りにさせるかよ！」

モモカとチハルがD r・ピヨンに攻撃を仕掛ける

ゴウキ「ふん!!!」

がゴウキが阻止した

チハル「ちっ！」

D r・ピヨン「もう遅いわい！」

D r・ピヨンは機械を作動させた

ミュウツ―「うわあく!!!」

ほむら「な、なんだ?! あいつ苦しんでる?」

ミジユスケ「やめろく!!」 ボーン!!

謎の機械は煙を噴いて爆発した。

ミュウツ―「あ…あ…」

ミジユスケ「ミュウツ―!! 大丈夫!!」

ミュウツ―「!」 シュン!!

ミュウツ―はDr・ピヨンの持っていた刀を奪い

ミジユスケに斬りかかった…

ミジユスケ「あ…!!」

ミジユナ「はっ!!」

ほむら「なっ!!」

サツキ「ミジユ…!!」

モモカ「!!」

チハル「くっ!!」

Dr・ピヨン「よくやった…ミュウツ―…」

ミジユスケは倒れた。

ミジユナ「ミジユスケく!!!」

ほむら「て、てめえ!!」

チハル「違う! ミユウツーの意思じゃない…」

サツキ「えっ?」

モモカ「あの紫の方がミユウツーさんを

洗脳した…そういうことですね?」

チハル「ああ…恐らくな…」

ミユウツーは赤い目でこちらを睨んでいる

Dr.ピオン「ふっはっはっはっは! よくやったミユウツー…

さて…力は手に入れた…そろそろ行くぞ!」

ほむら「待て! まだおいらたちがいる! 戦え!」

Dr.ピオン「ふん! お前らなどこの力を手に入れた

俺様の敵ではない!」

ほむら「なんだと…やってみなきやわからねえだろうがア!!」

ミジュナ「待って! ほむら!」

Dr.ピオン「ふっ!」

Dr.ピオン達はどこかへ行ってしまった

ほむら「待て! 逃げるな! ミジュナ! 離せ!」



ミジュナ「あいつらを倒したい気持ちには分かる！

でもその前に準備しなくちゃ！あたし達キャンプに来てたんだよ？

武器なんて持ち合わせちやいなし！

ミジュスケだつて…ミジュスケだつて」

ミジュスケ「大丈夫…」

ミジュスケは倒れながら口を開いた

サツキ「ミジュスケ！」

ミジュスケ「大丈夫！致命傷じゃないよ。」

チハル「だけどお前あいつの攻撃まともに食らつたんだぞ？」

ミジュスケ「大丈夫だよ。それより、一旦

ミツハ先生の所に戻ろう？」

モモカ「そうですね。先生もきつと心配してます」

キャンプ場

ミツハ先生「もう！みんなどこへ行っていたの？

心配したんですからね！」

ミジュナ「それが先生…大変なことになって…」

ほむら「ミジュスケが切られた!!」

ミツハ先生「!!なんですって!すぐにきずぐすりを塗らなくては!  
あと包帯!!」グルグル…

ミジユスケ「…あの先生…巻きすぎです…前見えないです…」

ミツハ先生はミジユスケをぐるぐる巻きにした…

サツキ「で…先生今大変なことになってて…」

説明中

ミツハ先生「なんですって!じゃあその人たちを止めないと…」

モモカ「はい…」

ミツハ先生「けど…危ないです…」

ミジユスケ「…僕は行く!」

ミジユナ「あたしも!」

ミツハ先生「いけません!危なすぎます!

先生として見過ごせません!行っってはいけません!」

ミジユスケ「……………」

ミツハ先生「……………」

ミジユナ「……………」

ミツハ先生「って言っても聞きそうにないわね?

わかりました：ただし私もついて行きます！」  
サツキ「よし。決まりだな。」

ほむら「つぎは武器だな：」

モモカ「それなら心配ありません！しのぶ！」

しのぶ「はっ！」

モモカ「用意は？」

しのぶ「出来ております」

モモカ「皆さん！しのぶに頼んで武器は

もう持つてきてもらったわ！」

ミジユスケ「ありがとう！」

ミジユナ「さつすがモモカく！しのぶさん！」

ほむら「用意がいいな」

サツキ「さて！じゃあ準備は終わりだな」

チハル「ああ、幸い奴ら俺が付けた

発信機にはまだ気づいていない。まだ追える」

ミジユスケ「よし！それじゃあ！奪い返すぞ！」

ミジユナ「うん！」

ミジュスケ達はミュウツの所へ向かった

サツキ「こんな所にミュウツがいるの？」

チハル「あれだ！あの廃城だ！」

ほむら「あの廃城にいるんだな……」

ミジュナ「つて……周りの岩場に敵がいるのバレバレ……」

中央通つたら挟み撃ちにされるわね……ここは……」

ほむら「行くぞ！」

サツキ「ああ！」

モモカ「あ、待ってください！」

敵「今だ！ひっ捕らえろ!!」

ほむら「くっ！罨か！」

ミジュスケ「いや、明らかに分かってたでしよ！」

ミツハ先生「走ってください！」

ミジュスケ達はなんとか逃げて廃城へ向かう

モモカ「皆さん先に行ってくださいませ！」

ここは私と……しのぶ！」

しのぶ「はい。お嬢様」

ミジュナ「モモカ！」

モモカ「行つてくださいませ！」

チハル「おいおい：女二人だけで後方を任せるわけには行かねえよ：俺も残るぜ」

ミジュスケ「チハル！」

ほむら「おい！お前がなんでこんな所で！

お前はもつと幹部と戦えるたまだろ！」

チハル「いや、俺足くじいちやつてどうにも幹部と戦えそうにねえや：」

ミジュスケ「嘘をつかないの！」

チハル「冗談。お前らなら大丈夫だよ」

ほむら「だけど！」

チハル「あのな俺には守りてえもんがあんだよ。ここを守ればお前らに雑魚が行くことはねえしこいつら2人も守れる。一石二鳥だろ？」

ミジュスケ「：」

チハル「それに：ミジュスケ。

お前はミュウツと…まだ友達になれてねえだろ？」

ミジユスケ「…わかった。ありがとう」

ミジユスケ達は廃城に向かっていった

チハル「さーてあいつら雑魚とはいえ相当な

強さだ…気をつけろよ」

モモカ「分かりました！」

しのぶ「御意」

—————

ミツハ先生「気をつけてくださいね！

どこから敵が来るかわかりませんから！」

サツキ「別に近くに誰もいねえけど？」

サツキは少し高いところから廃城に向かってい

ほむら「まあいい！とにかく入るぞ！」

ゴウキ「ちよつと待ったア!!」

ミジユスケ「!!ど、どこから声が！」

ゴウキ「ここだア!!」

ゴウキは地面から出てきた。

ゴウキ「ここから先はわしが一人たりとも通さん！」

サツキ「嫌だね〜！ばあ〜かあ！」

サツキがゴウキにでんげきはを放った

ゴウキ「そんな攻撃…わしには効かん!!」

サツキ「じゃあこれは〜！」

とサツキがゴウキに近づいた時

ほむら「鋼の体には熱が一番でい！」

ほむらが炎の苦無を数本投げた

ゴウキ「ぬうう!!」

サツキ「あぶねっ!!」

ゴウキとサツキはほむらの炎の苦無を避けた

ほむら「ここはおいらに任せて先行けえ！」

ミジユスケ「分かった！」

サツキ「こら！このネズミ野郎！今あたし諸共

倒そうとしただろ!!」

ほむら「知るか！おいらの射程に入ってるのが悪い」

サツキ「なんだと〜!!」

ほむらとサツキは喧嘩しだした

ミジユナ「…怪我しないでね……………」

ミジユスケ達は廃城の中に入ろうとする、そこへ

ゴウキ「1人たりとも入れんと言ったであろう!!」

ゴウキが立ちほだかる

ミツハ先生「やっぱり先に倒してから…」

ミジユナ「…!!」

ほむら「てめえは邪魔だから…!!」

ほむらはブレイククローで攻撃した

サツキ「引っ込んでろ…!!」

サツキはアクロバットで攻撃した

ゴウキ「ぐあ!」

ほむらとサツキは喧嘩しながらゴウキに攻撃した

サツキ「なに、あんた。あたし達無視して

ミジユスケ達の所に行くの?」

ゴウキ「いや…無視して喧嘩してたのぬしただけど?」

ほむら「そんなピリピリすんなよ…攻撃が当たったくらいで…」



ほむらはゴウキに言いつつ目はサツキに向いていた

ゴウキ「いや、わしに言つてないだろ！それ！

完全にさつきの小娘の攻撃喰らっただろ！」

サツキ「あたし達は物凄く仲が悪いんだ」

ほむら「お互い2人で協力なんて御免蒙る」

ゴウキ「ふん！そんなことでわしには勝てるとても？」

サツキ「勝てるね。1対1でも負ける気がしないもの」

ほむら「何言つてんだ？1対1対1の間違いだろ」

サツキ「そうだったな」

ほむら「まあせいぜい後ろに気をつけろよ？サツキ」

サツキ「頭上に注意しなさい？ほむら」

サツキ・ほむら「さあ！ここは（あたし）（おいら）に

任せて早く先行きな！」

ミジュナ「うん！」

ミジユスケ「ありがとう!!」

ミツハ先生「ここはおまかせします！」

3人は先を急いだ。

廃城の中

ミジユスケ「どこへいけばいいんだろう？」

ミツハ先生「とりあえずあの階段を登りましょう！」

ミジユナ「分かりました！」

3人とも階段に向かっていている走っている

そこへ空から奇襲が：

ミジユナ「?!」

シャツク「取った：!!」

ミジユスケ「なっ?!ミジユナ〜!!!」

キン!!

キリキザンの奇襲攻撃は：

???「不意打ちつてのは卑怯なんじゃないですか？」

シャツク「誰だ?!」

ゲコガシラ先生「愛する生徒達の：先生だ！」

ゲコガシラ先生が止めた

ミジユナ「先生?!」

ミジユスケ「なんで先生がこんなところに?!」

ゲコガシラ先生「生徒のピンチに駆けつけない先生がどこにいますか？」

ミツハ先生「サイゾウ先生！」

ゲコガシラ先生「だから生徒の前ではその名で呼ばないでくださいって…言いましたよね!!」

ゲコガシラ先生はキリキザンを攻撃を弾いた

シャツク「チツ」

ゲコガシラ先生「5分だ!!行け!!」

ミジユスケ「…はい！」

ミジユナ「…分かりました!!」

ミジユスケとミジユナは階段をかけて行った。

シャツク「いいのか? 5分で？」

ゲコガシラ先生「ん？」

シャツク「5分も拙者を止められると思ってんのか?」

ゲコガシラ先生「そんなこと思っちゃいけませんよ

…あんたを倒す時間だよ…」

シャツク「拙者を倒す時間? 何を戯けたことを…」

ゲコガシラ先生「ごちやごちや行つてないで早く来なさいよ

このサイゾウウ：忍刀・霧隠れと共にお前を打ち破つてしんぜよう…」

シヤツクは俊敏な速さでゲコガシラ先生に

攻撃を仕掛けたがゲコガシラは

その速さをみきり、攻撃を受け止めた

ゲコガシラ先生「…こんなものか？」

シヤツク（！拙者の速さについてくるとは?!

いや待て：殺しの手順はまず：弱いやつから…）

シヤツクは一步引きもう一度ゲコガシラ先生に攻撃を

すると見せかけミツハ先生に攻撃を仕掛けた。

ゲコガシラ先生「?!ミツハ！そっちに行つたぞ！危ねえ!!」

シヤツク「死ね！」キン

ミツハ先生「あら、いやですわ

ゲコガシラ先生とあなたの戦いを見るだけで

良かったのですが：2対1がご紹望でしたら

私も参加致しますけど？」

ミツハ先生はにつこり笑いながら

二刀流の刀でシャツクの攻撃を受け止めた  
シャツク「なっ！」

ゲコガシラ先生「ミツハ、かつこよく決めてもらった所  
悪いんだがこの戦いには参加させませんよ」

ミツハ先生「あら？ミツハ先生が抜けてますよ？」

ゲコガシラ先生「何言ってる。今は生徒がいないのだ  
から気を遣う必要は無いですよ」

シャツク（クツ、こいつも拙者のスピードについてくるか……）  
シャツク「ふっ…拙者の速さについてこれたから

なんだと言うのだ。拙者实力はまだまだこんなものでは無い！」  
ゲコガシラ先生「ベラベラ喋ってないで早く

かかってきなさい。それとも時間稼ぎですか？」  
シャツク「そんなわけなからう！」キン!!

廃城2階奥の部屋

ミジュスケ「ここか！」

ミジュナ「ミジュスケ！あそこに誰かいるわ！」

ミジュスケ「ミュウツ？」

Dr. ピョン「よく来たな！」

ミジユスケ「Dr. ピョン!!」

Dr. ピョン「俺様の野望をうち砕こうとするお前らは

ここでリタイアだ……!!」

ミジユスケ「……」

Dr. ピョン「まさにこの展開相応しい!!世界を守ろうとここに

来た勇敢なる者を後一步という所で希望と共にぶつ壊す……」

ミジユスケ「なにを言ってるの？」

Dr. ピョン「ああ？」

ミジユスケ「僕は世界なんて大それたものを

守りに来たんじゃない！」

Dr. ピョン「なんだと？」

ミジユスケ「友達になりたい1人の侍を

お前から守りに来たただけだ!!」

Dr. ピョン「ふん!生意気な!行け!ミュウツー!」

ミュウツー「!」

ミュウツーはすごい速さでミジユスケに

斬りかかって来た。

ミジュスケ「くっっ！」キン!!

ミジュスケは苦無で応戦した

D r・ピョン「ふん！俺様もいることを忘れるな！」

D r・ピョンが応戦中のミジュスケに攻撃をした…が

ミジュナ「あたしがいることを忘れてるんじゃない？」

ミジュナが阻止した

ミジュスケ「ミジュナ…!!」

ミュウツー「！」

ミュウツーはもう一度斬りかかってきた

ミジュスケ「うわっ！」キン!!

ミジュナ「このD r・なんちゃらはあたしに任せて」

D r・ピョン「なんちゃらとは…無礼なやつだ！」

俺様は…D r・ピョン様だア!!」

ミジュナ「あら失礼。カエル様〜!!」

ミジュナは苦無を次から次へ投げている

そして…ほむらとサツキは…

サツキ「だから！何度言ったら分かるの！

あたしが攻撃してんだからあんた引っ込んでなさいよ！」

ほむら「知るかこれはおいらの戦いだ！お前は帰れ！土に還れ！」

ゴウキ「お前らしい加減にしるお!!」

ゴウキがアイアンテールをうった

ゴウキ「喧嘩しながらわしに勝てるでも思っているのか？

それではなくても…わしには勝てぬというのに…」

ほむら「うるせえ！まずこの黄色いバカ野郎を

倒すからそこで待つてろ!!」

ゴウキ「……………」

サツキ「ああん？あたしがあんたに負けるわけ

ねえだろ！鉄蛇く！そこでじつとしてろ！

まずはこの真つ赤なアホ野郎から片付けてやる！」

ゴウキ「いい加減にせんかあ!!」

ゴウキがまたも攻撃をする

ほむら「ああ？てめえは人の喧嘩を

黙って見てることも出来ねえってのか？」



サツキ「じゃあまずは鉄蛇からだな！」

サツキはアクロバットで攻撃している。

ゴウキ「クソ！ちよこまかと！」

ほむら「そんな弱攻撃効くわけねえだろ？こーうやんだよ！」

ほむらは炎の苦無を無数に放った

サツキ「あぶね！」

ゴウキ「そんなもの当たるか！」

ゴウキとサツキが避けた

サツキ「てんめえ!!いい加減にしろ！」

またあたし事倒そうと容赦なく投げやがったな?!

ほむら「いやあれだよ。おいらサツキ信じてるから。

避けるって信じてつから。だから容赦なく投げてるんではない」

サツキ「嘘つけ！この野郎」

サツキはほむらに攻撃をしようとした時

ゴウキ「オラア!!」

ゴウキがまたもアイアンテールを放った

サツキ「くっ！」

ゴウキ「オラア！」

ゴウキはほむらをしつぽで捕まえて締め付けた

ゴウキ「ふん！捕まえたぞ！小童…！小娘！」

こいつを握りつぶされたくなかつたら大人しくこつちへ来い」

サツキ「あ、じゃあ握りつぶしてください」

ゴウキ「あ！え?!」

サツキ「大丈夫です。そいつ大して頭の中身入ってないんで

潰してもなんら問題ないですよ」

ゴウキ「おい！喧嘩してる友達だからって

それは無いんじゃないの?!助けてあげなよ！」

サツキ「だってそれ友達じゃないもん」

ゴウキ「いや、だから…」

ほむら「どこ見てんだ？」

ゴウキ「んあ?ん！」

ほむら「さつき言いやせんでしたつけおいらあ…

後ろに気をつけろって…」

ゴウキ（み…みがわり?!）

ほむら「…!!はぁー!!」

ほむらはれんごくを放った。ポォー!!

ゴウキ「ぐあああ!!!」

ゴウキはまともに食らった

ゴウキ「こ、この程度で………?!」

サツキ「あたしも言ったじゃん!頭上に注意しろって!」ガン!!

サツキはニヤツと笑顔でアイアンテールを放った

ほむら「よし、これで片付いたな」

サツキ「お前さっきのれんごく!あわよくば

あたしも巻き込もうとしなかったか?!

ほむら「勝手な言いがかりはよせ!」

サツキ「言いがかりじゃないわよ!あれが当たってたらね

あたしは死ぬとこだったのよ!」

ほむら「じゃあ当たればよかったのに」

サツキ「なんだと!!」

チハル「お、幹部を倒したか」

モモカ「さすがですね!2人で協力すれば敵無しですね!」

サツキ「だいたいあんたがね…！」

ほむら「お前がちやつちやと…！」

チハル「聞いてねえな」

しのぶ「先へ進みましよう。お嬢様」

モモカ「はい！」

そして…シャツクとゲゴガシラ先生

シャツク「ふっ！」

ゲゴガシラ先生「…！」

シャツクは連続攻撃をしているが

ゲゴガシラ先生はパンチで意図も容易く応戦している

シャツク「クソ」

ゲゴガシラ先生「…」

シャツク（このまま耐久戦に持ち込まれては…）

シャツク「くっ！かくなる上は…」

シャツクはゲゴガシラ先生なら一旦ひき…

シャツクはてつべきで防御力を上げた

シャツク「さらに…」

シャツクはつるぎのまいで攻撃力を上げた

シャツク「どうだ…これでさつきまでの

拙者じゃない…貴様がどれだけのスピードで拙者と

対抗しようと関係ない…パワーで押し通すからな…」

ゲコガシラ先生「そうか…」

シャツク「ゆくぞお!!」

シャツクはものすごい速さでゲコガシラ先生に斬りかかった

ゲコガシラ先生「……………ふっ!!」

が、ゲコガシラ先生はシャツクよりも早い速さでいあいぎりをした…

ゲコガシラ「みねうちだ…安心しろ…」

シャツク「ううっ……………ぐはっ…」

シャツク（拙者の渾身の速さを…上回る速さで…

それにこの力…まさかさつきのパンチは…

グロウパンチか…。ほんとに5分で片付けやがった…。

こやつホントにただの寺子屋の先公か…)

ゲコガシラ先生「さあ、ミツハ先生ミジュスケ達の所へ」

ミツハ先生「そうですね！先を急ぎましょうか！」

シヤツク「おい…待て……………」

ゲコガシラ先生「ん？」

シヤツク「トドメをさしていけ…！俺は今はピヨンに従っているが…

元は殺し屋…殺し屋は1度の失敗も許されん…殺していけ…

情けなどかけるな!!反吐が出る!!」

ゲコガシラ先生「情けなどかけちゃいませんよ。

私に無益な殺生が嫌いなだけです。」

シヤツク「くっ！」

ゲコガシラ先生「どうしてもとあらば」

シヤツク「がっ!!」

ゲコガシラ先生は刀の鞘でシヤツクの頭を殴った

ゲコガシラ先生「これで勘弁してください」

チハル「おじやましませう」

モモカ「あ!ミツハ先生！」

サツキ「と…だれだ?あれ！」

ほむら「まさか敵幹部か！」

ゲコガシラ先生「え?いや、ちがいま…」

しのぶが攻撃を仕掛ける…

しのぶ「敵ですか？味方ですか？」

ゲコガシラ先生「いや、ですから…」

ゲコガシラ先生はしのぶの攻撃を止める

ミツハ先生「違います！彼はゲコガシラ先生です！私の夫です！」

ゲコガシラ先生「なっ!!」

しのぶ「…失礼しました…」

ゲコガシラ先生「あ、いや…」

ほむら「な、先生か…」

サツキ「じゃあ…そこに転がってるのが…」

チハル「敵幹部か…」

サツキ「って！先生結婚してたんですかあ！」

ミツハ先生「はい！まあ」

ほむら「いつ結婚したんですかあ！」

ミツハ先生「あればですね」

ゲコガシラ先生「そんなこと今はどうでもよからう!!」

モモカ「ミジユスケ達はどこへ？」

ミツハ先生「あの階段の上の奥の部屋です！」

ゲコガシラ先生「では行きましょう！」

少し前…ミジュスケ達は…

ミジュスケ「ミュウツ…！思い出して！」ギギギ

ミジュスケはミュウツの攻撃を

受け止めている

ミュウツ「！」

Dr.ピョンとミジュナが戦っている…

ミジュナ「…はあ…はあ…はあ…はあ…」

Dr.ピョン「どうした？息が上がっているぞ？」

ミジュナ「いえいえ…お気になさらず…ただの酸欠ですから…」

ミジュナ（ただの針じゃない…）

Dr.ピョン「ふっ！強がるな…お前に刺さっているそれは

どくばりだ…刺されれば神経が麻痺し毒の量が多ければ死ぬ…」

ミジュナ「やっぱり…：…こんな卑怯なものを

使うなんてさすがマッドサイエンティスト…」

Dr.ピョン「まだそんな強がり可言えるか…ならば喰らうがいい!!」



D r. ピオンはどくばりをミジュナに投げた

ミジュナ「みきった！当たるわけ…うっ！」

D r. ピオン「言ったであらう…神経が麻痺すると…」

ミジュナ「くっ！」

ミジュナは苦無を何本か投げてどくばりを避けさせた

D r. ピオン「足搔くか…」

ミジュナ「…はあ…はあ…はあ…はあ…はあ…」

D r. ピオン「ならば…とっておきの物を見せてやろう！」

D r. ピオンは一旦下がって何かに乗り戻ってきた…ウイーン!!

D r. ピオン「ふっふっふ…これが俺様が作った最高傑作…

ドラチャンピオン4号だ！」

D r. ピオンはドラピオンそっくりのメカに乗って再登場した…

ミジュナ「……………趣味とセンス悪!!」

D r. ピオン「貴様…俺様をついに怒らせたな…

あの世で後悔してろお!!!」カチン!!

ミジュナ「…！」

D r. ピオンのメカはどくどくのキバ、かみくだく

かみなりのキバ、こおりのキバ、ほのおのキバ  
を連続で出している！

D r・ピヨン「どくどく!!かみなり!!

かみかみ!!こおり!!ほのお!!かみかみ!!

かみなり!!こおり!!どくどく!!ほのお!!」

ミジュナ「さすがに…避けと弾くだけでは…

受けきれない…本体を壊すしか…はっ！」

ミジュナは苦無を数本D r・ピヨンのロボットに投げた

D r・ピヨン「ふん!そんな攻撃…この鋼鉄のドラ

チャンピオン4号には効かぬのだ!かみかみ!!」スツ!

ミジュナ「…くっ!」

ミジュナはかみくだくを喰らった

ミジュスケ「ミジュナ!!!」

ミュウツ「!」

ミュウツがもう一度斬りかかってきた!

ミジュスケ「な、しまっ…!」ザッ!!

ミジュスケはまたもまたもに喰らった…

ミュウツー「…」

ミジユスケは切られたあと少し油断のある

ミュウツーの一瞬の隙をつき刀を足で抑えた…

ミュウツー「…!!」

ミジユスケ「はあ…はあ…分かるよ…!ミュウツー…!

操られても生き物を殺めたくないその気持ち…!

言つてたもんね…生き物の命を奪う者は許さないつて…

そのミュウツーの硬い意思是…操られても

まげられるもんじゃないよね…!だって…」

ミュウツー「…」

ミジユスケ「操られて僕を殺そうとした命令から僕を守つて…

刀の嶺で…僕を斬つてくれたんでしょ?さつきも…今も…」

ミュウツー「…」

ミジユスケ「…ミュウツー…操られてもなお…己の信念を貫くつて

いうのは…すごい事だ思う…到底僕なんかには出来ない…

だから…これは聞いてても聞いてなくてもいいけど…

友達になろうよ…そして友達を守つてよ!

ミュウツ―

僕も友達を守るからさあ…」

ミュウツ―「…」

ミジユスケ「友達は守り合うものでしょ!!」

ミュウツ―はミジユスケに踏まれた刀を

奪いミジユスケに向かって刀を投げた…が

投げた刀はミジユスケに当たらず…

後ろのDr・ピヨンのメカに当たった…ザシユ!!

Dr・ピヨン「のああ?!?!なんだ!何が起きた!」

ミジユスケ「ミュウツ―?!」

ミュウツ―「…あ…ありがとう…ご…ご…ごぎ…」

ミュウツ―は倒れかけたがミジユナが受止めた…

ミジユスケ「ミジユナ!!」

ミジユナ「はあ…はあ…操られたミュウツ―を呼び戻せたの…?」

ミジユスケ「うん!」

ミジユナ「そつか…悪いけど…あたし…もう

動けそうにないから…ここにいるよ…」

ミジユスケ「分かった！ミュウツー…ミジュナのこと頼んだよ！」

ミュウツーは聞いているのか聞いていないのか

首を傾けた…

Dr・ピョン「ん！ミュウツーめ！裏切りおつたな!!」

ミジユスケ「裏切っちゃいないよ!!ミュウツーは

何一つ裏切っちゃいない…期待も…俺達も…あんたもな…」

Dr・ピョン「ほざけ！俺様の命が聴けぬのなら裏切つたも同じだア！」

Dr・ピョンはかみなりのキバでミジユスケに

攻撃しようとした！

ミジユスケ「だから…!!ミュウツーは

最初からあんたなんかの！命令になんか！

従っちゃいないよ!!」

ミジユスケはかみなりのキバを避けて

苦無でDr・ピョンのメカを切り刻んだ…ドカーン!!

Dr・ピョン「ぐあああ!!俺様の最高傑作品が…

おのれ…どこまでも俺様の邪魔を…!!」

ミジユスケ「はあ！」

ミジュスケは苦無でD r・ピオンに攻撃している

D r・ピオン「貴様の攻撃で倒れるこのD r・ピオン様ではないわい!!」

ミジュスケは苦無を3本なげた!

そのうちの2本が当たった:

D r・ピオン「:くう!!おらお!」

D r・ピオンはクロスポイズンをした

ミジュスケ「ううっ!」

ミジュスケは吹っ飛ばされた

D r・ピオン「俺の計画を:~!」

ミジュスケ「トドメだ:~」

ミジュスケは立ち上がりいあいの構えになった:

D r・ピオン「くっ!小僧がア!!」

D r・ピオンがミジュスケに襲いかかる:~が

ミジュスケは消えた

D r・ピオン「な、お?!」

ミジュスケ「これで:~終いです:~!シエル:~ブレード!!」

D r・ピオン「な:~あ:~あ:~うあ:~」

D r. ピオンは倒れた

ミジユスケ「はあ…はあ…はあ…ミジユナ！」

ミジユナ「さすがね…ミジユスケ」

そこへみんなも来た…

ほむら「大丈夫か！ミジユスケ！」

ミジユスケ「大丈夫〜！」

チハル「倒したみたいだな…」

サツキ「やるじゃん」

モモカ「ミュウツーさんも無事で良かったです…」

ミツハ先生「ミジユスケ！ミジユナ！怪我してるじゃないですか！」

ゲコガシラ先生「…ん！まだだ！危ないミジユスケ!!」

D r. ピオンはミジユスケに後ろから攻撃を…

D r. ピオン「死ねえ!!」

ミジユスケ「なっ!!」ザシユ!!

D r. ピオンはミュウツーによって斬られた

D r. ピオン「あ…あ…」D r. ピオンは倒れた

ミュウツー「これ以上手出しはさせないです…」

ミジュスケ「ミュウツー!!」

ミュウツー「ありがとうございます。えっと…ミ…ミジュ…」  
//

ミジュスケ「ミジュスケでいいよ」

ミュウツー「ふふっ!ミジュスケ!」

ミュウツーは笑った

Dr・ピョン「はっはっはっはっ…」

ミジュナ「!!」

サツキ「まだやられていないの…」

Dr・ピョン「俺だけが負けだと思ふなよ…俺様の計画では…」

この場所から世界中に向けて宣戦布告の…超巨大の時限大筒を打ち…

その後ミュウツーを使って世界を征服しようと…

だが…俺様がこうなつたいま!誰も大筒を

撃つ者が居ない…つまり!ここに眠っている

超巨大の時限大筒は…あともう少しで爆発するのだ!

ゲコガシラ先生「なに!!」

ミツハ先生「なんですって!!」

Dr・ピョン「直径5キロだ…今から逃げても間に合い



はしない：俺様の野望を壊してくれて貴様らを

地獄へ道ずれにしてやる!!!」

ほむら「てめえ!! なにか方法はねえのか! 言え! この野郎!!」

ほむらは Dr・ピオンにまたがっている：

Dr・ピオン「そんなものは無い! あつたとしても

言うわけないだろう!! 残念だったな!!! はくつはつはつは!!!」

チハル「とにかくまず! その大筒を見つけねえと!」

ミュウツ「安心してください!!!」

モモカ「えっ?」

ミュウツ「大筒の場所は分かっていますから…」

サツキ「そうなのか? で、でも

場所がわかったからってどうするんだ?」

チハル「撃つしかねえだろ!」

ミュウツ「いえ：それではここにいる皆さんそして

周りにいる生きとし生けるものにまで被害がいきかねません…」

ミジュスケ「じゃ、じゃあ!」

ミュウツ「答えは簡単です…!」

ミュウツ―は2階の床に壊した

ミジユナ「わわっ！」

ミツハ先生「危ない！」

ミツハ先生はミジユナを連れて離れた

D r. ピオン「う、うわあ！どはっ！」

D r. ピオンは1階に落ちた

D r. ピオン「ううっ！あ、ああ!!」

D r. ピオンは瓦礫に埋もれてしまった：

ほむら「大筒はこの真下にあつたのか：

ミジユスケ「それを：!!ま、まさか：！」

ミュウツ―「はい：私がこれを持って空高くまで飛び上がります

そうすれば被害は皆さんに及びません！」

ミジユスケ「ダメだよ！そんなことしたら！」

ミュウツ―が：!!せっかく：せっかく：友達になれたのに：

ミュウツ―「ミジユスケ！私は力が大きすぎるあまりに

封印されていたのです：何か仕出かすんじゃないか：

なにか企んでるのではないかと：ですが

私はそれでよかったと思っ  
ています！そして私は数百年眠り  
続けていた。夢の中では自分がいた。その中にいた

私の思いは恐怖と楽しみだった：

外の世界はどんなのだろうという楽しみと

私を受け入れてくれる者がいるのだろうという恐怖

：でもあなたは：私の力を恐れるあまりか：友達になろうと

手を差し伸べてくれた：私はそれだけで嬉しかった：

あなた方と会えて本当によかった：ありがとう：

ミジュスケ「ミュウツー：！」

ミュウツー「それにミジュスケは言ってくれたでしょう？友達は

守り合うものだって！だから私もあなた方を守りたいのです！」

ミジュナ「ミュウツー：！」

ミュウツー「安心してください：私はちよつとやそつとじゃ：

死にませんから：必ず：また会いに行きます：それでは：！」

ミュウツーは大筒を持って素早いスピードで空高くへ飛んだ

ミジュスケ「ミュウツー！！僕は！いや！！

僕はもう！！友達だよね！！！！」

ミュウツ―は空高くまで飛んでいる…

ミュウツ―（…はい！もちろんです…）

ミュウツ―は笑っている…

そして…ミュウツ―が持っていた大筒は空高くで爆発した…

ミジュスケ「ミュウツ―…」

ゲゴガシラ先生「…いい友達だったな…」

ミジュスケ「…う…う…う…はい!!」

みんな泣いている…

—————

そして数週間がたった

ミジュスケ「ミュウツ―…僕は絶対に…忘れないかんね…」

ほむら「ミジュスケ…！なにシケたツラしてんの！

ミュウツ―のことまたひきずってるの？」

サツキ「ミュウツ―は生きてるよ！必ず！」

チハル「かもな」

モモカ「生きていますよ！」

ミジユナ「うん！生きてる！だからさ！忘れずにいこ！」

ミジュスケ「う、うん！ありがとう！」

サツキ「あくそれにしても腹減ったな……」

ほむら「お前さっきのおにぎり4個食べたばっかだろぅが！」

サツキ「それでも腹減ったんだよ！」

ほむら「そんなに食ってつと太るぞ!!んがっ！」

サツキをほむらをぶった

ほむら「てめえ！何しやがる！」

サツキ「ああ！やんのか!!」

ミジュスケ「まあまあ!!近くに団子屋があるから行こう？」

ミジュナ「そうね……二人ともいこ！」

団子屋「いらっしやい！」

モモカ「すいません！団子6つください！」

団子屋「毎度々」

チハル「ほら……これでも食って落ち着け」

チハルは団子をサツキとほむらに渡した

サツキ「あたしのが団子のほうがでかい！」

ほむら「オイラの方がタレ沢山かかってるし！」

サツキ「なにを〜！」

ほむら「やんのか〜！」

ミジユスケ「ふふっ！」

ミジユナ「ふふっ！」

6人は笑った

団子屋の店先の椅子に座っている笠を被った侍が…  
侍「やっぱいいですね…友達というのは…」

完

## 卷之十六 笑い日 祝い！

ミジユスケ「あーこんな暑い日に掃除なんて〜

……ん？あれは…ミジユナと…ホムラ？!

一体あそこで何してんだろ？」

ミジユスケはそつと近ずき話しかけようとしたが

ミジユナ「いい？このことは内緒よ？」

特にミジユスケには！」

ミジユスケ（僕には内緒…？）

ホムラ「分かってるよ〜しかしあいつだけ

知らないとはなんていい気味だ〜」

ミジユスケ（何の話をしてるんだろう…？）

ミジユナ「分かったらこの後付き合って！」

ミジユスケ「?!」

ホムラ「もちろん！」

ミジユスケ（えっ?! どういうこと…？ミジユナとホムラって

付き合ってるの?!)

ミジュスケ「どういうことなんだろう…?」

誰かこのことを知ってる人いないのかな?」

シュリ…

シュリ「Why? ミジュナとホムラが付き合ってる?」

ミジュスケ「知ってる?」

シュリ「?付き合ってるのはYouじゃないの?」

ミジュスケ「そ、そうなんだけど…」／／

シュリ「多分君のMisunderstandingだよ…」(誤解)

ミジュスケ「…?」

スイ

スイ「えっ? ミジュナとホムラがコソコソと?」

ミジュスケ「うん。」

スイ「そいつはお前…ふたりは付き合ってるな…」

ミジュスケ「!!や、やっぱり…」

スイ「だろぅな…」

ミジュスケ「…」



スイ「俺の経験から言うにそういうやつは……  
ってあれ？ミジユスケ？」

ゲコガシラ先生

ゲコガシラ先生「ん？ミジユナとホムラが

裏でコソコソ？」

ミジユスケ「はい……」

ゲコガシラ先生「……それは恐らく何か計画してるな……」

ミジユスケ「計画？計画ってなんですか？」

ゲコガシラ先生「それは私もわかりかねる」

ミジユスケ「そ、そうですか……」

—————

ミジユスケ「うん……」

僕はミジユナと付き合っている……

けどミジユナは……ホムラとも付き合っている……？

そして2人で何かを計画している……？一体何を……」

図書館

ミジユスケ「えっと……なになに……浮気してる恋人が

何かを計画していることがあります。

人によって様々ですが、浮気されてるあなたから逃げるため。浮気されてるあなたと

別れるため。ドラマなどでは殺される場合が

ございます…!!

え?! いや…あくまでドラマだし…

これもあくまで一般参考…

ミジュナがそんなことするわけではない…

きつとあれは…普通に友達としての

何かの約束だったんだ! そうだ!」

ミジュスケは元氣を取り戻しつつ

図書館を出た

ミジュスケ「うん! そうと分かったら

なんかお腹減ってきちゃった…:…ん?」

ミジュスケはミジュナとホムラが一緒にいる

所を見かけ隠れた

ミジュスケ (ミ、ミジュナ…

な、何してるんだろう?…いや…プライベートとかを詮索しちゃ悪いかな…うん。帰ろう)

ミジユナ「これどう?似合うと思わない?」

ミジユスケ(ん?!)

ホムラ「さあな…」

ミジユナ「え、絶対いいと思ったんだけど…」

ミジユスケ「…これは…付き合ってるんじゃないのかな…?」

ミジユスケはボソツと言って走っていった

ミジユスケ「やっぱり付き合ってるよね?!」

違うのかな?!」

夕方のどて

ミジユスケ「…うん…でもこれでいいのかな?

そもそも忍者が人と付き合うなんて…

ホムラも忍者だけど僕よりしっかりしてる…

このままほむらと…それにミジユナは

そっちの方を望んでいる…と思う…

でも…でも…」

ミツハ先生「ミジユスケくん!」

ミジユスケ「!ミ::ミツハ先生?なんでこんな所に?」

ミツハ先生「きぐうですねー」

こんなところであうなんてー」

ミジユスケ「え?あ、そうですね」

ミツハ先生「ちよつといきたいところが

あるのですがーミジユスケくんも

きてくれませんか?」

ミジユスケ「はい?いいですけど?」

ミジユスケ(なんでこんな棒読みなんだろう::?)

ミツハ先生「こちらですー」

ミジユスケはミツハ先生について行った

ミツハ先生「ここです!」

ミジユスケ「え?ここ校舎ですよ?」

ミツハ先生「こちらですー」

ミジユスケ「ん?」

ミツハ先生「このへやにはいってくださいー」

ミジュスケ「?は、はい」ガラガラ

ミジュスケが扉を開ける

ミジュスケ「!!暗!なんでカーテンまで

閉まつてるんですか?!電気つけますよ」カチツ

パン!!パン!!パン!!パン!!パン!!

ミジュスケ「うわ!!」

みんな「ミジュスケ!お誕生日くおめでとうく!!」

ミジュスケ「へ?!」

ミジュナ「ミジュスケ!誕生日おめでとうく!!」

ミジュスケ「ミジュナ!!」

ホムラ「ほらよ。お前のクラッカー」ポイツ

ミジュスケ「ホムラ!!」

スイ「誕生日おめでとよく!」

シユリ「Happy birthday!」

ププリン「おめでとうく!」

ヒメグマ「おめでとうございまちゅ!」

オオタチ「おめでとうです!」

ミジユスケ「みんな……!」

ミジユナ「驚いた?

サプライズハッピーパースデー!」

ホムラ「苦労したぜ……」

ミジユナ「え?あれ?2人は付き合ってるんじや?」

ミジユナ・ホムラ「え?」

ホムラ「あー、そうそう付き合ってるよ?

なあ〜ミジユナちゅあ〜ん!!」

ミジユナ「つ、付き合ってるわいよ!

あたしと付き合ってるのはミジユスケでしょ!!」  
／／／

ミジユスケ「そ、そうだけど……」  
／／／

スイ「ミジユスケ!さっきのはお前の

勘違いみたいだぞ?」

ミジユスケ「勘違い?」

~~~~~

ミジユナ「いい?このことは内緒よ?

特にミジユスケには!」

ミジュナ（直前で言わないと…バレちゃうし

ミジュスケ本人にバレたら元も子もない！）

ホムラ「分かっているよ…しかしあいつだけ

知らないとはなんていい気味だ〜」

ミジュナ「分かったらこの後付き合って！」

ミジュナ（誕生日会に必要な小道具などを

買いに行くのに）

ホムラ「もちろん！」

~~~~~

スイ「てな感じだな…」

ミジュスケ「じゃああれは…もしかして…」

~~~~~

ミジュナ「これどう？似合うと思わない？」

ミジュナ（ミジュスケに）

ホムラ「さあな…」

ホムラ（あいつに似合うかは知らねえよ）

ミジュナ「え…絶対いいと思っただけ…」

~~~~~

ミジュスケ「あれは僕に…?」

ミジュナ「?ほらミジュスケ!

一緒に楽しもう!」

ミジュスケ「うん!」

ゲゴガシラ先生「しかし…始まる1時間前に

発表とは…もつと早くに言えなかつたのか?」

ミツハ先生「仕方ないわよ。ミジュナ

どうしてもサプライズにしたかつたのよ」

ゲゴガシラ先生「おかげでプレゼントすら

買えてないわ…」

ミジュスケ「ははっ!」

ミジュナ「ふふっ!」

ホムラ「ミジュナちやくん!!」

スイ「はっはっは!」

シュリ「ふふっ!」

プリン「キャキャ!」



オオタチ「ははは！」

ヒメグマ「あはは！」

帰り道

ミジユスケ「楽しかった〜」

ミジユナ「それは良かった！」

ミジユスケ「疑ってごめんね？」

ミジユナ「え？」

ミジユスケ「僕、ミジユナがホムラと付き合ってる

って勝手に勘違いしてた」

ミジユナ「いいって！」

ミジユスケ「ありがと…あれ？」

僕電気つけっぱなしで家出てきたっけ？」

ミジユスケの家に明かりがついている

ミジユスケ「消したはずだけど…？」

ミジユスケがドアを開ける

ほむら・サツキ「おめでとさんよ〜!!」

チハル「おめでとよ」

モモカ「おめでとうございます!!」

ミジュスケ「うわっ!! な、なんで家にいるの?!」

ほむら「なんでって、よく学校帰りは

ミジュスケの家に行ってたじゃね〜か!」

ミジュスケ「そ、そうじゃなくて!

どうやって家に入ったの?!」

チハル「俺が合鍵持ってる」

ミジュスケ「なんで持ってるの!!」

チハル「安心しろ。3つとも無事にある」

ミジュスケ「3つもスペアあるんだ…!」

サツキ「まあとりあえず上がって!」

ミジュスケ「いやここ僕の家!

なんでサツキが家の人みたいになってるの!」

モモカ「ケーキもありますよ!」

家の中

ミジュナ「これはあたしもビックリした〜」

ミジュスケ「え? これはミジュナが

提案したんじゃないの？」

ミジユナ「あたしが提案したのは

学校のみんなとだけよ？」

ほむら「これを提案したのはおいらと」

サツキ「あたし！」

ほむら「チハル誘ったら鍵もってるって言うから  
なら入って待とうかと」

ミジユスケ「その時点でおかしいよ…」

ほむら「じゃあ！」

サツキ「ケーキでも食べよう！」

チハル「今日は朝まで楽しむぞー」（棒）

モモカ「楽しみですね〜」

ミジユスケ「え？朝までいるの？」

泊まるつもりなの?!

ミジユナ「ケーキはあたしが斬るよ〜」

ミジユスケ「待って、今切るの発音

おかしくなかった？」

6人はワイワイ楽しい誕生日をすごした。

## 卷之十七 入れ替え パニツク！

ミジユスケの誕生日が終わり翌日…

ミジユナ「ふわぁ〜!!」

みんな寝ている…

ミジユナ「結局みんな泊まってる…

ちよつと顔でも洗ってこよ〜」

ミジユスケ？は顔を洗いに行つた…バシャビシャ!!

そして顔をタオルで拭いて鏡を見た…

ミジユナ「……………?……………?……………?!

……………あれ?……………夢?……………じゃない!!」

ミジユスケはミジユナの姿をしていた

ミジユナ「ミジユナ〜!!」

ミジユスケ「…」

ミジユナ「ミジユナ〜!!」

ミジユスケ「…うるさい…」

ミジュナ?は苦無を投げる…

ミジュナ「ご、ごめん…」

ミジュスケ「……………ふあく…ミジュスケ…おはよう…」

ミジュナ「ミジュナ!大変だよ!」

ミジュスケ「ん?……………あれ?……………なんであたしが…?

なんであたしが目の前に?!」

ミジュスケ「分からないけど僕達入れ替わって

るみたい…」

ミジュナ「えく!!」

ほむら「…ねむっ…」

サツキ「……………?!」

モモカ「朝くらいゆっくり寝かしてよ」

チハル「…あれ?」

ミジュナ「みんな!僕とミジュナが!」

ミジュスケ「入れ替わっちゃった!」

チハル「……………待って…」

ミジュナ「?」

チハル「おいら達も入れ替わってね？」

ミジュナ・ミジユスケ「……………え？」

状況理解中

ミジュナ「中身はミジユスケ」「で、これどういう状況？」

ミジユスケ「中身はミジュナ」「分からない：

なんでこんなことに…？」

チハル「中身はほむら」「昨日何があつたつけ？」

モモカ「中身はサツキ」「う〜ん…思い出せない…」

サツキ「中身はモモカ」「……………？」

ほむら「中身はチハル」「昨日確か…ミジュナの

持ってきた機械で遊んだはずだが…あれか？」

「ミジュナ」「あれは…確か…」

「ミジユスケ」「ゲノセクトから貰った説明書

機械だつけ？」

「ミジュナ」「そう！楽しめるかなと思つて

持ってきた機械…」

「ミジユスケ」「あれってなんの機械なの？」

〔ミジユナ〕「わ、分からない……」

〔チハル〕「説明書とかは

入ってなかったのか?」

〔ミジユナ〕「それならあの箱の中に……」

〔ミジユスケ〕「えつとなになに……」

説明書「テスター・物質の中身を入れ替える装置」

〔ミジユスケ〕「………らしい……」

〔チハル〕「それだけしか書いてないのか?」

〔ミジユスケ〕「うん……」

〔ほむら〕「………なんで物質の中身を入れ替える装置で

おいら達の中身に入れ替わるんだ?」

〔サツキ〕「さあ……」

〔ほむら〕「どうしたらいいんでい!俺これから

団子屋の手伝いがあるつてのに!」

〔モモカ〕「あの?先程の機械をもう一度使えば

元に戻るんじゃないですか?」

〔ミジユスケ〕「なるほど……!」



「ほむら」「じゃ早速……」

「ミジユナ」「ダメ！これ……壊れてる……」

「ミジユスケとほむら」「ええっ!!」

「チハル」「元々ポケモンの中身を

入れ替えるものじゃなかったんだ。

その時点で壊れてたんだな……」

「ミジユスケ」「……よし！」

――――

「ミジユスケ」「おまたせ〜！」

「ミジユナ」「どうだった？」

「ミジユスケ」「ゲノセクトは「直るけど

時間が欲しい」って言ってた」

「チハル」「すげーやつだなそいつ……」

「ほむら」「なんで？作った本人なんだから

直せるのは当然だろ？」

「チハル」「あのなあ……元々想定していた装置とは

違う予期しない装置ができたんだぞ？

その装置の直し方が分かるって…すげえ奴だな…」

〔ほむら〕「ふくん…」

〔サツキ〕「で?どうするの?あんた

予定あるんじゃないか?」

〔ほむら〕「あ!そうだ!どうしよう?!」

〔ミジユスケ〕「行ったらいいんじゃないの?」

〔ほむら〕「てやんでい!こんな姿のおいらが

行ってみろ!団子屋のおっさん誰か分からねえって」

〔ミジユスケ〕「そっか…それなら…チハルが

行くしかないんじゃない?」

〔チハル〕「俺かよ…」

〔ほむら〕「お前しかない!」

〔チハル〕「仕方ねえな…後でなんか奢れよ?」

〔ほむら〕「ま、まあ分かった…」

〔サツキ〕「あたしも手伝いがあるんだけど…」

〔ミジユナ〕「え?サツキも!」

〔モモカ〕「じゃあ私がお引き受けします!」

〔サツキ〕「ありがとう〜モモカ〜!!」

### 団子屋

ミジュスケ達は遠くからチハルを見ている

〔ほむら〕「チハル大丈夫か〜?」

〔ミジュスケ〕「大丈夫だよ!やる時はやるから

チハルは!」

〔ミジュナ〕「あつ!出てきたよ?!」

〔サツキ〕「様になってるじゃん」

団子屋で手伝いをしているチハル

〔チハル〕「いらっしやっせー」

又オー「団子2つお願いしますー」

〔チハル〕「味はなんにします?」

又オー「ごまですー」

〔チハル〕「かしこまりー」

〔チハル〕「は〜ごま団子を持ってきた。」

〔チハル〕「お待たせ致しましたー」

又オー「ありがとう〜。はい」

〔チハル〕はお金を貰って戻った

陰から見ていた4人

〔ほむら〕「以外：真面目だ：」

〔ミジユスケ〕「ね？やる時はやるんだよ！」

〔ほむら〕「大丈夫か：？」

ズルズキン「おい！」

〔チハル〕「なんでしょー？」

ズルズキン「団子の中に爪楊枝が

入ってたんだけど？これ危なくない？」

〔ミジユスケ〕「あれって：わざと：」

〔ミジユナ〕「いちやもんつけてお金を払わずに

帰っちゃうお客さんね：」

〔サツキ〕「あれみたいなお客さんなら

あんた絶対に喧嘩になるわね：」

〔ほむら〕「べ、べらぼうめ：手伝ってる時くらい

喧嘩は起こさねえよ：」

〔サツキ〕「本当：？」

〔ほむら〕「それよりチハル大丈夫か？」

〔チハル〕「申し訳ございませんー」

すぐに新しい団子をお持ちしますねー」

〔ミジユスケ〕「チハルも穩便にことを済ますつもり

みたい」

〔チハル〕「この味の団子いかがつすかく！」

〔チハル〕は団子を3つズルズキンの

顔に投げつけた

〔4人〕「……………えっ…」

ズルズキン「!!な、なにすんだ!!…!!

ぐっ!目!目があ!!」

〔チハル〕「この味は合わなかったみたい

ですなーわさび味」

ズルズキン「ぐわあ!て、てめえ!

覚えて…うう!」

〔チハル〕「ふんっ!」

〔チハル〕はズルズキンの頭にゲンコツを

お見舞いした

〔チハル〕「またあのお越しをー」

〔ほむら〕「……………ほんとだ…やる時はやってる…」

〔ミジユスケ〕「わさび味って…」

〔ミジユナ〕「モモカの所に行こっか…」

〔サツキ〕「そうだね…」

お茶屋

〔モモカ〕「いらっしやいませ〜!」

姿はエモンガ…そしてまた離れて見ている4人

〔ほむら〕「…似合わねえ…」

〔サツキ〕「失礼ね!!」

ヤルキモノ「おくさっちゃん! 今日も元氣だなく!」

〔モモカ〕「いらっしやいませ〜!」

ヤルキモノ「お茶をひとつは頼めるかい?」

〔モモカ〕「かしこまりました〜!」

〔ミジユナ〕「さすがモモカ〜!」

〔ミジユスケ〕「こっちは何とか大丈夫みたいだね」

〔モモカ〕「お待たせ致しました〜！」

お茶と：こちらもうすぐ発売の白玉ぜんざいで〜す！

ヤルキモノ「おおくありがとうね〜！」

いつもと変わらず元気で優しいこつた〜

〔ほむら〕「!!!いつもと変わらず?!」

〔サツキ〕「／／／」

〔ほむら〕「あの人耳と目おかしいんじやねえか?!」

〔サツキ〕「なんでそうなるのよ!!!」

〔ミジュスケ〕と「ミジュナ」は2人でコソコソ

はなしている

〔ミジュスケ〕「サツキって手伝いの時はいつも

あんな感じなの？」

〔ミジュナ〕「根は真面目なのよ？みんなと

一緒にいる時は照れてちよつと

荒っぽい口調になつちやつてるだけだよ？」

〔ミジュスケ〕「ふ〜ん…」

—————

ミジュスケの家

〔チハル〕「はく疲れたく」

たまには真面目に働くのもいいな」

〔ほむら〕「いや真面目じゃなかったよなあ」

〔モモカ〕「ちよつと大変でした」

〔サツキ〕「モモカありがとう」

〔ミジュナ〕「ゲノセクトから機械を

貰ってきたよ」

〔チハル〕「完成してるのか」

〔サツキ〕「それじゃあ元に」

〔モモカ〕「戻りましょう」

〔ほむら〕「おう」

4人はゲノセクトからもらった機械で元に戻れた

ほむら「おう!!元に戻れた」

サツキ「ほんとだ」

モモカ「やりましたね」

チハル「妙な感覚だな」



サツキ「あれ？ところでミジユナと  
ミジユスケは戻らないの？」

〔ミジユスケ〕「…それが…」

〔ミジユスケ〕は戻らない理由を話した

3人「え〜!! 2人は同じ種族だから

精神が定着して離れない?!」

チハル「なるほど…俺達は別の種族…別のタイプ

などにより精神が不安定で定着はしなかったが…

ミジユスケ達は別…」

〔ミジユスケ〕「ゲノセクトが言うには

「確かに精神は定着してるけど機械の効果は

必ず現れるからそれまでは待ってて」って言ってた」

ほむら「そっか〜」

〔ミジユナ〕「みんなどうする？もう元に戻れたし、

日も沈みかけてるしお家に帰る？」

サツキ「そうだな〜」

ほむら「帰るとすっかな？」

モモカ「お二人は大丈夫ですか？」

〔ミジュスケ〕「まあなんとか…頑張る!!」

〔ミジュナ〕「うん!大丈夫だよ!」

チハル「まあ俺達がいたところで

何も出来ないけどな…」

〔ミジュスケ〕「そんなことはないけど」

ほむら「じゃあおいら達は帰るよ」

サツキ「じゃあね〜ミジュナ〜」

〔ミジュナ〕「じゃあね〜!!」

4人は帰った

〔ミジュスケ〕「さて…どうしよつか？」

ミジュナは今日も泊まるの大丈夫なの?」

〔ミジュナ〕「?!う、うん!」

〔ミジュナ〕(あんまり考えてなかった〜!!)

〔ミジュスケ〕「とりあえず…中に入ろつか?」

〔ミジュナ〕「うん。」

—————

〔ミジユナ〕「……………ねえ……………」

〔ミジユスケ〕「ん？」

〔ミジユナ〕「お風呂どうしらいい…？」／＼

〔ミジユスケ〕「……………考えてなかった…」

〔ミジユナ〕「…どうしよう…」

〔ミジユスケ〕「え、えつと……………もう寝よう！」

明日には戻ってるはずだし!!」

〔ミジユナ〕「そ、そうだね！寝ましょう！」

〔ミジユスケ〕と〔ミジユナ〕は寝ることにした

〔ミジユナ〕「お、おやすみく」

〔ミジユスケ〕「う、うん！おやすみ…!!」

〔ミジユナ〕（ど、どうしよー！寝れるのかな〜!!

眠れる気がしないよ〜!!）

〔ミジユスケ〕「ただでさえ夜は眠れないのに…

こんなんで寝れるわけないよ〜!!」

2人はそんなことを考えながら夜を過ごした…

そして朝…

ミジュナ「ミジュスケ!!」

ミジュスケ「…ん？」

ミジュナ「ミジュスケ!見て！」

ミジュスケ「え?お!戻った！」

ミジュナ「うん！」

ミジュスケ「やったね〜！」

ミジュナ「よかった〜！」ピンポーン

玄関でチャイムが鳴った

ミジュナ「ん？」

ミジュスケ「え?こんな時間に誰だろう？」

朝の9時前…

ミジュスケ「は〜い」

???「やつほ〜ひっさしぶり〜！」

ミジュスケ「え?!あまね!!」

あまね「ただいま!!お兄ちゃん」

## 卷之十七 妹 帰還！

あらすじ…妹が帰ってきた…

あまね「たっだいま〜」

ミジユスケ「ただいまって………なんで

いきなり帰ってきたんだ？」

あまね「あれ？言わなかったっけ？

わたちの寺子屋は8月で卒業だよ？」

ミジユスケ「え？そうなの？」

あまね「そうだよ？兄助〜」

ミジユスケ「…そ、そっか〜

とりあえず入りな？…暑かったでしょ？」

あまね「うん。暑かった〜」

ミジユスケ「僕の部屋行って

お茶持って行くから〜」

あまね「は〜い！」

あまねは部屋へ向かう…がその途中

ミジユナ「あれ？」

あまね「え？」

ミジユナ「君は…？」

あまね「く、曲者ですー!!」

ミジユナ「く、曲者?!」

あまね「今ここでわつちが成敗します!!」

ミジユナ「なっ?!」

あまねは扇子を取り出した

ミジユナ「せ、扇子？」

あまね「はあ!!」

あまねのは扇子を勢いよく開いた

すると扇子から針のようなものが飛んできた

ミジユナ「わ?!」

ミジユナは飛んでくる針を苦無で弾き避けた

ミジユナ「これは…毒…？」

あまね「なかなか強いネズミさんですね…」

ミジュナ「ち、違うよ！」

あまね「問答……」

ミジユスケ「ストゥップ!!」

あまね「あ、兄貴!!」

ミジユスケ「違うから！曲者でも泥棒でも

ないから！」

あまね「！そうなんですか?！」

ミジュナ「う、うん！」

あまね「ごめんなさい。わっちはてつきり

この家に忍び込んできた卑しい泥棒かと……」

ミジュナ「……いいの気にしないで……」

ミジユスケ「それにあまね、家であまり毒は

使わないで？危ないから」

あまね「分かりました！兄者!!」

ミジユスケ「そのいちいち名前変えるのも

もうそろそろ辞めてつて。統一してよ……呼び方……」

あまね「えく分かったよ……兄上……」

ミジユスケ「もういいよ……」

あまね「ところでお昼ってある？」

ミジユスケ「え？もうお昼？」

あまね「この時間から作った方が

早く食べられるでしょ？」

ミジユスケ「まあ……」

あまね「決まり！じゃあわつちが今から

作ってくるね」

ミジユスケ「ちよつと待って!!」

あまね「？なんですか？」

ミジユスケ「あまねは作らないで！」

あまね「なんでですか？」

ミジユスケ「料理下手だから……」

あまね「そんなことないですよ？」

寺子屋の寮生活で料理を学んだんですから！

わつちの料理は磨きかかっているんですよ！」

ミジユスケ「ほんと……？」



あまね「任せてよ！」

ミジユスケ「……………」

キッチン

ミジユスケとミジユナはあまねの

調理姿を見ている

あまね「ではスパゲティを作らせていただきます！」

ミジユナ「頑張つてね。」

あまね「まずはソース！トマトと…ひき肉と…

あとは…」

ミジユナ「ねえ？大丈夫なんじゃない？」

ミジユスケ「いや…多分…ダメ…」

ミジユナ「？」

あまね「えつとこうしたらソースにひき肉を…

そしてローレルと…あとはアコニチンを…」

ミジユスケ「ちよつとまって！」

あまね「何？」

ミジユスケ「何じゃない…ローレルはいいとして

アコニチンはおかしいんじゃない？」

あまね「そう？でも多分大丈夫だよ？」

ミジユスケ「いや…僕それ苦手だから…」

あまね「そう？じゃあやめとく」

ミジユスケ「ふう…」

ミジユナ「アコニチンって何？」

ミジユスケ「毒だよ」

ミジユナ「えっ?!」

ミジユスケ「食べると呼吸困難や心臓発作を

起こす結構やばい毒…」

ミジユナ「えっ?!なんでそんな危ない物

持ってるの?!」

ミジユスケ「知らない…」

あまね「次に麺の準備!まずは…」

鍋に水を入れて………沸騰させる!沸騰させたら

麺を入れるために熱湯にシアン化カリウムを…」

ミジユスケ「ちよつと待ってね!!」

あまね「何？」

ミジユスケ「何じゃないよ？明らかに今

科学的な名前のものがあつたよね？

青酸カリだよね？危ないよね！」

あまね「大丈夫！美味しいから

天にも登る味だから！」

ミジユスケ「ほんとに登っちゃう料理は！

ごめんだからね。それよりもこっち！

塩を入れてよ！」

あまね「分かった……」

ミジユナ「だからなんでそんな危ないもの

持つてるの……？」

あまね「そして……茹で上がったら

お湯を捨てちゃう！ここで美味しさの秘訣！

テトロドトキシンを……」

ミジユスケ「ごめん。それも不味いよ……」

あまね「え？これ結構いいんだけどなあ……」

ミジユスケ「こつちと取り替えて

こつちの方が絶対にいいから……」

あまね「オリーブオイル？分かった」

ミジユスケ「……あまねの調理は疲れる……」

ミジユナ「それにしても毒だつてよく分かるわね？」

ミジユスケ「覚えないと命の危機があるって思い

頑張つて覚えた記憶がある……」

ミジユナ「……」

あまね「出来た」

ミジユスケ「で、出来た……」

ミジユナ「……」

あまね「ミートソースパゲティ！」

ミジユナ「見た目は普通ね……」

ミジユスケ「……僕が見てたから大丈夫だと思っただけ……」

あまね「いったただきまゝす！」

ミジユナ・ミジユスケ「いったただきまゝす!!」

3人はスパゲティを食べ始めた。

あまね「おいしく！」

ミジユナ「ほんとだ！美味しい〜！」

ミジユスケ「今回は大丈夫みたいだね…」

あまね「どう？上手くなったでしょ？」

隠し味も上手くいったみたい！」

ミジユナ「何入れたの？」

ミジユスケ「うわあ〜」

ミジユナ「?!」

あまね「小さいマトマのみを入れたの〜」

ミジユナ「マトマのみ？」

【解説】マトマのみとは赤くて柔らかい木の実で

とても辛い

あまね「兄のお皿だけに入っちゃってみたい

ミジユナ「へえ…」

ミジユナ（倒れちゃったけど大丈夫かな？）

ミジユスケ「あ…あ…からあ…」

# 卷之十八 宿敵 帰省!

ミジュスケ「…暑い…」

あまね「ですね」

ミジュナ（……………あまねちゃん…）

……………

ミジュスケ「あ…あ…からあ…」

あまね「ねえ？ミジュナ……………さん？」

ミジュナ「うん？」

あまね「あなたは兄のなんなんですか？」

ミジュナ「えっ？あたしは…その…」

あまね「あ、やっぱり言わなくていいです…」

ミジュナ「えっ？」

あまね「あなたは……………お兄ちゃんと

付き合おうとしてますね？」

ミジュナ「え？違うよ？あたしはもう…」

あまね「いいです！いいんです！…でもひとつ覚えておいてください…：…あなたではまだ

お兄ちゃんに相応しくない…！」

ミジュナ「?!」

あまね「あ、別に深い意味はありませんけど、

これだけは覚えておいてくださいね…」

~~~~~

ミジュナ（相応しくないって…：どういう…）

ボコッ

ミジュスケ「えっ?!」

あまね・ミジュナ「きや?!」

3人は落とし穴に落ちた…

ミジュスケ「いつてて…大丈夫？2人とも？」

あまね「なんとか…」

ミジュナ「でもなんでこんな所に落とし穴が…」

???「拙者でござるよ」

ミジュスケ「だれ？」

??? 「相も変わらず…こんな罠にハマるとは…

少しも成長しておらんようだな…」

ミジュスケ 「この落とし穴って君の仕業？」

??? 「いかにも…拙者が掘ったでござる。」

久しぶりでござるな…」

ミジュスケ 「だから誰！」

??? 「拙者か？拙者でござるよ。」

ミジュスケ 「いや…分からない…逆光で影しか

見えないし…」

??? 「これは失礼…それ！縄でござる。」

謎のポケモンは縄を放り投げた

ミジュスケ 「よいしょ…」

あまね 「よつと！」

3人は落とし穴からでてきた

??? 「拙者は…ミジュウロウ…おぬしら

もしや…覚えてはおらぬか？」

ミジュナ 「もしかして小さい頃遊んでた子かな？」

ミジユウロウ「まあそうでござるな…この度…

忍者になるためにこの街に帰ってきた次第で

ござんす！」

ミジユスケ「そうなんだ〜」

ミジユウロウ「おぬしたちは覚えているでござるか？…

子供頃の約束を…」

ミジユスケ・ミジユナ「約束？」

ミジユウロウ「やはり覚えてはおらぬか…」

ミジユナ「…もしかして…忍者になろうって

約束した…約束？」

ミジユウロウ「そのとおり…ミジユナは

覚えているようでござるな…」

ミジユスケ「…？」

ミジユウロウ「ミジユスケは覚えては…

おらぬようだな」

ミジユスケ「…？」

ミジユウロウ「まあいい…そのうち思い出すさ…

ミジユナも全部思い出したわけではない
みたいでござるしな…」

ミジユナ「え？」

ミジユウロウ「ほかの約束は覚えてはおらぬか？」

ミジユナ「え？うん…？」

ミジユスケ「つてちよつと待って！

僕全然覚えてないけど…僕は子供の頃

ミジユナと遊んでたの?!」

ミジユウロウ「?なんでござるか?

それすらも忘れていたのか?呆れた男でござる…」

ミジユナ「そ、そうだったの…?!」

ミジユウロウ「全く…拙者はその約束を

決して忘れずにいたというのに…:…:…ん?

では子供の頃からずっと一緒にいたわけではないのでござるか? 2人は?

ミジユスケ「うん？」

ミジユナ「子供の頃に会ってたなんて…」

ミジユウロウ「なんという者達でござるか…」
あまねがじつとミジユウロウの事を見ている

ミジユウロウ「ん？そういえばそこにいるのは
あまねちゃんではござらぬか？」

あまね「うん！」

ミジユウロウ「おゝ大きくなつたな〜」

あまね「うん！おつきくなつたよ〜」

ミジユスケ「あまね！知ってるの?!」

あまね「うっすらだけど覚えてるよ？」

ミジユウロウ「あまねちゃんの方が

記憶力が良いではござらぬか…」

あまね「久しぶりに遊ぼうよ〜」

ミジユウロウ「そうでござるな…！」

あまねとミジユウロウはどこかへ遊び行つて
しまった。

ミジユスケ「あ、待って！」

ミジユナ「まだ聞きたいことが！」

ボコッ

ミジュスケ・ミジュナ「わあく!!」

2人は落とし穴に落ちた:

ミジュスケ「あいつ一体いくつ落とし穴作ったんだ:

ミジュナ「:約束の相手は:ミジュウロウだった

かしら:

—————

ミジュウロウ「:覚えておらぬのなら教える訳には

いかぬでござるか?:ミツハ姉ちゃん?」

卷之十九 幼馴染 転入！

ゲコガシラ先生「えー夏休み明けました…

そして本日から一緒に学ぶことになった…」

ミジユウロウ「あく！おぬしらは

この前会った人達?!

ミジユスケ「…いや何してるの…?分かってるよね?

わかった上でここに転入したよね？」

ミジユウロウ「いや…転入したら

「お前はあん時の！」みたいなのが

必要だつて聞いたから…」

ミジユスケ「誰から…」

サイゾウ「まず自己紹介をしなさい。」

ミジユウロウ「はい！

この度この水隠れ忍者学校に転入してきやした

ミジユウロウと申すものでござんす！」

ミジユスケ「あれ?ござるって言わないのかな?」

サイゾウ先生「ではさっそく授業に入る…」

宿題の回収は帰り際に行く…」

今日は火遁の術について……………」

授業終了…ミジユウロウに学校の中を

案内しているミジユスケとミジユナ

ミジユスケ「ここが道場だよ…」

ミジユウロウ「へ…」

ミジユナ「で、この前言ってた

約束って何?」

ミジユウロウ「いやいや…」

まだ教えられないでござるよ…

拙者だけの約束ではござらん」

ミジユスケ「え?他には誰と約束したの?」

ミジユウロウ「覚えておらぬ

おぬし達に言っても仕方なからう?」

ミツハ先生「あら?ミジユスケくんに

ミジュナちゃん？放課後にどうしたの？」

ミジュナ「あ、ミツハ先生！」

ミジュスケ「今、今日転入してきた

友達にこの学校の中を案内していた所なんです」

ミジュウロウ「∴姉ちゃん∴」

ミジュナ「え？」

ミジュウロウ「姉ちゃん?！」

ミジュスケ「え？」

ミツハ先生「あら！アスカちゃん？」

ミジュスケ・ミジュナ「えく?!！」

ミジュウロウ「ね！姉ちゃん！その名は

内緒にするって約束でござったろう？」

ミジュスケ「ど、どういふこと?!」

ミジュナ「ミジュウロウくんって！

ミツハ先生の弟だったの?!」

ミツハ先生「弟じゃなくて」

ウーロンちゃんは私のいとこよ」

ミジユナ「そ、そうだったんですか…」

ミジユウロウ「ま、まさか…姉ちゃんも

この学校で忍者を目指してたでござったか…」

ミジユスケ「違うよ。ミツハ先生は

ここで保健の先生をしてるんだよ？」

ミジユウロウ「そ、そうであつたか…

驚いたでござる…」

ミツハ先生「ウーロンちゃんは

どうしてこの忍者学校へ？」

ミジユウロウ「え？あ、覚えていないでござるか？」

ミツハ先生「何が？」

ミジユウロウ「…もしかして約束覚えていたのつて

拙者だけでござるか…？」

ミジユスケ「…よく分からないけど…そうかな？」

ミジユウロウ「…ま、まあ…皆が覚えてなかつた

拙者は約束を守るだけでござる！さらば！」

ミジユウロウは煙玉で消えた

ミジユスケ「え?! あ、消えちゃった…」

ミジユナ「もしかして…子供の頃約束した

相手にミツハ先生もいたんですか?!」

ミツハ先生「約束…? なんの約束ですか…?」

ミジユスケ「ミツハ先生は知らないみたいだね」

ミジユナ「そうね…ありがとうございます!」

さようなら…! ミツハ先生!」

ミツハ先生「気をつけて帰ってくださいね」

ミジユスケ「さようなら」

ミジユナ(さっきのミツハ先生…)

ミジユスケ「約束ね… 一体… あ!

ミジユウロウ! ねえねえ! ミジユウロウってき…」

走っている2人は足元にある罠に足を引っ掛ける…

ミジユスケ・ミジユナ「え?」

ミジユスケとミジユナは網に捕えられて

木の上に引っ張られた。

ミジユスケ「えっ?! 何これ!」

ミジュナ「なんでこんな所に罾が?!」

ミジュウロウ「大成功〜!さらばでござる!

お二人さ〜ん〜」

ミジュスケ「あ!待ってミジュウロウ!

まだ聞きたいことが!

ミジュナ「この罾外して行つてよ!

キャ!ミジュスケ!暴れないで!

—————

ミツハ先生「約束はちゃんと覚えていますよ?

懐かしいですね〜」

卷之二十 短編 お話集！

「銭湯」

ほむら「銭湯は広くていいね〜！」

ミジユスケ「そうだね〜」

地震が起きた　　グラグラ

ミジユスケ「え？なに！」

チハル「地震だな〜」

ミジユスケ「に、逃げなきゃ！」

チハル「大丈夫だ。これならすぐおさまる〜」

ミジユスケ「あ、ほんとだ〜おさまった」

ほむら「すげーこの銭湯、振動マツサージつきか！」

ミジユスケ「いや違うよ?!」

「波乗」

ミジユナ「やっぱり夏は海よね〜」

サーファー「へい！そこのお嬢さん！」

ミジユナ「あたし？」

サーファー「そう！君！どうだい？

俺とこの波に乗りながらレッツパーリーしない？」

ミジユナ「あたしレッツパーリー苦手なの……」

サーファー「じゃあただのサーフィンでもどう？」

ミジユナ「やり方が分からないので

ここで見ていてもいいですか？」

サーファー「OK！じゃあ見ていてくれ！」

サーファーは波に乗っている……

サーファー「どうだい？……あれ？

どこに行っちゃった？」

「肝試」

ミジユスケ「暗くて前がよく見えないね……」

チハル「ああ、そうだな……」

ミジユスケ「なに?!いまの……」

チハル「ああ、そうだな……」

ミジユスケ「あそこに何かあるよ？」

ガタン

チハル「ああ、そうだな…」

なにか「ばあ〜！！」

ミジユスケ「わあ〜！！」

びつくりした〜…あれ？チハル？

チハル「……………つは！」

ミジユスケ「何してるの？」

チハル「…いや…ちよつと気絶したふりを……………」

「毒舌」

ミジユスケ「この子が僕の妹のあまね」

あまね「あまねです！よろしくお願いします」

ほむら「こちらこそよろしく」

あまね「兄貴！この子目がないよ？

どこかに落としてきちやったの？」

ミジユスケ「コラコラ…」

ほむら「あるよ！ちゃんとあるから！」

チハル「まあまあ…俺はチハルだ。」

あまね「兄者！この子目が死んでるよ！

生きる気力が感じられないよ?!

ミジユスケ「コラコラ!」

チハル「あ、安心しな…俺の目は死んだり

生き返ったりできるから…自由自在だから…」

あまね「普通は死なないのに死ぬの?

なんで? 弱いからなの? 脆いからなの? 腐っ…」

ミジユスケ「そのへんにしとこつか!!」

「空巢」

ミジユスケ「あ、空き巢に入られた!」

あまね「でも兄助様? 何も盗られてませんよ?

お財布とかも無事ですし?」

ミジユスケ「空き巢は何も盗らなかつたのかな?

ん? あれ? あまね、水飲んだ?」

あまね「飲んでませんよ?」

ミジユスケ「じゃあこれは空き巢が飲むために

使ったコップかな? まあとりあえず

損害は特にないかな…:…:…:」

水が出しっぱなしだった：

ミジュスケ「水がく!!」

「芝居」

ミツハ先生は近くの公園で毎週紙芝居をしている。

そしてその噂を聞いたゲゴガシラ先生は

その様子を見に来ていた

ミツハ先生「じゃあ今日は「魔法の呪い」これを

読んでいきますね。昔、昔：とても貧乏な家で

暮らしている女の子がいました。」

ゲゴガシラ先生「うむ：上手い芝居だな：」数分後：

ミツハ先生「王子様に会うと：あなたにかけた魔法は：

呪いに：変わって：しまうのです：」

ゲゴガシラ先生「ん？」数分後：

ミツハ先生「しかし：女の子は：願いは叶ってしまい

魔法は：呪いに変わって：いきました：

え?!変わっちゃいましたくどうしましたよ!」

ミツハ先生は泣きながら読んでいた。

ゲコガシラ先生「ミツハさん?!あなた

お話読むの上手いけどお話読めないんですね?!」

「西瓜」

ミジユナ「えい!」

サツキ「はずれ!」

ミジユナ「やっぱ全然当たらないや」

サツキ「はやく割って食べようよ」

モモカ「では今度はわたくしがいきます!」

ミジユナ「頑張って!モモカ!」

モモカ「……やあ!!」

モモカの一撃は外れてしまった。

サツキ「さんねくん。はず!」

ボコツ…スイカは当たってもいないのに割れた

モモカ「やりました!割れました!」

サツキ「えっ?!なんで割れたの?!」

ミジユナ「多分…忍さん仕業だと思う…」

忍さんが影からこちらを見ている

「料理」

ホムラ「はいよ〜！チャーハン一丁〜！」

あまね「いったただつきま〜す！」

ホムラ「どうだいお味は？」

あまね「おいし〜！わっちの料理なんて及ばない

くらい〜！」

ホムラ「そんなことないさ〜俺が味見してあげるぜ」

ホムラはあまねの料理を食べる

ホムラ「うん！美味しい！サイコーだぜ！」

あまね「良かった〜どんどん食べて〜！」

ホムラ「うん！上手い！さすがあまねちゃんだぜ！」

~~~~~

ホムラ「…何杯でも行けるぜ………」

スイ「目を覚ませ……ここは病院だぞ……」

# 卷之二十一 発熱 看病!

風邪をひいてしまったミジユナの看病に来た

ミジユスケとあまねちゃん

コンコン!!

ミジユスケ「ミジユナ〜?大丈夫〜?」

ミジユナが出てくる

ミジユナ「いらっしやい…わざわざ

来てくれなくても良かったのに…

風邪うつるわよ?」

ミジユスケ「でも今日はミジユナの看病に

来たんだから。ほら横になって安静にしてて」

ミジユナ「ありがとう…」

ミジユスケ「じゃあまずあまね〜

このおけに氷入れてきてもらっていい?」

あまね「……………」

ミジユスケ「あまね？」

あまね「兄ちゃん…ごめん…わっち…」

あまねちゃんは倒れた

ミジユスケ「あまね?!あまね!!」

ミジユナ「大丈夫?!あまねちゃん!ケホツ・・・」

ミジユスケ「ミジユナは寝てて!僕が看病するから」

そして…ミジユナはベットで寝ていて

あまねちゃんはソファで寝ている

ミジユナ「あまねちゃんはどう?風邪?」

ミジユスケ「いや…多分熱中症だと思う…」

ミジユナ「良かった…もつと重いものじゃなくて…」

ミジユスケ「ミジユナは大丈夫?

水枕変えてこようか?」

ミジユナ「ありがと、でもまだいいや

それよりあまねちゃんの所に行ってあげて」

ミジユスケ「うん」

あまねちゃんのいる部屋

ミジユスケ「あまねく大丈夫?」

あまね「兄ちゃん…」

ミジユスケ「熱中症?ちゃんと水分とりなよ?」

あまね「ごめんね…実は…昨日作った実験用の薬…

喉乾いてたから飲んじやって…多分それが原因…」

ミジユスケ「自分のせいだったんかい!!」

でも大丈夫?!苦しくないか?!

あまね「安心して…恐らく…貧血だと思うから…」

ミジユスケ「そうか…良かった…水枕…変えとくよ」

あまね「ありがとう…」

ミジユスケ「ちよつとミジユナの所行ってくる」

ミジユスケはミジユナの所に行ってしまう

あまね「えっ?…ううっ…」

ミジユナのいる部屋

ミジユスケ「ミジユナ」

ミジユナ「あれ?ミジユスケ?」

ミジユスケ「新しい水枕持ってきたよ」

ミジユナ「だからいいのに………ん？」

あまね「よいしょ！」

ミジユナ（あまねちゃん？もう大丈夫なのかな？）

あまね「…はんっ！」

ミジユナ（なにか飲んだ？）

あまね「兄ちゃん〜！」

ミジユスケ「あれ？あまね？ちゃんと横になつて

なきやダメでしょ？」

あまね「なんかおかしいよ〜…」

と言いながら口から赤い液体がでてきた

ミジユスケ「?!だ、大丈夫?!あまね!!」

ミジユナ（?!なにしているの?!あまねちゃん！）

あまね「もうダメだ〜看病して〜…」

ミジユナ（！あまねちゃん、ミジユスケに看病して

もらいたくてそこまで?!…）

ミジユスケ「ちよつとまっつてて！いまタオル

持ってくる！」

ミジユスケは走っていった

あまね「ミジユナさん！」

ミジユナ「え？」

あまね「これは勝負です！どっちが兄ちゃんに

長く看病してもらえるかです！」

ミジユナ「…え？…あ…う…んと…の、望むところ！」

(熱のせいなのか冷静な判断が出来ないようです)

ミジユスケ「あまね！大丈夫か！

はい。新しい水枕！」

あまね「兄ちゃん…もう…わ…ち…ダメみたい……………」

ミジユスケ「あまねく!!」

ミジユナ「いや、それやりすぎじゃないかなく?!

看病どころじゃないよ！」

あまね「しまった…やりすぎましたね…ここは…」

あまね「と思ったけど大丈夫みたい…でも

フラフラするー」

ミジユスケ「無理しないで、ちゃんと寝てなさい！」

ミジュナ（あたしも負けてられない…）

（張り合わなくてもいいのに何故か張り合おうとする…）

ミジュナ「ミジュスケ…ちよつと…汗かいてきたから  
背中拭いてもらっていい…？」

ミジュスケ「え?!あ、分かった！

新しいタオル持ってくる！」

あまね「ぬぬぬ…やりますね…でもここからです！」

ミジュスケ「はい！タオル！」

ミジュナ「だから拭いてって！」

ミジュスケ「えく?!僕が拭くの?!」

あまね（まずい…!）

あまね「兄ちゃん！こつちもお願いく！」

ミジュスケ「えつ?!あまねも?!」

ミジュナ「ミジュスケ！おみずお願いしていい？」

ミジュスケ「は、はい！」

あまね「兄ちゃん！こつちにお茶ちようだい！」

ミジュスケ「わ、わかった！」

ミジユナ「ミジユスケ! おんぶして!」

ミジユスケ「えっ?! わ、わかった!」

あまね「兄ちゃん! 肩車して!」

ミジユスケ「なっ?! て、てかなんで!」

ミジユナとあまね「はあ…はあ…はあ…はあ…あれ?」

ミジユナ「いつの間にか…風邪が」

あまね「治つてる」

ミジユナ「たくさん声出して汗かいたからかな!

あまね「よかつたくなおつた」

ミジユナ「ねえ! ミジユスケ! 風邪が」

あまね「ねえ! 兄ちゃん! 貧血が」

ミジユナとあまね「なおつた…あれ?」

ミジユスケは倒れている…

ミジユナ「…ミ…ミジユスケ!」

あまね「大丈夫! 兄ちゃん!!」

つづく…



## 卷之二十二 遊園地 作戦！

ほむら「何だ急に呼び出して？」

サツキ「あんたさあ……ミジュスケとミジユナが付き合ってるってことは知ってる？」

ほむら「ああ。知ってるけど？」

サツキ「にしてはあの二人……付き合ってる仕草一切なかったと思わない？」

ほむら「そういやそうだな……」

サツキ「なのであたしはあの二人をもっとくつつけようと思います！」

ほむら「……それに協力しろと？」

サツキ「うん。」

ほむら「なんでおいらなんだよ？」

チハルとかいんだろ？」

サツキ「実はチハルを含めて2人誘ったんだけど1人は

断られて一人は……」

「……………」  
ホムラ「ミジユスケとミジユナ? うん……」

それよりも君さあ、俺と二人つきりで行こうよ

遊園地に!」

サツキ「すいません。やっぱり結構です。」

「……………」

サツキ「断った」

ほむら「そうか……まあ……いいけど……」

サツキ「じゃあ決まり!」

当日

ミジユスケ「あれ……? ほむらまだ来てないのかな?」

ミジユナ「ミジユスケ、お待たせ」

ミジユスケ「あれ? ミジユナなんでここに?」

ミジユナ「え? 今日はミジユスケが遊園地に行こうって言ったんじゃない?」

「……………」

ミジユスケ「え? 僕はほむらが遊園地に行きたい

つてきいてここに来ただけど…?」

そこへ苦無が飛んできた：

ミジユスケ・ミジユナ「?!」

苦無には手紙がついていた。

ミジユスケはそれを読んだ

手紙「すまん。遊園地のことだが

行けなくなった。代わりにミジユナを

呼んだから2人で行って欲しい」

ミジユスケ「え? おかしくない?

この苦無が飛んでくる範囲にいるんでしょ?!」

ミジユナ「まあいいじゃない? 行きましょ!」

ミジユスケ「…うん…」

ほむら達…

サツキ「あんた何してんの! なんで

そういうの伝えてないの!」

ほむら「お前が計画を立ててないのが

悪いんだろ?!」

サツキ「あたしとあんたで計画立てる

予定だったんだから仕方ないでしょ?!

ほむら「じゃあ遅れずにちゃんと来いよ!」

サツキ「あ! 2人が行っちゃった! 行くよ!」

ほむら「全く…!」

遊園地内

ほむら「というか…遊園地まで誘えたのなら

おいら達の出番はもう要らないんじゃないか?」

サツキ「ダメ! あの二人奥手だから

あたし達が手助けしないと…」

ほむら「なんなんだよその義務感…

じゃあ聞くが具体的に何をどうするでい?」

サツキ「あたしに聞かないでよ」

ほむら「おめえ以外に誰に聞けと…」

サツキ「まあとりあえず…2人の距離が近すぎそうな

物に乗せるしかないわね…」

ほむら「へいへい…」

ミジュスケ達

ミジュスケ「ミジュナは何乗りたい？」

ミジュナ「うーん…あれは！コーヒーカップ！」

ミジュスケ「うん！行こっ！」

コーヒーカップへ向かう2人：

サツキ「そこで手を繋がなきや！」

ほむら「ミジュスケ達の思うように

行かせてやりやあいいのに：」

サツキ「あのままじやダメなの！」

ほむら「つてか2人がもう遊園地に来たんだから

おいら達の役目はそれでいいだろう！」

サツキ「だからそれがダメだって言ってるんだ！」

ほむら「ああ！ダメダメばっかじゃねえか！」

サツキ「あんたがいい案出さないからでしょ！」

ミジュスケ達：

ミジュスケ「コーヒーカップってどんな

乗り物なの？」

ミジュナ「あれ？ミジュスケ乗ったことないの？」

ミジュスケ「うん！まあ楽しい乗り物だと思うし  
いってみよー！」

ミジュナ「うん！おー！」

そして：

ミジュスケ「気持ち悪い……」

ミジュナ「大丈夫？」

ミジュスケ「僕乗り物弱いのを忘れてた……」

ミジュナ「そ、そうだったんだ……」

じゃあ乗り物じゃない物に行こつ！」

ミジュスケ「乗り物じゃないものって？」

ミジュナ「えつとね……お化け屋敷があるよ？」

ミジュスケ「お化け屋敷！」

ミジュナ「ミジュスケ！行ってみよ！」

ミジュスケ「えつ？あ、ちよつと待って！」

ミジュナを追いかけるミジュスケ……そしてその頃……

サツキ「いいわ！この乗り物で勝負よ！」

ほむら「面白い……どっち勝つか受けて立つ！」

そしてミジユスケ達……

ミジユスケ「ミジユナってお化け苦手じゃなかったっけ？」

ミジユナ「そんなことないわよ！苦手なのは

びつくり系！お化けは怖くないわ！」

ミジユスケ（お化けⅡびつくりだと思っただけ……）

ミジユスケ「あと、暗くて狭いのに行ける？」

ミジユナ「そこも大丈夫！」

こういうのだったら行き先が分かるし

多少明るいからね！」

ミジユスケ「それなら良かった！じゃあ行こう！」

お化け屋敷内

ミジユスケ「や、やっぱり雰囲気あるね……」

ミジユナ「確かに……でもこれくらいなら全然……」

そしてまたその頃……

ほむら「いい加減負けを認めやがれえ！」

ほむらはれんごくで攻撃をしている

サツキ「それはこっちのセリフだ!アホー!」

サツキはでんげきはで攻撃するが…

そのでんげきはが園内の設備にあたり

電子回路がショートしてしまった…そして…

パチン…

ミジユスケ「うわっ!何今度は何!」

ミジユナ「えっ?!真っ暗になるなんて

聞いてないんだけど?!」

ミジユスケ「一体何が来るの!?!」

係員「誠に申し訳ございません!システムエラーに

より停電を起こしました!まだ残っておられる

お客様は慌てず騒がず係員の声のする方へ

お越してください!」

ミジユスケ「なんだ故障か…良かった。」

ミジユナ「うん。さっ、行こっ…」ブーン…

暗い空間で虫ポケモンがミジユナの隣を横切った



ミジユナ「ぎやあく!!!こわくい!!」

ミジユスケ「ミジユナ?!!」

ミジユナはどこかへ行つてしまった。

ミジユナ「ううっ……はっ……こ、ここはどこかな？」

えつと……こつちは（ゴチン!!）痛つた……行き止まり……

こつちは……進める。ここ……どこ……なの……

ミジユスケ……!!どこ……!!」

ミジユスケ「ミジユナ……!」

ミジユナ「ミジユスケ……!!こつち……!」

ミジユスケ「ミジユナ……!どこ……!」

ミジユナ「ここよ……!」パチン……

システムが復旧し少し明るくなった

ミジユナ「わっ!明るくな……」

お化けの仕掛け「うがあああ!!」

ミジユナ「きやああ!!」

ミジユスケ「?!ミジユナ!?どうしたの!!」

ミジユスケが探しているとミジユナが

全速力で走って来た

ミジユスケ「ミジユ……!」

そしてミジユナはミジユスケに思い切り抱きついた…

ミジユナ「ぐすつ…ううつ…」泣いている…

ミジユスケ「ミジユナ…泣かないの…

僕がいるからさ…ねっ?」

ミジユスケとミジユナはお化け屋敷を出た…

ミジユスケはゆっくり歩いている。

サツキ「あんたのせいで怒られたじゃない!」

ほむら「おめえのでんげきはのせいじゃねえか!」

ミジユスケ「あれ?!なんでほむらとサツキが

ここに?ってか、ほむら今日行けなく

なったんじゃ…?」

ほむら「ああ…それはだなあ…ああ!それより

ミジユナはどうした?一緒じゃないのか?」

ミジユスケ「ミジユナなら…ここにいるよ?」

ミジユナはミジユスケの背中でぐっすり寝ていた。

サツキ「まあ〜」／＼

ほむら「そつか…」

ミジユスケ「僕達帰るけど、ほむら達も帰る？」

ほむら「ああ」

サツキ「ごちそうさま〜」

ミジユスケ「え？また僕の家来るの？」

サツキ「まあそれもいいけど別のお腹がいつぱいだから〜」

ミジユスケ「なにそれ…？」

卷之二十三 悪党 襲撃!

忍者学校門前

??? 「……………」バタツ…

ミツハ先生「あら…? まあ! 大変! 大丈夫ですか?

誰か来てください!」

ミジユスケ「どうしたんですか? ミツハ先生!

この人! はやく手当しなきゃ!」

ミツハ先生「ミジユスケくん! この人を保健室に

運ぶの手伝ってくださいませんか?

ミジユスケ「わかりました!」

保健室

??? 「ううつ…: 僕は…:」

ミジユスケ「あ! 気がついた?」

??? 「ここは一体…: ?」

ミジユスケ「ここは水隠れ忍者学校の保健室だよ?

「覚える？君、この学校の門の前で倒れてたんだよ？」

??? 「……………」

ミジュスケ「君、名前は？」

??? 「僕はイーガ……」

ミジュスケ「イーガっていうんだ？」

僕はミジュスケ！君は倒れてた理由ってわかる??」

イーガ「……謎の3人組に襲われて……それで……」

ミジュスケ「3人組？」

イーガ「……うん……」

ミジュスケ「そっか……」

イーガ「……………君は忍者なのかい？」

ミジュスケ「うん！まあ……実際は忍者見習いだけ……」

でも苦無とか持ってるし！結構強いよ？」

イーガ「そっか……君はなんで忍者になろうとしたの？」

ミジュスケ「僕は……えつとなんでだっけ？うーん……」

ちよつとド忘れしちゃった……」

イーガ「じゃあ君は今その忘れた理由のために

忍者になろうとしてるの？」

ミジユスケ「まあそうかな……？」

イーガ「ならもう辞めちゃえばいいのに……」

理由のない夢のために……今を生きるなんて……」

ミジユスケ「まあ……今は忘れちゃったけど……」

過去の自分が叶えたかった夢を今の自分が

忘れたなんて理由で辞めたら自分に悪いよ……」

僕は過去の自分が見た夢を裏切りたくない……！」

イーガ「……」

ドカーン!!

ミジユスケ「?!な、なんだ?!」

門前

サム「おらあ!出てこい!ここにいるのは

分かってんだよ!イーガあ!!」

カグラ「騒がしいですね……我が学園に何か用ですかね?」

サム「忍者学校の学校長だな……」

相変わらずのカエル面だな……」

カグラ「何の用ですかね?」

サム「イーガを出せ」

カグラ「どちら様ですかその方は?」

サム「いいから出せ……ここにいるんだろ?」

カグラ「知りませんね……これ以上騒ぐとあれば

私も騒がなくてはなりません?」

サム「……ちつ……また来る……」

ゲコガシラ先生「校長……一体何が?……」

カグラ「……うーむ……あやつが

一体何をするか……」

ゲコガシラ先生「今の者ですか?」

カグラ「……今日は生徒達を家へ帰すのはよそう……

この学校が預かる。サイゾウ先生

親御さん方にそう連絡頼めますか?」

ゲコガシラ先生「任せてください。」

夜……

保健室へ向かう2人、廊下を歩いている

ミジユスケ「いきなりお泊まりなんて

びつくりしたけど…イーガが心配だったし

ちようどいいやく」

ミジユナ「イーガってどんな子なの？」

ミジユスケ「おとなしい子だよ？」

イーガ「入るよく…あれ？いない？」

保健室には誰もいなかった

ミジユスケ「どこいつちやつたんだろ…？」

廊下…

イーガ「……………」

ミツハ先生「あれ？こんな所で何してるんですか？」

イーガ「いえ…ちよつと散歩を…」

ミツハ先生「あんまり動いてはダメですよ？」

イーガ「はい…」

ドカーン!!ドカーン!!ドカーン!!

イーガ・ミツハ先生「?!」

ミツハ先生「なに?!」



イーガ「ば、爆発?!」

ミジユスケ達…

ミジユスケ「イーガ〜!!どこ〜!!」

ミジユナ「避難警報がなってるよ!逃げなきゃ!」

ミジユスケ「でもイーガにも伝えなきゃ!」

ミジユスケはイーガを探しにどこかへ

ミジユスケ「イーガ〜!」

ミジユナ「ミジユスケ〜!待って〜!」

先生達…

ゲコガシラ先生「はやく!みんな逃げてください!」

生徒達が逃けている

ミツハ先生「ゲコガシラ先生!大変です!

ミジユスケくとミジユナちゃん。それと

学校の門の前で倒れていた子が見当たりません!」

ゲコガシラ先生「もつと前にいるんじゃない?」

ミツハ先生「それかま」

ゲコガシラ先生「なんですって!じゃあ

まだ学校に!」

ミジユスケ達…

ミジユスケ「イーガく! あっ! イー…

ミジユナ「ちよつと待って! ミジユスケ!」

ミジユスケ「? どうしたの?」

ミジユナ「あの黒い服の子…前に私を襲った3人組の

1人…」

ミジユスケ「?!」

サム「やつと見つけたぜ…イーガ…」

イーガ「何の用ですか?」

サム「とぼけんのもいい加減にしろ…

分かってるはずだ…」

イーガ「ええ。失礼分かっていましたただ…

あなたがここを襲う理由なんてあるんですか?」

サム「あるねえ…俺は忍者という者を滅ぼしたい…

お前も同じだ…だがお前たちとはやり方が違う…

だからここを襲った…どうだ?」

イーガ「なるほど…理解できなくはないが  
することは無いな。僕達に

関わったら君たちは終わりだというのに…」

ミジュスケ(どういうこと?…イーガは

ここを…忍者学校を滅ぼしに?!)

イーガ「!誰だ!」

イーガは手裏剣を投げた

ミジュスケには当たらなかったが驚いて

イーガの前に出てきてしまった…

ミジュスケ「イーガ!」

イーガ「ミジュスケ…」

ミジュスケ「イーガ…どういうこと?

君はここを滅ぼしに来たの?」

イーガ「そうだな…」

ミジュスケ「なんで!イーガは…何者なの!」

サム「そいつはな…中枢の裏世界を指揮とる

暗躍機関…邪命和集院の副棟梁…

裏切り草笛人 イーガ……だよな？」

イーガ「……よく知ってるね……裏世界のことなのに……」

サム「あいにく俺も裏世界にいる住人だからな……」

ミジユスケ「……裏世界……！暗躍機関……！副棟梁……！

何言ってるの……？」

ミジユナ「つまりなんなのよ？あたし達の

敵ってこと？あいつも……あんたも！」

サム「つまりそういうことだ……まあ

今回の俺の目的はお前らを滅ぼすことじゃなく

こいつに用があっただけだ……安心しな

お前らを滅ぼすのはまだ先だ……」

ミジユスケ「嘘でしょ？イーガ……」

イーガ「嘘じゃないさ……なんなら今すぐ

この忍者学校を滅ぼそうか……？」

ミジユスケ「！」

イーガ「いや……まず君から滅ぼそう！」

イーガはミジユスケに攻撃を仕掛けた

キン!!

ミツハ先生「私の生徒に手出しはさせません！」

ミジユナ「ミツハ先生!!」

ゲコガシラ先生「今すぐに立ち去りなさい！」

ゲコガシラ先生はイーガに攻撃を仕掛けた

イーガは吹っ飛んだ：

イーガ「痛たたた…以外に効くなあ…」

ゲコガシラ先生「…この攻撃は痛いで済みませんよ…」

イーガ「まあ…僕は今回、忍者学校の生徒達に

用があつたからね…生徒がいない学校に

なんの用もない…今回は帰るよ…

棟梁に怒られるなく」

イーガは消えた…

ゲコガシラ先生「あなたはどうすんですか？」

サム「俺も帰る。だが覚えておけ…忍者を滅ぼすのは

俺だ…」

ゲコガシラ先生「…：…：2人は怪我は

ありませんでしたか？」

ミジユナ「はい。」

ミジユスケ「はい……」

ゲコガシラ先生「まあ何があつたのか

私はよく分からないが……今日はとにかく休みなさい……」

ミジユスケ「はい……」

……そして翌日……

ミジユスケ「……ねえ？」

ミジユナ「うん？」

ミジユスケ「忍者になるのって……そんなに

悪いことなのかな……？」

ミジユナ「？」

ミジユスケ「昨日襲つてきた者たちがいた

つまり忍者は拒まれる存在？」

忍者になるっていけないことなのかな……？」

ミジユナ「……うん……そんなことは無いと

思う……けど……」

ミジユスケ「……」

ミジュナ「あたしは忍者になるって悪いとは思わないよ？もちろんこの意味はミジュスケが忍者になる、って意味でもあるよ？

ミジュスケが忍者になつてどんどん強くなつていつてもミジュスケはミジュスケで

いてくれるんでしょ？」

ミジュスケ「…前もこんなことがあつたような気がするよ…」

ミジュナ「あたしもそう思う！」

ミジュスケ「ありがとう。元気が出たよ…！」

笑つて話している2人を見て…

ミツハ先生「懐かしいですね…」

## 卷之二十四 事件 聴取!

ウララ「ふむふむ…つまり…あまりよく分らないということですね？」

ゲコガシラ先生「ですね…」

ミジユスケ達…

ミジユスケ「…あれ誰？」

ミジユナ「あくあの人は町奉行 真琴組の総長侍のウララさん。昨日の騒動について

事情聴取だつて」

ミジユスケ「ふん…」

ミツハ先生「もしも…？ここで寝てたら風邪引きますよ？」

イオリ「ああ…すいません…お気遣いどうも…でも私風邪…引かないんで……」

スバル「すいませんね！こいつは俺が



処理しとくんで安心してくれ…」

ミツハ先生「はい…?」

スバル「おい起きろ！仕事先で居眠りするたあ  
どういことだ？」

イオリ「すいません…じゃあ帰って寝ます…」

スバル「そういう問題じゃねえんだよ！

仕事中に寝るなって言ってるんだ！」

ミジユスケ「大丈夫ですか？」

スバル「ああ？いや…大丈夫だよ」

イオリ「ごめんねくぼく？この変なやつが私に  
絡んでくるの。だから退治してー」

スバル「てんめえ！」

ミジユナ「まあ落ち着いてください！

あまり暴力的なことは…！」

スバル「じゃあどうしたらいいんだ?!

この居眠りばかを仕事に戻すには？」

ミジユナ「聞かれても…」

ミジユスケ「なにか簡単な勝負をして  
負けたら…えつと…」

イオリ「イオリ」

ミジユスケ「イオリさんが負けたら  
えつと…」

スバル「スバルだ」

ミジユスケ「スバルさんの言うことを聞く!

スバルさんが負けたら今回は手を引いてもらう?  
これでどうですか?」

イオリ「いいよ」

スバル「ちよつと待て!俺は…

ミジユナ「じゃあ何で勝負するの?」

イオリ「じゃあ…ここは待らしく真剣で…」

スバル「ちよつと待て!それじゃお前の方が  
有利じゃねえか!それに俺がいつも使ってる

真剣はここにはねえし…」

イオリ「あらら?勝負の前に負け宣言ですか?」

スバル「上等だ！剣をぬけ！ぶった切ってやる!!」

ミジユナ「待った待った！剣で切り合うなんて

ダメ！危ない！」

ミジユスケ「もつと他の方法でお願いします！」

スバル「そもそも何でお前らが口出ししてんだ！」

ミジユスケ「だって…ここで戦うって言うんだもん…

安全な戦いをしてくれなきゃ…」

ミジユナ「そもそも町奉行がそんなことしてて

いいの？」

イオリ「じゃあ仕方ないのですね…

では…私たち2人とあなた達2人で

チームに別れて戦いましょう…」

スバル「おい待て…なんだそれ！

なんの意味もねえじゃねえか！

お前を仕事に戻すために勝負しようとしてんだぞ？

なんの勝負だこれ！

つーかなんでこいつらも巻き込むんだ?!」

イオリ「だってその方が面白くて

目が覚めるかな?なんてー」

スバル「元はと言えばてめえが眠らなきや…

イオリ「何にしましょうか?勝負は…?」

スバル「人の話を…」

ミツハ先生「話は全部聞いてました!」

ミジュナ「ミツハ先生?」

スバル「いや…俺の話をまだ聞い…」

ミツハ先生「2チームに別れて勝負をする

みたいですね!でしたら…」

我慢対決で勝負してはどうですか!!」

ミジュスケ「がまんたいけつ?」

ミツハ先生「暑さと寒さで我慢対決!チームの

1人は冷たい氷水の中で耐えてもう1人は

熱い熱湯の中でどれだけ耐えられるかという

勝負です!!」

ミジュスケ「なるほど…」

イオリ「いいねーやろー」

ミジユナ「なんでそんな案を…？」

スバル「なんでこんなことに…」

ミツハ先生「では！寒さ対決から！」

ミジユスケ「なんかミツハ先生ノリノリだね…」

ミジユナ「あたしが行くわ！」

イオリ「寒対決は私が行きます…」

スバル「勝手にやってくれ…だがどんな勝負だろうと

負けることは許さん…」

イオリ「へーい…」

氷水の中に入る2人…

ミジユナ「っ！冷たっ！！」

イオリ「…!!」

ミツハ先生「ではよーいドン！」

ミジユナ「…っ、冷たい…」ガクガク…

イオリ「…」

ミジユナ「ま、全く震えてな…い！」

スバル「ふっ！この勝負勝ったな…」

ミジュスケ（ん？ちよつと待って…？

震えてないって逆に不味くない…？）

スバル「イオリ〜！お前まだ行けるな〜？」

イオリ「……………」

スバル「あつ？おい！イオリ？」

イオリ「……………」

スバル「!!おい！イオリ!!お前！寝たら

はっ倒すぞ！」

イオリ「……………」

ミツハ先生「イオリさん！眠ってしまったため

ミジュナちゃんの勝ち〜！」

ミジュナ「や、やった…！」

ミジュスケ「おめでと〜！」

ミジュナ「ありがと…」

~~~~~

ミジュスケ「僕が温めてあげるよ〜」

冷えきったミジュナの体を…」

ミジュナ「えっ?! ミジュスケ…!」

~~~~~

ミジュナ「?!」

ミジュナ（あたししたらなんて想像を!!!）

スバル「次は俺とお前だ！はやくこい」

ミジュスケ「あ、はい。」

ミツハ先生「では熱さ対決スタート!!」

ミジュスケ「…? あんまり熱くない？」

スバル「まあ…熱がるほどでもねえな…」

ミツハ先生「そうです…この熱湯は時間が経つ事に

熱くなります！無理はしないでくださいね！

火傷してしまいますので！」

ミジュスケ「なるほど…」

スバル「まあ…大丈夫だろ…」

数分後…

ミジュスケ「熱い…」

スバル「まだまだだ…：こんなのはまだまだぬるい…」

数分後…

ミジユスケ「やっぱり熱い…」

スバル「確かに熱いがまだまだだ…」

数分後…

ミジユスケ「熱い熱い!!」

スバル「まだまだだなんの…!!」

ミジユスケ「も、もうダメだ…!!」

ミジユスケは勢いよく出た

スバル「ふっ!これで俺の勝ちだ…うおっと」

スバルはバランスを崩してしまった

その衝撃で…：熱湯の入った容器もバランスを崩し…

ミジユナ「えっ?!」

イオリ「ん?」

バシャーン!!

ミジユナ・イオリ「熱い!!」

ミジユナとイオリに熱湯がかかった…



ウララ「おーい！事情聴取終わったぞ〜！

さあて！スバル！イオ！帰りに飯でも食いに…

あれ？ど、どうしたんですか？」

ミツハ先生「ちよつと…みんなのぼせちやつて…」

ウララ「のぼせる？」

4人は気絶していた…

ミジユスケ「熱…かっ…た…」

## 卷之二十五 茶屋 働く!

サツキ「え? お金?」

ミジユナ「そう…ちよつと今お金に困つてて

手伝いをどこかでしたいんだけど…

したことないから分からなくて…」

サツキ「なるほど…ふふん!

じゃあいい所があるよ!

ミジユナ「ほんと!」

サツキ「あるお茶さんなんだけど

店のルールに従えば何してもOK、

お金も短い間で稼げるし! どう?」

ミジユナ「そこがいい!

ありがとう!」

—————  
ミジユナ「…とは言ったものの…

想像とちよつと違ふよ…」

ミジユナが手伝う所はくノ一茶屋だった…

(例えるなら現代でいうメイド喫茶に近いもの)

ミジユナ「普通のお茶屋さんじゃないよ…サツキ…」

あかり「よろしくね。新人さん!」

ミジユナ「よ、よろしくお願いします!!」

あかり「えつとミジユナちゃんね…」

話は聞いているわ。えつとね…調理はまだ

出来ないから…接客をお願いしていいかしら…?」

ミジユナ「はい!」

ミジユナはお店で働いている…

ミジユナ(と言つても…ちよつと恥ずかしいな…)

ミジユナ「お…お持ちしました!こちら

くノ一特性 笹団子です。」

お客「ありがと」

—————

ミジユナ「ご無事でいらつしやいました〜!」

「ミジュナ「ご無事にお戻りくださいませ〜!」

あかり「だいぶ慣れたわね〜!」

ちよつと裏で「みお」つて子が荷物を運んでるからそれを手伝つてきてもらつていい?」

ミジュナ「分かりました〜」

店の裏

ミジュナ「えつと… ?」

茶屋長に手伝つてきてつて言われたんですけど…

何を運べばいいですか?」

みお「…なんで敬語? タメ口でいいよ…

それとそれ運んどいて」

ミジュナ「あ、はい!」

荷物を運んでいる2人…

ミジュナ「えつと…なんて呼んだらいいかな?

みお「おちゃんでもいいかな?」

みお「は? なんでちゃん? 呼び捨てでいいよ」

ミジュナ「え？だってちゃんの方が  
可愛いかなって…？」

みお「僕は男だ…呼び捨てが嫌ならくんでも  
なんでもいいよ…」

ミジュナ「えっ？…えっ?!」

みお「！なに！」

ミジュナ「えっ?!男の子?!」

みお「なんでそんなに驚いてんの…!!」

ミジュナ「だ、だって…えっ?!てつきり

女の子かと…」

みお「人を見かけで判断しないで…」

ミジュナ（えー…!!このお店にいるんだもん！

見かけで判断しちゃうもん！）

みお「僕も好きでこのお店にいるんじゃないよ…

ただ…普通の手伝いより効率がいいだけ…」

ミジュナ「そ、そうなんだ…」

あかり「2人とも接客に戻ってもらっていい？」

ミジユナ・みお「はい」

みお「ご無事でいらつしやいました〜!

いつものセット! 笹団子と抹茶で

よろしいですか〜?

お客様「うん! お願いします〜!

みお「了解です〜!

ミジユナ(すごいなく…あんなにも明るく

振る舞えるなんて…よしあたしも!)

ミジユナ「お客様! ご注文はお決まりですか?」

ミジユスケ「えつとですね…これください」

ミジユナ「了解です! ……? ……? ……!!!」

ミジユナ(ミ!! ミジユスケ〜?!)

なんでこんな所に!! はっ?!) // //

サツキが手を振っている

ミジユナ(サツキ〜!! あなたがミジユスケに

教えたの〜?!) // //

ミジュスケ「で？なんでわざわざこの  
お店に来たの？」

サツキ「ちよつとねこのお店で食べたい  
物があつてね〜！」

ミジュナ（何してくれてんの〜サツキ〜!!  
すぐ恥ずかしいじゃん!!／／

でもまだミジュスケは気づいて…ない…の？  
気づいてないの？えっ？気づいてないの？…  
まあいいわ…そのうち気づくでしょ…）

—————  
ミジュナ「お持ちしました〜」

ミジュスケ「ありがとうございます〜」

ミジュナ「抹茶でお入れしましょうか〜？」

ミジュスケ「お願いします〜」

ミジュナ（なんで気づかないの〜?!

普通気づくでしょ〜！あたしが影薄いの〜?!

それともミジュスケが鈍いだけなの〜?!）

ゴロウ「おい！」

ミジュナ「あ、はい」

ゴロウ「どうなつてんだ？この茶屋は！」

ミジュナ「はい！どうなさいましたか？」

ゴロウ「お茶のひとつも出さねえのか！」

みお「申し訳ございませんぬ…こちらお茶です…」

お茶を飲む客…

ゴロウ「ぬりい！もつと熱いやつもつてこい！」

みお「も、申し訳ございませんぬ…」

ミジュナ「な、なにかご注文はございますか？」

ゴロウ「あ？まずお茶持つてくるのが先だろ！」

ミジュナ「あ、はい！すいません…」

ゴロウ「たらたらしてねえで早く持つてこいよく！」

客はミジュナに殴りかかろうとした…が

ミジュスケ「調子に乗りすぎじゃないですか！」

客の拳をミジュスケが受け止めた

ミジュナ（ミジュスケ!!）



ゴロウ「あ！てめえには誰だ！

てめえには関係ねえだろーがー！」

ミジユスケ「関係ある！だってこの子は…」

ミジユナ（！もしかして…本当は気づいてたの？）／／／

ミジユスケ「僕の…」

ミジユナ（僕は?!）／／

ミジユスケ「恋人に似てるんだもん！

ほっとけないよ！」

ミジユナ（……………）

サツキ（あらら…本人の前で…）

ゴロウ「あ！知るかー！」

ミジユスケ「大丈夫です…あうっ!!」

ミジユスケはミジユナに何かで殴られた…

ミジユナ「お客様…これ以上騒ぐのであれば…

この子のようになりますけど…よろしくて？」ニコツ

ゴロウ「…あ、俺用事思い出しましたんで帰ります…」

ミジユナ「まったく…気づいてくれてもいいのに…」

サツキ「ミジユスケってやっぱり鈍いね〜」

ミジユナ「つて！なんでミジユスケ

連れてきたの〜！」

サツキ「だつて〜こんなミジユナの姿

見せてあげたいじゃ〜ん」

ミジユナ「…もう！…せめてミジユスケと二人きり

の時に…」／／

サツキ「えっ？もう一回いい？」

ミジユナ「な！！なんでもない！！」／／／／

## 卷之二十六 搜索 誕生日！

ミジュナ「10月8日！今日はあたしの

誕生日！ミジュスケは自分の誕生日に

気づいてなかったけどあたしは違う！

というか！ミジュスケが鈍いだけよね？！

ミジュスケはなにかしてくれるかな…？」

モモカ「うん…ミジュスケくんは

優しいですけどちよつと抜けていますからね…」

ミジュナ「…?!な、なんでモモカがここに?!」

モモカ「??ミジュナちゃんが茶屋に来てくださいと

言ってくれたんじゃないやありませんか？」

ミジュナ「え?!今の聞いてた?!」

モモカ「う、うん…え？」

話してくれてくれてたんじゃないのですか？」

ミジュナ「あ、まあ…そうなんだけど…」

てつきり頭の中での考えかと…」

モモカ「だ、大丈夫ですか？」

ミジユナ「うん…」

モモカ「そのような心配ないと思うのですけれど…？」

ですがその様子だと…何も言われなかったのですか？」

ミジユナ「それが…」

~~~~~

忍者学校

ミジユナ（ミジユスケは…あ、いた！）

ミジユナ「ミジユスケ〜！」

ミジユスケ「！ミジユナか…」

ミジユナ「ミジユナかってなに？」

あたしがここにいちや悪いわけ？」

ミジユスケ「いや…まあそういう訳じゃ…」

ミジユナ「まあいいわ…ミジユスケは

ここでなにしてるの？」

ミジユスケ「ちよつと軽い運動でも！」

ミジュナ「そっか」

ミジュスケ「今日が何の日か知ってる？」

ミジュスケ「今日？あゝミジュナの

誕生日だよね？おめでとう」

ミジュナ「う、うん！ありがとう」

ミジュナ（あれ？）

~~~~~

ミジュナ「なんか…あんまり祝ってくれなかった

っていうか…ちよつと場が悪そうだった…」

モモカ「なんででしょう？」

ミジュナ「あとプレゼントみたいなものを

持ってたのを見たんだけど…特に何も

貰わなかったの…？」

モモカ「？ますますわからなくなってきました…？」

ミジュナ「そのあとも何も無く…」

モモカ「…でしたら、ミジュスケくんの家に

行ってみてはどうですか？」

ミジュナ「えっ?!大丈夫かな?!

モモカ「分からないなら本人に聞いてみるのが一番ですって!」

ミジユスケの家 コンコンツ

あまね「はーい!あ!ミジュナさん!」

ミジュナ「あまねちゃん!」

あまね「お誕生日おめでとうございます!」

ミジュナ「ありがとう〜知ってたんだ〜」

あまね「はい!調べました!」

ミジュナ「調べた?!」

あまね「どうしました?兄兄はいま

夕飯の買い出しで出かけちゃってますよ?」

ミジュナ「えっ?そうなの?」

あまね「ええ。今日なに貰ったんですか?」

ミジュナ「ううん?何も貰ってないけど…?」

あまね「あれ?今日なにか大事そうなものを

持つていつてただけど？」

ミジュナ「！えっ?! そうなの?!」

あまね「まさかお兄別の人への誕生日

プレゼントを渡す気なのかな？」

ミジュナ「いや…多分それは…」

あまね「まあわつち的にはどっちでも

いいですけどね」

ミジュナ「ええー…」

—————

モモカ「いらつしやいませんでしたね」

ミジュナ「買い出してことは商店街かな？」

モモカ「そうだと思います！」

ミジュナ「行ってみましょう！」

商店街

ホムヲ「あ？ おおく!!! ミジュナちゃん!!

こんな所であるなんて運命じゃないか？

僕は多分産まれる前から出会うことを

運命づけられた共同体の存在…今こそ一つく!!」

ミジユナ「結構!!」ところでミジユスケ  
見なかった?」

ホムラ「ミジユスケ? あゝあいつなら  
さつき見かけたな?」

ミジユナ「見たの? どこで?」

ホムラ「さあ? 向こうだと思いが?」

モモカ「では行ってみましょう!」

ホムラ「おおゝ華麗な方だく!!」

お嬢さん! この後俺とそこのお茶屋で

一杯どうですか?」

モモカ「結構でゝす。」

ホムラ「そっか残念く…おお!

そこのお姉さくんく…!!」

—————

ミジユナ「あ! チハル!」

チハル「んあ? モモカ? ミジユナ?



どうした？お前らも買い出しか？」

モモカ「いえ？違いますけど？」

ミジュナ「お前らもってことは…もしかして

ミジュスケと会った？」

チハル「ああ会ったよ？」

ミジュナ「ミジュスケなんか言っただけ？」

チハル「なんかつつても…」

なにか急いでいたような？」

ミジュナ「急いでる…？…分かった！

ありがとう！」

モモカ「では失礼します…！」

チハル「ああ…何やってんだ？」

—————

モモカ「ミジュスケくんはなにかプレゼント

みたいなものをお持ちになって買い出しをして

らして…急いでいる…ということは…

ミジュスケくんは今プレゼントを用意しているん

ですよ!」

ミジュナ「そっか!…でも中身が用意できてないのに  
プレゼントみたいなものを持つ意味って…?」

モモカ「そ、それは…なんでなのでしょう?」

ですがミジュスケくんはちゃんと

お祝いしてくれますよ!そのため準備を

今してくれていると私は推理します!」

ミジュナ「なるほど…」

モモカはミジュナの背中を押した

モモカ「ミジュスケくんの家に

もう一度行ってみては?」

ミジュナ「えっ??」

モモカ「ほら!行きましょう!」

ミジュスケの家

あまね「あつれ?!今会いませんでした?」

ミジュナ「えっ?」

あまね「たった今出かけて行ったのにな?」

ミジュナ「えっ?!ど、どこに行ったのかは…?」  
あまね「ちよつとわからないですね〜?」

ミジュナ「どこに行つちやつたんだろ?」

モモカ「ミジュナちゃんの家?とか?」

ミジュナ「ミジュスケ、あたしの家知らないし  
第一少し遠いもの!」

モモカ「では一体どこへ?」

ミジュナ「…モモカ…」

モモカ「はい?」

ミジュナ「ここからはあたし一人で頑張つて  
みる!ありがとっ!」

モモカ「そうですか…!分かりました!  
お気をつけて!」

ミジュナ「うん!もう暗いし気をつけてね〜  
じゃあね〜!」

モモカ「おめでとうございます!ミジュナちゃん!」

ミジュナ「ありがとう〜!」

ミジュナは心当たりのある場所に走った

茶屋…

ミジュナ「どこにいるんだろ…?」

海…

ミジュナ「ミジュスケ…!」

忍者学校…

ミジュナ「いない…どこにいったのよ…

ミジュスケ…」

ミジュスケ「ここにいるよ?」

ミジュナ「?!ミジュスケ!」

ミジュスケ「伝言上手く伝わったみたいだね?」

ミジュナ「えっ? 伝わったって?」

ミジュスケ「えっ? サツキとほむらからの伝言で

来たんじゃないの?」

ミジュナ「…? 聞いてない?」

ミジュスケ「そうなの…? まあいいやこれ!」

ミジュナ「これって？」

ミジュスケ「誕生日プレゼント！」

ミジュナ「！開けてみてもいい？」

ミジュスケ「もちろん！」

ミジュナは箱を空けて中身を見た

ミジュナ「これって?!茶菓子？」

ミジュスケ「ううん。これはね洋菓子っていうの！

頑張って作ったんだ」

ミジュナ「わあ〜！可愛いく〜！」

ミジュスケ「実は今日の朝には完成してたんだけど…

学校に来る途中に転んで崩しちゃって…」

ミジュナ（今日持ってたプレゼントって！）

ミジュスケ「で…新しく作り直そうと

思ったんだけどどうせならと…これも

底の方に入ってるんだけど…」

ミジュナ「これは？」

ミジュスケ「これはね砂糖菓子っていうの〜

これが一番頑張ったの〜」

ミジユナ「かくわいい!!」

ミジユスケ「ミジユナ!!」

ミジユナ「は、はい?!」

ミジユスケ「生まれてきてくれて…

ありがとう!!」

ミジユナ「!!」／／／

ミジユナ（どうしてミジユスケはそんな

恥ずかしい一言を平気で言えるのかしら…!）／／

## 卷之二十七 台風 一過！

台風×ミジユスケ

ミジユスケ「大丈夫かな？この家？

吹き飛んだりしないかな？」

ガタガタガタガタ

ミジユスケ「ミジユナは大丈夫かな？

友達の家に遊びに行つたあまねも心配だし…」

バタンバタン！！

ミジユスケ「わわっ！早く準備しなきゃー！」

【台風が来てからあれこれ準備するタイプ…】

台風×ミジユナ

ゴーゴーヒュオーヒュオー

ミジユナ「こんなに強い台風なんて

聞いてないわよ…！」

ガタガタン

ミジュナ「大丈夫よね…？窓ガラス…

割れたりしないわよね…？」

ボタン!!

ミジュナ「きゃあく!!もうっ!!

なんで停電するのよ!これじゃ身動き

取れないじゃない!!」

【布団にくるまってじっとしてるタイプ…】

台風×ゲコガシラ先生

ゲコガシラ先生「保存食に水…

うむ揃ってるな…」

保存食などの準備…

ゲコガシラ先生「窓ガラスの対策もしたし…!」

シートを窓ガラスに張り

ゲコガシラ先生「物が倒れてこない工夫もした…!」

物が倒れぬように金具で止め…

ゲコガシラ先生「さて…あと台風まであと

10日だな…」



【台風までの準備がはやすぎるタイプ】

台風×ミツハ先生

ミツハ先生「えーとたしか…お塩はこっちの引き出しに…」

ガタガタ

ミツハ先生「まあすごい風ですね〜」

ヒュー!!

ミツハ先生「たしかお砂糖はこっちの棚に入っていたような…」

ガシャンガシャン

ミツハ先生「外は荒れてますね〜

台風じゃなきやいいですけど〜」

【台風と気づかずいつも通り過ごすタイプ】

台風×あまね

ザーザー

あまね「さつすがー台風〜

こんな風普通じゃないよ〜」

ヒュー!!

あまね「わーい! わーい! わーい! 台風すつごーい!

どうにかこのエネルギーなにかに

変えられないかな?」

あまねは番傘をさした

ヒュー!!

あまね「わあつ! すつごーい!

また飛んだ〜!」

【台風を楽しみに変えるタイプ】

おまけ

ミジユスケの家の玄関

ミジユスケ「もう! あまねったら!

こんな台風の日に外で遊んでるなんて!

ミジユスケが濡れたあまねを拭いている

あまね「だって〜こんな日しか空飛べないんだもん!」

ミジユスケ「飛んじやいけない日なの! びつくりしたよ!

外見たら見覚えのある顔が飛んでくるだもん!」

